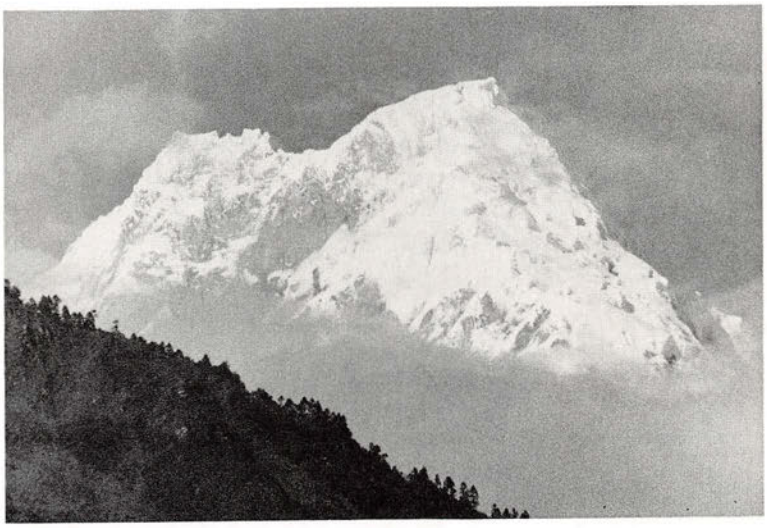
謎の河の秘峰

ギャラ・ペリ



日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

謎の河の秘峰

ギャラ・ペリ

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

謎の河の秘峰

ギャラ・ペリ (7,151m)

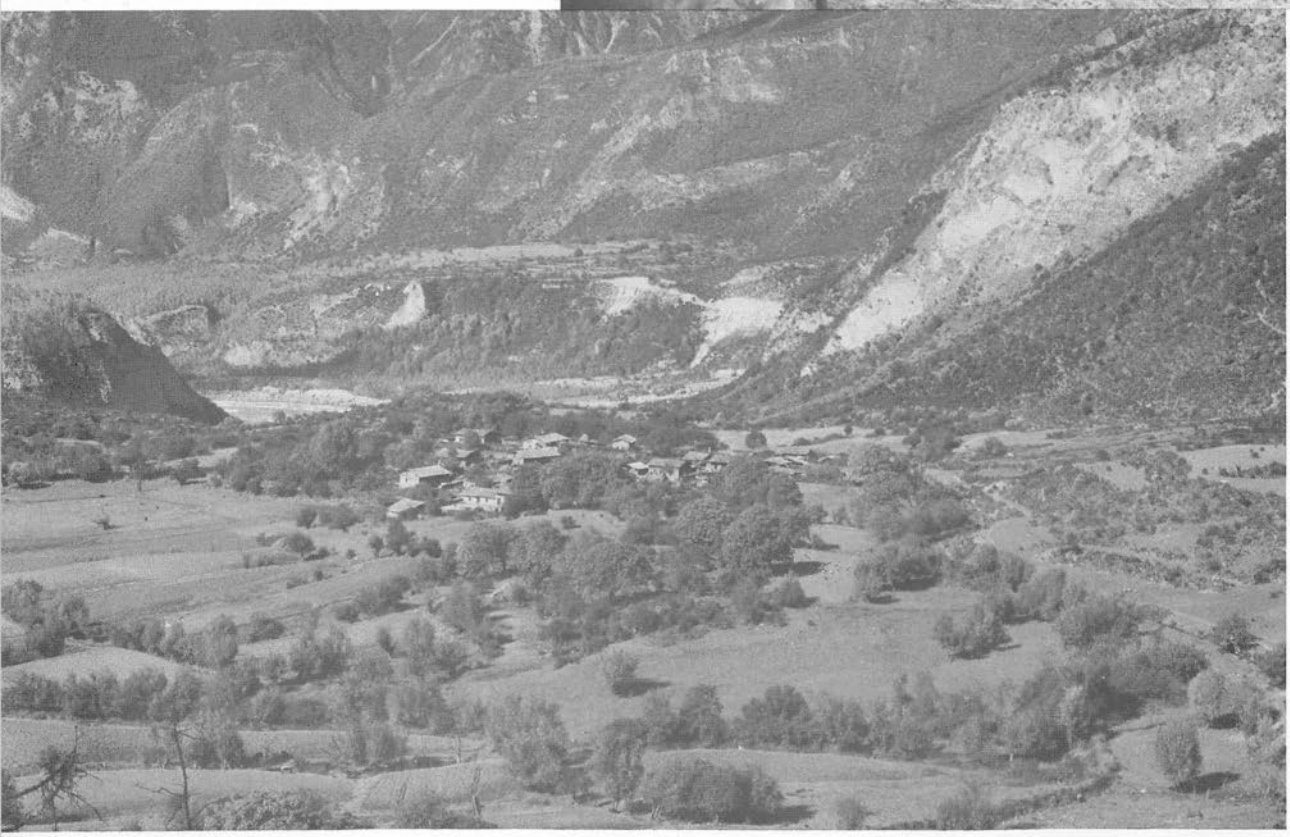
▲ギャラ・ペリ西壁からの雪崩

東チベ

▲ルナングの村落

▼ニディン村の収穫風景

▼ナムチャバルワの麓、キィカル村



ットの村と人

▼ギャラ村の少女

▼東チベットの古老

▲コア舟を担ぐ男

▲東チベットの青い目の犬と子供

雨のキャ

▲連日雨降りの行進が続く

▶雨降る中の小止

◀うっそうとした樹林の中をナタでヤブ払いしながら進む。

ラバン

▲樹林の中での幕営

◀どんなに雨降る中でもポーター達は、器用に火をつけて昼食を取る。

▶雨に備えて早速、竹で小屋がけをするポーター

ミラレパ伝説

▶東チベットにはラマ教の高僧ヨーギ・ミラレパの手形・足跡を祀り崇めているのを見ることができる。

ギャラ・ゴンパ伝説

◀ギャラ村の対岸には激流の中にアシャン・チュ・ゼェの神像が安置されている。

▶ヤル・ツァンポーの流れもギャラ村の対岸付近は恰も大正池を想わせるような穏やかな流れとなる。

▶ギャラ・ペリ川（手前）とヤル・ツァンポーの合流点。ツァンポーの流れは右から左へと流れる。

日中友誼橋

◀ＢＣの激流にはぺのポーターの協力で立派な橋がかけられた。

▶ＢＣからは、ヤル・ツァンポーの対岸にナムチャバルワ山塊が眺められた。

雪稜を

◀モレーン稜のドン詰りに設けられたA・BC（4,200m）

▶C・1～C・2間の洞穴バンドのトラバース

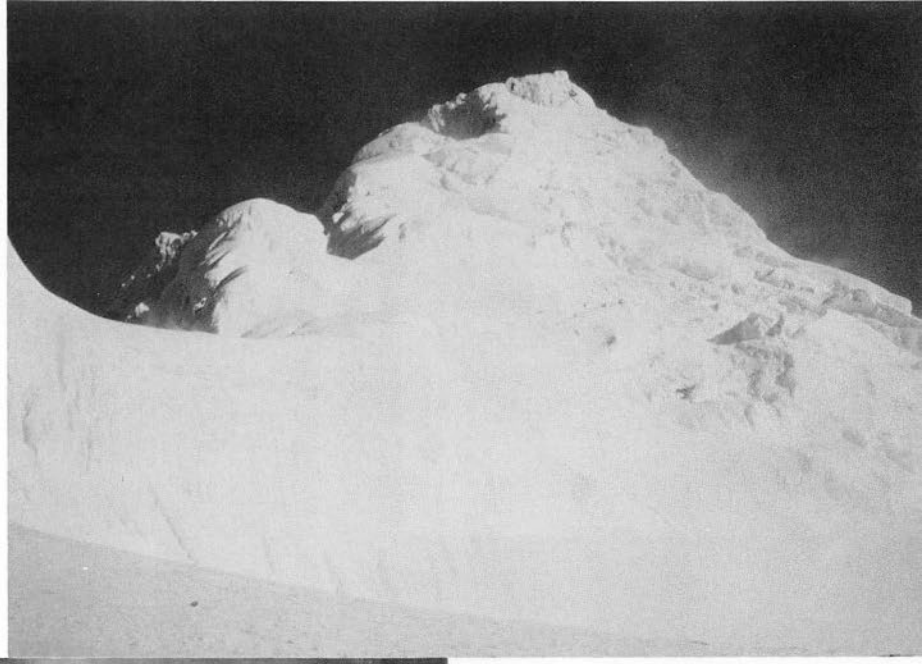
▼C1直下の蟻の刃渡りを行く

越えて

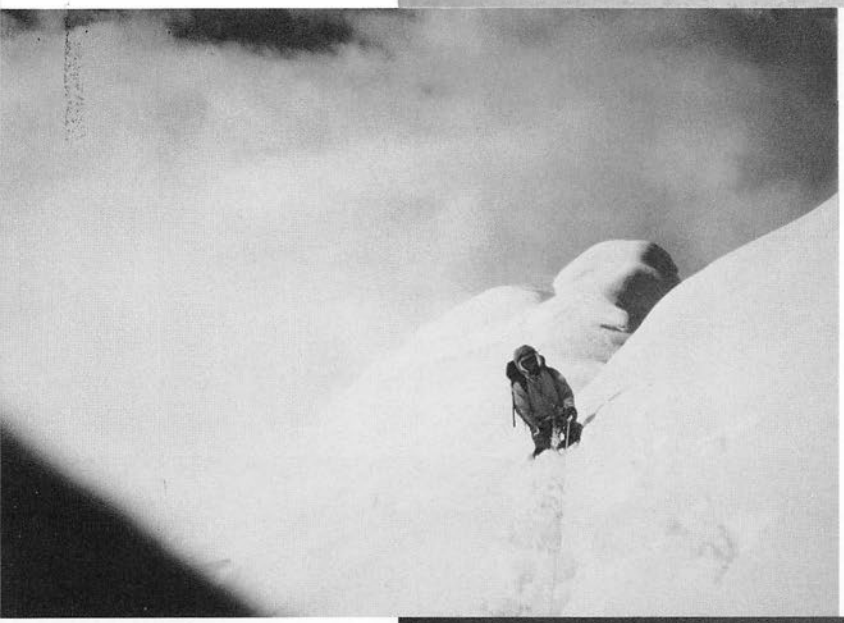
▶眼下にヤル・ツァンポーの流れを俯瞰しながら雪稜を辿る。

◀〃ゼブラ岩〃下部のナイフ・エッジを辿る。

白き頂を目指して



▶南稜に上がるとギャラ・ペリの白い頂が真近に眺められる。



◀頂上雪壁に入っても深いラッセルに苦しめられる。（高度約 6,900m）

▶恐怖の〝ギロチン・トラバース〟を終えて振り返えると対岸にはいつものナムチャバルワが眺められる。

最後の玉峰

ナムチャバルワ(7,782m)

▼ナムチャバルワ北面とヤル・ツァンポーの流れ

序

〝はるばると来つるものかな〟という思いが深い。私にとって、ヒマラヤというものが現実の目標としてとらえられたのは1964年であるから20年余の時が流れている。この間、とりわけ心を動かされてきたのは、ヤルツァンポ大屈曲部であった。ナムチャバルワとギャラ・ペリ。けれど、この二つの山は、政情もあってはるかなまぼろしのような存在に近かった。いつの日か、この両巨峰を現実の目標としてとり組むなどとは考えられもしなかったのである。

まぼろしがまぼろしでなくなってきたのは、80年あたりからであったろうか。83年になると、もうはっきりと時期を特定するまでになってきた。とりわけナムチャバルワは、至上のものとしてＨＡＪの歴史に刻みこまねばならないものとして位置づけられるに至った。ギャラ・ペリは、ナムチャバルワに続く道程に欠かせないものとして考えられた。ギャラ・ペリに到達するアプローチは、別に事細かに報告されているので省くが、ＨＡＪの20年に及ぶ蓄積が結晶した記念碑とも言える登山であったと思うのである。これまで多くの未踏の頂にＨＡＪの足跡が記されてきた。いつの山であっても深くかかわってその珠玉を手にした喜びを頒ちあうことができたのは幸せであったと思うが、とりわけギャラ・ペリに関しては感慨深いものがある。

山に至るアプローチも永かったけれど、山そのものの技術的困難性も第一級のものであった。よくぞ千載一遇の機会を確実に生かし得たものと隊長はじめ隊員のすさまじいまでの迫力に感嘆するのである。ギャラ・ペリに対する思いのたけが測り知れぬ力となって表現されたのだと思う。

深いゴルジュの彼岸には更に大きな夢が存在している。ナムチャバルワに注がれる世界中の登山者の熱っぽい視線は渉外にあたる中で痛いほど感じられる。そして、またぞろ動きだしたわが国特有の妖怪変化のみにくい動きすらちらつくのである。

先発とは言えないＨＡＪであるがナムチャバルワへの道程は歩、一歩と着実に進めてきたつもりであるし、既に動かし難い歴史の事実も確保している。ナムチャバルワに挑む日がくるのは確実であり、遠い将来などというものではないことを断言できる。

ギャラ・ペリを登りながら、そして、ギャラ・ペリを去る時に彼岸に注いだ熱い心のたぎりを隊員諸氏はいつまでも持続してほしい。山は、思い入れによって自らの心に引き寄せられるものである。

未踏である無しは、ことナムチャバルワに関しては全く問題にする必要はない。要は、私たちがつみ重ねてきた歴史と登り方の思想、人間の結集などに照らして忠実であるかどうかである。この国の登山界の一部に存在する許せないものを許してのナムチャバルワであってはいけないのである。

ギャラ・ペリの成功にあたってこのことをあらためて確認し、また明日から果てることのない夢を追い続けて行こうではないか。

1987年７月

日本ヒマラヤ協会
専務理事　稲田定重

ワンチャンスのギャラ・ペリ

隊長 飛田和夫

10月31日　Ｃ２、７：10、36.2度、脈80、くもり、昨夜は良く眠る事が出来た。今朝は、８：00頃までシュラフに入っていた。

８：35　アタック隊より、前夜の打合わせ通り、６：15、Ｃ３出発。

８：30　ＡＣ、快晴・微風、高所滞在が長い為か行動がイマイチ。

10：00　ＢＣと交信、天気はくもり、Ｃ２は一面のガス。小雪が降ったり止んだり。

その後の交信が入ってこない。一体どうなってしまったのか、前日の最高到達点からはどうなのか？。

＜……略……＞

15：03　アタック隊より、山頂直下10米程、前回の最高到達点より５Ｐ、350米登った。ラッセル、クレバスとクレバスの間を通って行動。最後までギャラ・ペリには苦労させられる。

ONになったままのシーバーからやっと声がきた。とにかく苦労している様子だ。昨夜の話しでは山頂に14時頃、それ以上費やした時は引き返す……。あと10米程、もうすぐだ。頑張ってくれ。

16：00　ＢＣと交信、まだ連絡が入らない。

15：03であと10米程、遅い、どうしてしまったのか、３人共じっと待つしかない。

16：35　アタック隊より、15時の地点より３Ｐで頂上稜線に出た。最後の１Ｐは垂直に近い。もう直ぐだ。シーバーからは荒い息使いと風の音。

もう、本当に山頂だろうか、時間が遅い。帰路の心配がよぎる。

16：57　アタック隊より、16：55　山頂に立った。風が強い。視界があまりない。一応写真を撮る。

やっと立ってくれた。３人で握手を交す。やってくれた。帰路の時間を計算する。

ＡＣ　20：00、Ｃ３　21：00～22：00頃か。

今は19：30頃暗くなる。早くＡＣに辿り着いて来れれば。ＡＣに入ればもうＣ３まではすぐだ。ピークに立った嬉びより早くＣ３へ。

19：00　ＢＣと交信。吉報を知らせる。

19：20　アタック隊より、17：15　山頂を出発。19：20　ＡＣに着いた。Ｃ３へ下る。

やった。以外に早くＡＣに着いた。上部はフィックスも無いのでもっと時間がかかるのではないかと考えていたが。

外は暗くなりかけている。夜のトバリはもうすぐだ。20：30頃には尾形登攀隊長の元気な声を待っていたが。シーバーを置いたり、持ったり、を繰返す。天気は悪い。

21：23　21：05に３人無事Ｃ３に到着。暗闇の吹雪の中、やっとＣ３に入った。との事。

長い一日が終った。心身共に疲れたギャラ・ペリ峰にピリオドを打った。夜は興奮の為寝つかれそうもない。

（1986. 10. 31　日誌より）

10月29日　第１回目アタック。尾形、橋本、今村。30日、第２回目アタック。飛田、太田、藤原と失敗し、尾形、橋本、今村による再度の第３回目のアタックで、日程的にも、寒気が吹きすさむ時期的にも、最後に残されたアタックだった。

東チベットに入り、大湾曲部が始まるヤル・ツァンポー河を挟み、世界最高の未踏峰ナムチャバルワと対峙するギャラ・ペリ。地球上で残り少ない7,000ｍの未踏峰と未知の地域。7,151ｍの手付かずの真白な頂きと探検的な要素があったギャラ・ペリを目指せた事は望外の幸せであり、今回逃したら絶対に再度のチャンスはありえない峰、ギャラ・ペリ（7,151ｍ）だった。

目　　次

序 …… 稲田定重
ワンチャンスのギャラ・ペリ …… 飛田和夫
第1部　計　　画
　渉外経緯 …… 9
　偵察隊報告・1985年 …… 12
　計画概要 …… 19
第2部　報　　告
　謎の河の白い山 …… 27
　ギャラ・ペリ登山を終えて …… 41
　登頂日記 …… 43
　機会は瞬時に過ぎ去った …… 45
　ギャラ・ペリ偵察の思い出 …… 46
　ティンベ村の交差いとこ婚とギャラ村の家族構成 …… 47
　ギャラ・ペリの気象 …… 49
　チベット登山の現状 …… 53
　西蔵の開放されている主な高峰 …… 55
　1986年チベット登山隊 …… 57
　ヤル・ツァンポー西・東 …… 59
　ヤル・ツァンポー河大湾曲部探査 …… 68
　加拉白里初次攀登記実（中文報告） …… 73
　A SECRET MOUNTAIN OF RIVER IN REDDLE（英文報告） …… 76
　登山隊員 …… 80
第3部　資　　料
　中国登山の手続き …… 91
　中国登山規則 …… 94
　費用徴収規定 …… 104
　中国の主な解禁峰一覧 …… 108
　西蔵登山年譜 …… 110
　西蔵登山の和文参考資料一覧 …… 115
　ギャラ・ペリ周辺のチベット語 …… 119
ご協力者芳名簿
編　集　後　記

謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ」（山と渓谷 No. 618　1987年2月号）

I 計画

渉外経緯

秘峰ギャラ・ペリ偵察

加拉白里登山計画

渉外経緯

山森欣一

☆中国を目指して

8,000ｍ峰の初登頂が終わり、魅力ある7,000ｍの未踏峰も残り少なくなった時代のヒマラヤでは、様々な型の登山が試みられている。「自然へ還る」いや「ハンディキャップ」だと視点は違っても、結局は登山をスポーツ的に把えようとするのが現在の大勢である。

そのような流れの中にあって、インド、ネパールなど南からのヒマラヤにおいて、長い時間をかけて「未知への憧れ」を実現させてきた日本ヒマラヤ協会にとって、次なる目標は、ヒマラヤ山脈の北に広がる中国であった。

中国を代表するもの、それは高原と砂漠、河と森林そしてそれらを継ぐ公路である。中国の山登りは、ジープで高原を走り、ラクダで砂漠を越え、舟で河を渡りそしてナタとノコギリで道を切り拓きながら入山する。そこには、日本ヒマラヤ協会が一つの柱とする「未踏査」地域があり、そこに行き着く過程は、様々な角度から「困難」の連続であると云えよう。

☆秘峰を！

ナムチャバルワ（7,782ｍ）やガンケル・プンスム（7,541ｍ）が未踏峰の王者とするならば、さしずめギャラ・ペリとクラウン（7,295ｍ）は、人知れずひっそりとたたずむ「秘峰」であった。共に片やナムチャバルワの北に、一方はチョゴリ（8,611ｍ）の北にあり標高も低く二次的な位置づけをされていたのである。発表された写真もギャラ・ペリは二枚、クラウンは一枚だけ。前者は、Ｆ・ベィリーやＫ・ウォードらが、後者はＥ・シプトンが入っただけであった。共に未踏査の匂いの強い地域である。

1983年３月、日本ヒマラヤ協会は初めて中国登山協会を訪問し、今後の中国における活動について協議した。稲田専務理事と私は、この一週間の滞在の中で、私達の会を理解していただくことに最大の努力を払った。ともすると性急になり勝ちな私達の交渉を、中国側は緩急折り混ぜて相手をしてくれた。この初回の協議でクラウン峰の許可をいただいた。（登山隊の報告書は－砂漠の涯の遠き頂き－として刊行された）

ギャラ・ペリについては、中国側との合同登山を申し入れた。しかし、この当時の合同に対する中国登山協会の考えは、経験の多い隊員が少いこともあってか消極的であった。だが私達としては、何としてもこの登山を実現する必要があった。このため６月、11月の訪中、或いは、７月から８月にかけて招請した、中国登山協会代表団の来日の折りをみて、重ねて協議を続けていたのである。

ところが翌1984年１月になると、京都大学と同志社大学の京都グループにナムナニ（グルラマンダータ）

峰の登山許可が降りたことが判った。私達もかねてから西ネパールから普蘭（旧タクラコット）を経てナムナニ峰、カン・リンポチエ峰（カイラス）からラサへ抜ける計画を申請していただけに衝撃であった。（詳細はヒマラヤ156号参照）このため、計画を練り直して中国内だけのルートによるナムナニ、カイラス偵察を申請し、あわせて、ギャラ・ペリの偵察も1984年に実施し、本隊を翌年春に派遣すべく申請書を提出したのである。

☆三者合同隊実現せず

これに対して中国登山協会史占春副主席より、日本側からギャラ・ペリに申請の出ている、日本ヒマラヤ協会、大分県山岳連盟、神戸大学の三者が合同で挑戦してはどうか？との提案がなされたのであった。

勿論どの組織も単独で実施するために計画を提出しているのであるから、合同となると二の足を踏む。まして三者となれば相当の覚悟が必要である。だが、周囲の情況は単独を許さないものがあった。私達は早速、大分県山岳連盟と連絡をとり、合同の受皿作りを進めたのであった。

折しも、ナムナニの協議のために７月に史占春副主席が来日するとの情報を得て、史占春氏を交えて三者が京都に於て協議すべく設定したのである。７月18日京都にて行われた四者会談で神戸大学は合同に同意しなかった。更に三者にて協議をすすめる史占春氏に応えて、８月に東京で協議の場を持ったが、神戸大学は欠席し回答もなかった。苦慮した稲田専務理事が電話にて確認したところ、神戸大学には合同の意思は無いとの回答であった。ここに至って日本ヒマラヤ協会と大分県山岳連盟は、この協議の経緯を報告すると同時に、二者による合同ギャラ・ペリ登山を申請し、中国登山協会から承認されたのであった。

☆偵察隊の派遣

11月には、大分から伊東亨氏（大分県山岳連盟海外登山実行委員会委員長）が上京し、遠藤登副会長宅にて山森、尾形両常務理事と、偵察について協議した。大分岳連は、1985年にチベットのニンチンカンサ（7,191ｍ）峰に登山隊を派遣し、秋には東チベット、ヤルツァンポー沿いにトレッキング隊を出すとのことであった。

1985年７月には、稲田、山森が北京からラサを訪問し、具体的にこの秋のギャラ・ペリ偵察（４名）について中国側の了解を得た。帰国した山森は、大分に飛び偵察隊について協議を行った。大分側からは、首藤副会長、伊東氏らが出席、翌日には偵察隊員である安東洋一、上野巧両氏と伊東氏を交えて、偵察についての分担を行った。その結果、食糧については大分隊のトレッキング班で賄えるのでそれを利用し、ＨＡＪの装備を使用することで合意した。

この時点で大分としては、偵察隊をトレッキングに便乗させて経費の軽減をしたい意向であったが、トレッキング隊は、ムツゴロウ撮影班を同道することや、時期が９月下旬になることなどからＨＡＪとしては、あくまで偵察隊は独自に出すことが本隊の成功につながるとの考えであった。

この段階で伊東氏から「大分岳連としては、本年度のチベット遠征推進中なので来年度ギャラ・ペリ計画はもとより、本偵察についても岳連としての決裁はなされていないが、幹部は了承しているので心配しないで欲しい」との話があった。

こうしてＨＡＪ側は山森とＫ２登山に参加している熊田雅史の２名、大分は安東、上野の２名、山森が隊長を引き受けていることで合意した。しかし当初から大分側の偵察に関する意気込みは、不たしかなものであった。結局、その後、安東氏は休暇がとれないことを理由に８月に脱落し、上野氏も大分側の経費の負担の問題などから、偵察隊を止めてトレッキング隊に参加した。

ＨＡＪ側では、Ｋ２に参加していた熊田が帰国直前にヘリコプターで運ばれる事故となり、８月中旬急拠、インドから帰国したばかりの三浦敏弘をくどいて、山森、三浦の二名による偵察隊を派遣することとなったのである。

☆単独隊で実施へ

偵察から帰国し、報告書をまとめたのは12月に入ってからであった。その後12月に稲田、山森が北京のＣＭＡを訪問した折りに、ＣＭＡからギャラ・ペリ本登山について１月中に実施計画を提出するよう求められた。これは、特殊な地域のためポーター手配等早急にする必要がある等のためでもあった。ところが、大分岳連は、ニンチンカンサの登頂に失敗したが、更に1986年春に再挑戦したい旨ＣＭＡに依頼していることが判明した。このため、ＣＭＡ側としては、本当にＨＡＪと大分岳連合同隊が可能なのかをも考慮したものと思われた。そこで、ＨＡＪとしてはＣＭＡに確認したところ、「既に許可を出しているのであるから、合同隊でも、単独隊でも構わない」との見解であった。

帰国後、ＨＡＪとして正式に大分岳連に対して1986年ギャラ・ペリ登山に対する提案と意思確認を行ったが、２度の文書による照会にも回答がなく、ＣＭＡから要請されている計画の提出時期が大幅に遅れることになるため、1986年２月８日に最終文書にてＨＡＪ側の考えをあきらかにして、大分岳連との合同をあきらめ、単独実施に踏み切ったのであった。

本登山が、最後まで根張り強く頂上に固執できた裏には、このような実現に至るまでの経緯を充分に知り尽した隊長や登攀隊長の信念があったからに他ならない。

（注：文中登場人物の役職名は、その当時の役職を記しました。）

▲ツァンポーの渡河には、50年前と同じ渡し舟が使われていた。

〔はじめに〕

ーヤル・ツァンポー河は世界で最も山岳重畳とした困難で荒涼たる地帯を縫って、南チベットの最も開けた地方をぬけて真東に流れている。ー これは「ヒマラヤの謎の河」の一節である。ヤル・ツァンポー河は、今や「謎の河」ではなくなったが、大湾曲部だけは依然として「謎」である。その大湾曲部に、この大河「ヤル・ツァンポ」を挟んで二つの注目すべき未踏の高峰がある。南にナムチャ・バルワ、北にギャラ・ペリである。ナムチャ・バルワは既に中国隊が二度にわたり登頂を試みたものの、現在もその頂を明け渡していない。そして、もう一つのギャラ・ペリは、試登はおろか写真すらほとんどないのである。

ＨＡＪでは、国内の他会との合同で来年に登山隊を派遣すべく許可を取得した。ギャラ・ペリは、チベット解放後はじめて登山者を受け入れることになったのである。今回の偵察は４人で実施する計画であったが他会の都合により、ＨＡＪのメンバー２名によってその西面側が探られた。以下はその概要報告である。

〔北面・東面を断念する〕

９月10日、東京を発った三浦と私は、北京、成都と飛行機を乗り継ぎ12日にラサに入った。成都からの機内では、ナムチャ、ギャラの両峰の雄姿を充分に見ることができ心は早やくもヤル・ツァンポーへと飛んだ。ところが登山協会からの迎えが来ない。止むを得ず市内行きのバスに乗って行くと車が長蛇の列に作って止っていた。事故らしいとの話が伝わり、先頭まで行ってみると、その事故車は我々を迎えに来た登山協会のパジェロであった。パジェロの左側ドアはトラクターの車体に張り付き運転者は即死であった。

最初から縁起の良くない出だしであったが、ラサでの準備を終えて15日には林芝へ向った。ラサから東へ約150㎞行くと標高約5,000ｍのメラ峠を越える。この峠の周辺にはヤクを追う遊牧の民がいた。峠を一気に下り清流が目につきはじめると、標高約3,300ｍ付近から大きな木が目立つようになり、行き交うトラックもほとんどが木材を積んでいる。ラサから８時間ほどで「八一鎮」に到着した。風が強く砂塵が舞う中、体育学校の宿舎に入る。チベットの登山協会はもともとこの地にあったらしい。北京の許競先生の指導の下にラサの貢布先生らもこの学校の建設に携わったとのことである。

翌日は林芝に向かった。八一鎮から車で20分も行くと、この地方の中心地である「林芝」である。ここでギャラペリ北面や東面の情報を集めていると、驚いたことにその内の一人が、ノイスが編集

した「World Atlas of Mountaineering」に載っているギャラペリの写真と全く同一のものを持って来た。聞けば1983年２月に自分が撮ったものだと云う。勇躍東面をめざして林芝を後にし、「東久」へと向かう。途中4,700ｍの峠を越えて、アルプス風の谷「ルナング」を経て、北面の村である東久に着く。既に標高は2,570ｍまで下がっている。

打合わせでは、我々が目指す北面は全く人が入っていないこと。東面は「門仲」までは行けるが、荷を運ぶ人を集めるのに４日間必要。キャラバンは道を切り拓いて、はいつくばって往復10日間必要であること。来年の本隊時でもポーターは30名位集めることはできる。等々、偵察期間の短かい我隊にとっては誠に残酷な状況であった。ここでも再度東面の写真を見せられ、心は早やくもその姿に引きつけられてはいるものの、偵察隊の任務と来年本隊時の状況を考えると、到底東面に入ることは不可能（４人であれば何とか分散できた！と後悔する）と判断し、東面行を断念した。

〔汎からBHまで〕

東久から再び八一鎮に戻った我々は、17日小雨の中を「汎」に向かった。公安局でヤル・ツァンポー河の橋を渡る許可書をもらい南へ下る。１時間ほどでヤル・ツァンポー河を渡り更に上流に向かい、汎を所轄している「米林」に行く。これは、汎付近で馬やポーターを手配するためには、県の承認が必要なためである。松林や白樺の続く素晴らしい道を走ると、この付近ではとてつもなく美しい米林となる。チンコー酒を一杯飲んで、汎へ向かう。ヤル・ツァンポー右岸の道は下流に進むにしたがって徐々に細くなり、右側から幾本もの川が合流し、水流の浅瀬を探しながら、ジープとトラックは走る。

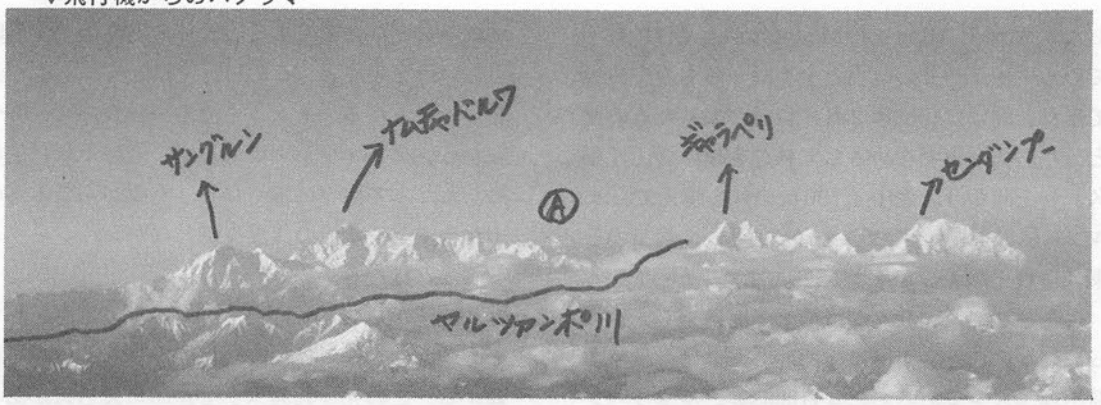
八一鎮から150㎞ほどで汎（ペ）に到着。汎でこの地区の責任者に偵察の目的を話し、協力を依頼する。この先「大渡卡」で左岸に渡る舟があるとのことなので出発する。道はかろうじてあるような場所であるが、「ニディン」の部落まで行くと全く渡河できるような水量ではなく「ペ」で渡らなければならない！とのこと。我々は結局彼等の「塩」を運ぶために来たようなものであった。

再びペに戻り前後策を協議する。結局明日この汎区の幹部が一緒に左岸に渡り、馬やポーターの手配をすることになる。中国登山では通訳の占める比重は大きい。連絡官と通訳と隊長がうまく連携をとれる状態でないと行く先々で不都合が生じる。今回の通訳は、21歳の大学生であるが私達とは馬が合った。連絡官はチベット人であるが、チョモランマから下山したばかりなのと、連絡官としては初めての隊であるため、少々とまどいがあったようだ。酒の大好きな人である。

９月18日、昨夜は満天の星空だったので好天を期待したが本日もどんよりとした空で今にも降り

白水社刊「ヒマラヤの高峰」より

▼飛行機からのパノラマ



出しそうである。10時にはヤル・ツァンポー河岸に行き舟を待つ。向こう岸に舟が二隻見えるが、なかなか来ない。2時間待ってようやく舟が来た。馬や自転車が乗っている舟は、丸木舟を2つ横につないだ簡単なものであった。12人と約500kgほどの荷を乗せて10分間ほどで左岸に渡った。

連絡官とペの幹部が村へ馬を呼びに行った。結局彼等が帰って来たのは5時間後であった。4頭建ての馬車に荷を積み、ジープ一台位は通れそうな道を1時間ほど行くと「ティンベ」村であった。猫の額ほどの草地にテントを張り、夕食をしながら、村の幹部達と話し合う。

ここで判ったことは、①この地方は定量経済なので人（ポーター）を集めるのは困難。②人は荷を担いでも15kg。③人を集めるのには通知を出すために時間がかかる。④ギャラ・ペリとは呼ばないで普通は「ギャラツェドン」と呼ぶ。⑤途中から馬は使えず人が運ぶ。⑥道がないのでガイドを連れて行く。彼はギャラツェドンの近くまで行ったことがある。

9月20日、11時過ぎに馬が10頭来た。落葉樹の中をのんびりと進み、途中スースンの部落を経て15時過ぎ本日の泊り場タリンに到着。標高約3,000m。我々のポーターにインドへ逃げてビルクッパに25年いたチベット人がいた。母親がスースンにいて年老いているため、カトマンズ～ザンムー経由で2年前に戻って来たと話す。母親が死んだら再びインドへ戻りたいとのことであった。ラサの博物館には、インドから舞い戻った人々の統計があったが実態はどうなのであろうか。

21日、昨夜から12時間雨であった。ここで荷物が多すぎて運べない（人がいない）と申し入れが

▲BC付近からのナムチャ・バルワ主峰北面

あり食糧を中心に荷をデポした。（BHから取りに来る約束）13時半馬で出発。15時半チュベでキャンプとなる。一軒だけ家があり多分左岸では、ここが最後の人家である。

22日、久し振りに雨が降らない朝であった。ヤル・ツァンポー河は、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリの支尾根によって曲がりに曲っている。10時40分に出発し、雑木の多くなった踏み跡を探しながら進み、15時キャンプ地着。完全に林の中である。夕方木々の間からようやくギャラ・ペリの雄姿を垣間見ることができた。下部の岩壁が異様に強調されて見える。

23日、朝8時で8℃標高2,810m。9時30分出発。踏跡が完全になくなり、鉈目を頼りに雑木を払いながらの前進である。沢に出合えば立木を倒しての橋作りで1時間はかかる。昼は2時間お茶を湧してじっくり休む。歩けば15分で30分休む。これの繰り返しで背負っている隊荷は15kg。泣けてくるキャラバンである。ポーターの焚火の煙に刺激されて、上の岩壁にある巣から大型のハチが飛んで来て大騒ぎだ。連絡官やコックも顔や頭を刺された様子。16時過ぎギャラの対岸付近のカルカでキャンプ。

24日、昨日はキャンプ地に着いてからポーター側から様々な要求があった。①ここまで道が悪く疲れたので明日は休み、②明日行くなら1日分給料をくれ、今日はBHに着くとかで意外に早く9時過ぎに出発したが、結局は15時50分水のある沢に出た所でキャンプ（20時迄明るいですよ）

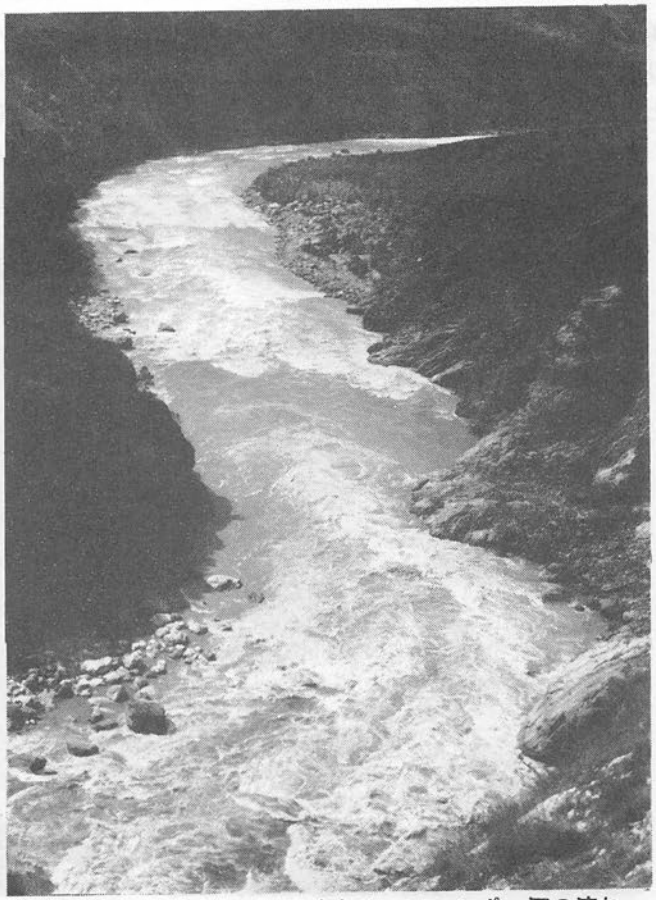
25日、相変わらずの雨。相変わらずの要求。面倒くさいので10時過ぎに一言〝行こう〟と言いテントをたたむ。11時40分出発。自分の荷物をデポしたりして、今日は本当にBHに着くつもりらしい。雑木も激しくなり伐採しながら進み16時沢に出る。橋を架けている内に、「ここまでの約束なので帰る」と云う。止むを得ず、下に見える河原をBHとする事にしてそこまで荷を運ばせる。連絡官の説明では4人を残してデポした荷物の荷上げに従事させると云うので了承した。

〔偵察活動〕

BHで休養をとった後27日には、連絡官、コック、通訳の5人で上部のルート偵察に向った。踏跡がある雑木と竹林を過ぎると、突然シダ類の密生する広場となる。ここは大きな獣が遊んだと思われる跡があり気持ちが悪い。あちこちと迷いながら獣道を拾いながらようやく、下の河原が見える所まで出る。ところがここから河床へ降りるためには、背丈が2～3m位あるトゲの木の密生した林を切り拓らかなければならなかった。

翌日からルート整備と荷上げを2人で行う。この頃、対岸のギャラ村から猟師が4人と犬が8頭登ってきた。熊を撃ちに来たと恐しい事を言う。通訳は、我々が上部に行っている間に猟師が子熊を担いで来たと報告。

9月30日に10日間分の食糧を持って2人で上部



▲ヤル・ツァンポー河の流れ

へ移動した。更に氷河上約3,550mに今回のBCを設営した10月2日には、天候は完全に好天に向かい偵察期間中持続すると云う幸運に恵まれた。

10月8日には、充分とはいかないにしても、一通りの登路偵察を終えてBHに帰幕した。

ギャラ・ペリ西面に喰い込む氷河〔仮称・ギャラ・ペリ氷河〕は氷河としての規模は小さい。この氷河は、ギャラ・ペリ西峰（双耳峰である）から西に延びる稜線を経てセンダンプー（6,309mとなっているが、空から見た印象などを加味してギャラ・ペリより300～400m程度しか低くないのではないかと思う）となり、更にセンダンプーから南東に延びる稜線と、ギャラ・ペリ主峰の途中から南に延びる稜線に囲まれ、馬蹄形状を成している。主氷河の中央部の幅をロープで測ってみたら約300mであった。

ギャラ・ペリ西面は、双耳峰となる主峰南稜と西峰にかけて傾斜の強い岩壁層を形造っている。この中に何本かの稜があるが、ルートとしては、主峰南稜上に突き上げる2本を予定ルートとして偵察した。南稜上に出た所からは忠実に南稜を辿り頂上直下で西峰へ続く稜線に出て頂上へ至ることになるだろう。

センダンプー峰については、空から見ても大きな山と云う印象であったが、実際にその下に立ってみても、ギャラ・ペリと800m低い山とは到底信じられないほど立派な山姿であった。特にその南東面は純白な雪一色であった。登攀に価する山と云えるだろう。

ナムチャ・バルワ峰北面についても触れなければならないだろう。頂上から北西面に長大な尾根が出ているが、この稜線上には立派なピークが4つほど見られた。主峰は西面側から見た頂上岩壁が立派な三角錘であるのと同様に北面側も三角錘状となっている。北面側には大きな氷河が見られるが、残念ながらペマコウチュンまで隊荷を輸送するために空輸以外には考えられず、現状では北面からの登山は困難であろう。

〔BCからラサまで〕

好天気の到来と共に少し樹々も紅葉し始めた10月8日、BCを撤収しBHに下った。9日夕方にはギャラ村から10人（女2人）のポーターがやって来た。翌日には村の対岸まで下り、11日にはヤル・ツァンポー河をイカダで渡りギャラ村に入った。ギャラ村は12家族61人が住んでいる。この河の最奥の部落である。穀物の集積場の広場にテントを張った我々は、見せ物の様なものであった。

▲ギャラ・ペリ西壁
（右手前の稜が第一候補ルート）

10月12日、村の住民の半分位が、村はずれまで我々を見送ってくれた。対岸の道に比べるとまるで天国の様な道を進む。樹々はすっかり色づき、時折り河床に近づく所では、丁度秋の上高地、徳沢の様な雰囲気である。一ケ所岩壁帯に道が拓かれており、ここの通過では馬から荷を外し人が運ばなければならなかった。午後4時過ぎ大分県のトレッキング・チーム6人がキャンプしている場所に到着し、我々もテントを張った。

翌日は長い道程となった。途中キイカルの部落の手前から雲の間にナムチャ・バルワが見えた。手の届きそうな所に聳え立つ雄姿に感激する。往路にデポした荷物が結局はBHに上がらなかったため、BHから下山する日から昼食は抜きになっていた。この日は結局出発してから11時間後の20時半に真暗なペに到着した。

10月15日　ペの招待所を出発。途中大分隊のキャンプに寄りムツゴロウ先生に逢う。米林県に立寄り副主席等数名の幹部に逢って、来年の登山についての協力を依頼する。翌日は紅葉の一段と美しくなった道を走り（ジープのスプリング板が折れて3時間待ちとなったが）少々雪の積った峠を越して、20時50分ラサの招待所に到着した。

〔おわりに〕

ギャラ・ペリ登山を左右する第一の要因は、ヤル・ツァンポー河の水位である。ラサ、八一鎮、林芝、米林、汊、その他この左右両岸の住民達の渡河時期に対する意見は一致しない。今回の偵察の結果から推定して登山時期を決定しなければならないが、年によって当然時期のズレがある事を前提としなければならないだろう。

第二は、ギャラ・ペリ周辺の気候である。基本的にはモンスーン気候ではないか？と考えて見たが、これも甚々資料不足である。雪の来る時期や、積雪量についてもまちまちの回答であったが、11月には南面、西面に雪が到来するようである。

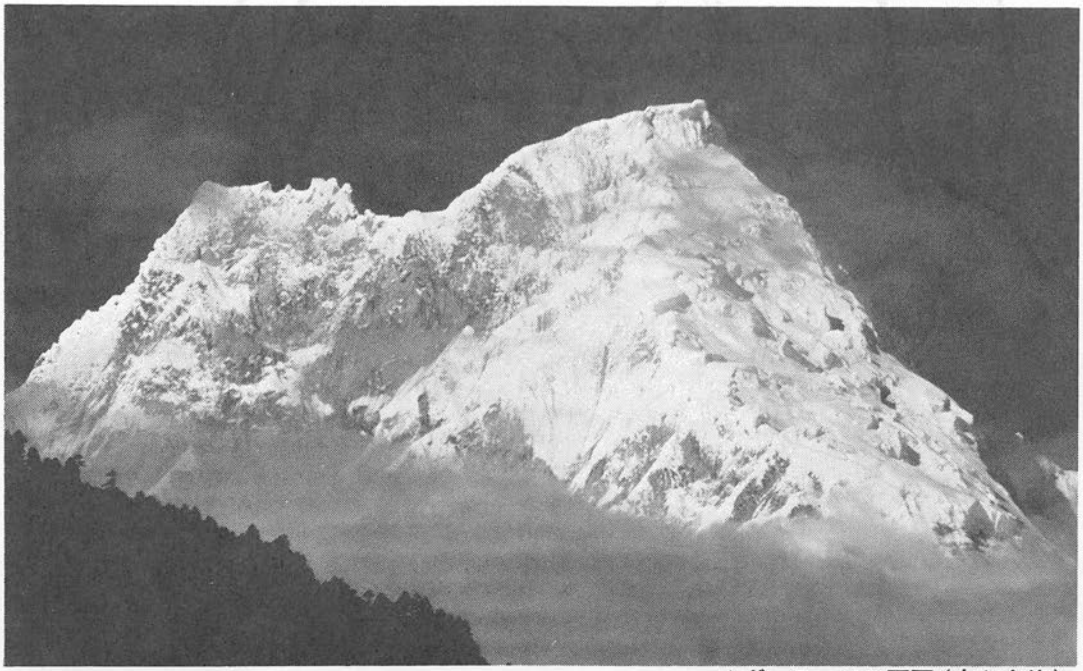
第三は、ポーターである。ネパール、インド、パキスタン等と違って、ポーターは県の命令によって動き、荷を担ぐ習慣がないのである。そして人口が圧倒的に少い。100人のポーターを同時に雇用することは困難である。

その他動物や植物による被害も予想されるが、山自体は四方から可能性のあるルートが頂上へ続いており、登山隊にとっては魅力ある山と言えるだろう。　（山森欣一）

日本ヒマラヤ協会佳拉白里偵察隊

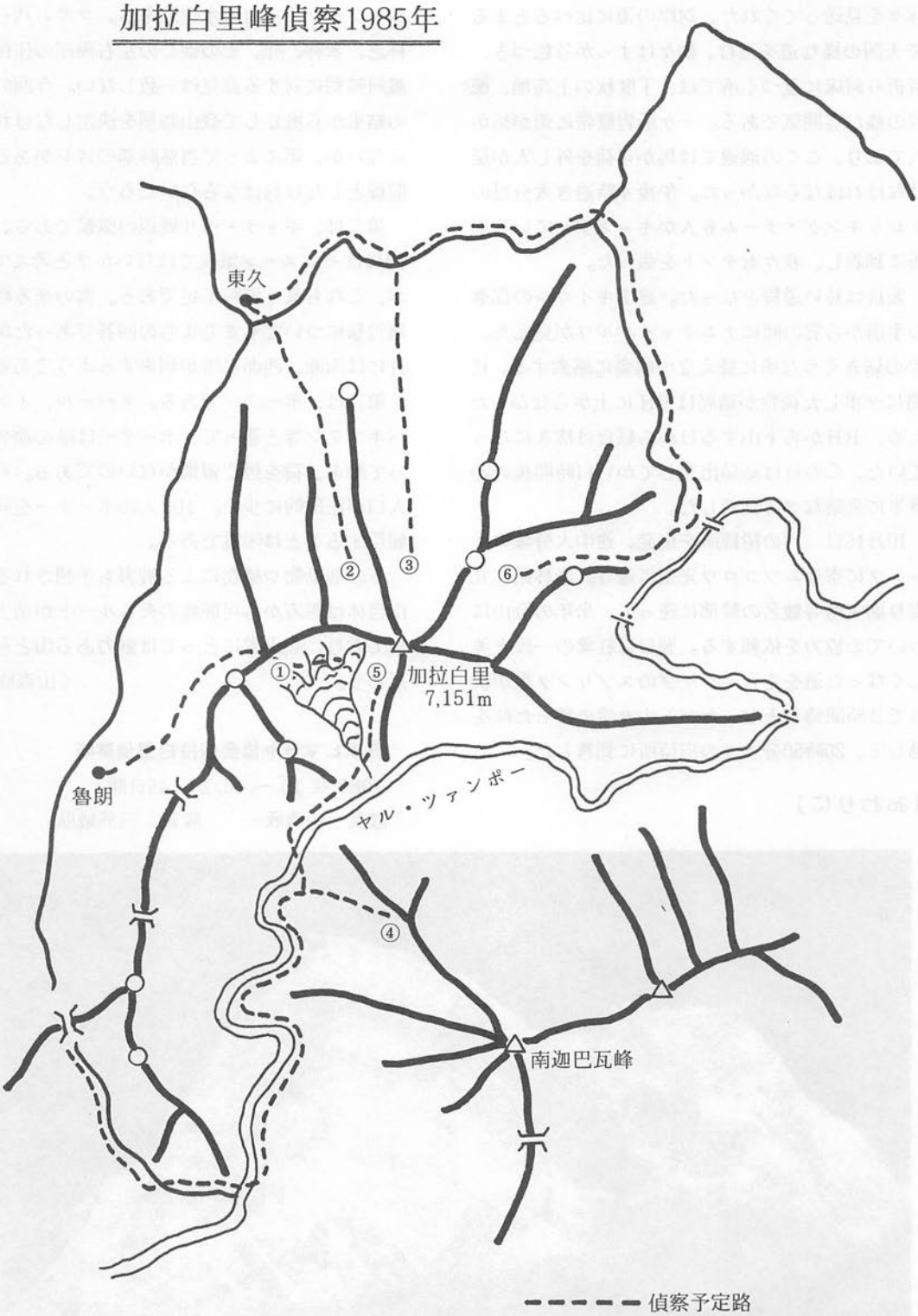
1985. 9. 10 ～ 10. 24（45日間）

隊長　山森欣一　　隊員　三浦敏弘



▲ギャラ・ペリ西面（右が主峰）

加拉白里峰偵察1985年



加拉白里登山計画

1986年

—GYALA-PERI 7,151m—

趣　旨

日本ヒマラヤ協会は、1967年の創立以来、高地アジアの山々を対象に連続的な登山と調査・研究活動を実践しながらこの分野をリードし、その発展に尽力してまいりました。

このたび、私達は地球上に残された最後の輝きとも云うべき、東チベットのヤル・ツァンポー河大湾曲部に聳える未踏の高峰、加拉白里峰（ギャラ・ペリ、7,151m）に登山隊を派遣することになりました。

チベット西部の聖地・カイラス山の麓付近に源を発したヤル・ツァンポー河は、チベット高原を東流し、やがてチベットの東で突然流れを南西に転じる大湾曲部を成し、その名をブラマプトラ河と変えてインドのアッサム平原へと流れ落ち、さらにこの悠久なる流れはバングラディシュを通ってベンガル湾へと注いでおります。

1913年にこの地を訪れたF.M. ベイリーは、その書「ヒマラヤの謎の河」の中で、— ヤル・ツァンポー河は世界で最も山岳重畳とした困難で荒涼たる地帯を縫って、南チベットの最も開けた地方を抜けて真東に流れている。— と記しております。この河も今や「謎の河」ではなくなりましたが、大湾曲部だけは依然として「謎」のままです。この大湾曲部にツァンポーの大河を挟んで二つの垂涎の高峰が対峙しております。南にナムチャ・バルワ、北にギャラ・ペリの玉峰がそうです。ナムチャ・バルワは既に中国隊が二度にわたり登頂を試みましたが、未だその頂は明け渡されておりません。そして、もう一方のギャラ・ペリは、試登はおろか写真すら殆ど無いまま深いベールに覆われてきた秘峰であります。

本会では、長年にわたる中国登山協会及び西蔵登山協会との継続折衝の結果、この秘峰の登山許可を取得することができました。本会では、今年の本隊派遣を前に昨秋、2名の偵察隊を派遣し、同峰の西面側をつぶさに偵察してまいりました。本隊では、偵察結果をもとに南西面から攻略する計画であります。

地球上に残された7,000m台の未踏峰も数少なくなった現在、この好機を最大限に活用して、目標とするギャラ・ペリ峰のみならず自然科学、人文科学上深い興味がもたれるこの地域について様々な成果をもたらす所存であります。

何卒、本登山隊の趣旨を御理解の上、皆様の絶大なご支援を賜りますようお願い申し上げます。

計画の概要

1. 隊の名称

HAJ チベット（ギャラ・ペリ峰）登山隊
HAJ Mt. GYALA-PERI（XIZANG）Exp.1986
（略称） HGE－86

2. 目標の山

中華人民共和国西蔵自治区内
加拉白里峰（ギャラ・ペリ峰）
Mt. Gyala Peri（7,151m）

3. 登山期間

1986年9月1日～11月21日（82日間）

4. 目　的

1）ギャラ・ペリ峰の初登頂
2）ヤル・ツァンポー河大湾曲部の探検調査
3）中国登山界との親善交流

5. 主　催

日本ヒマラヤ協会

6. 後　援

（社）日中協会

7. 隊の構成

隊　長　飛田和夫
隊　員　5名　　連絡官　1名
通　訳　1名　　コック　1名（計9名）

8. 留守本部

〒160 東京都新宿区高田馬場3－23－1
淀橋食糧ビル506号
日本ヒマラヤ協会 ☎03－367－8521

9. 現地連絡先

中華人民共和国西蔵自治区拉薩市沿河路
中国西蔵自治区登山協会
☎22981

日程概要

9月1日　成田発→北京着（JAL－781）
2日　北京滞在
3日　北京→成都（by Air）
4日　成都→ラサ（by Air）
5日～7日　ラサ滞在（隊荷整理）
8日　ラサ→八一鎮（by ジープ、トラック）
9日　八一鎮→ペ（by ジープ、トラック）
10日～13日　ペ滞在（ヤル・ツァンポー河の隊荷渡し）
14日　ティンベ→チュベ
15日　チュベ→ギャラ対岸
18日　BC建設
20日～11月3日　登山期間（45日間）
6日　BC撤収、帰路キャラバン開始
14日　八一鎮帰着
15日　八一鎮→ラサ着
18日　ラサ→成都（by Air）
20日　成都→北京（by Air）
21日　北京→成田（JAL－782）

加拉白里峰概要

加拉白里峰は、ラサの東京約375㎞の北緯29°49′、東経94°59′の所に位置する。

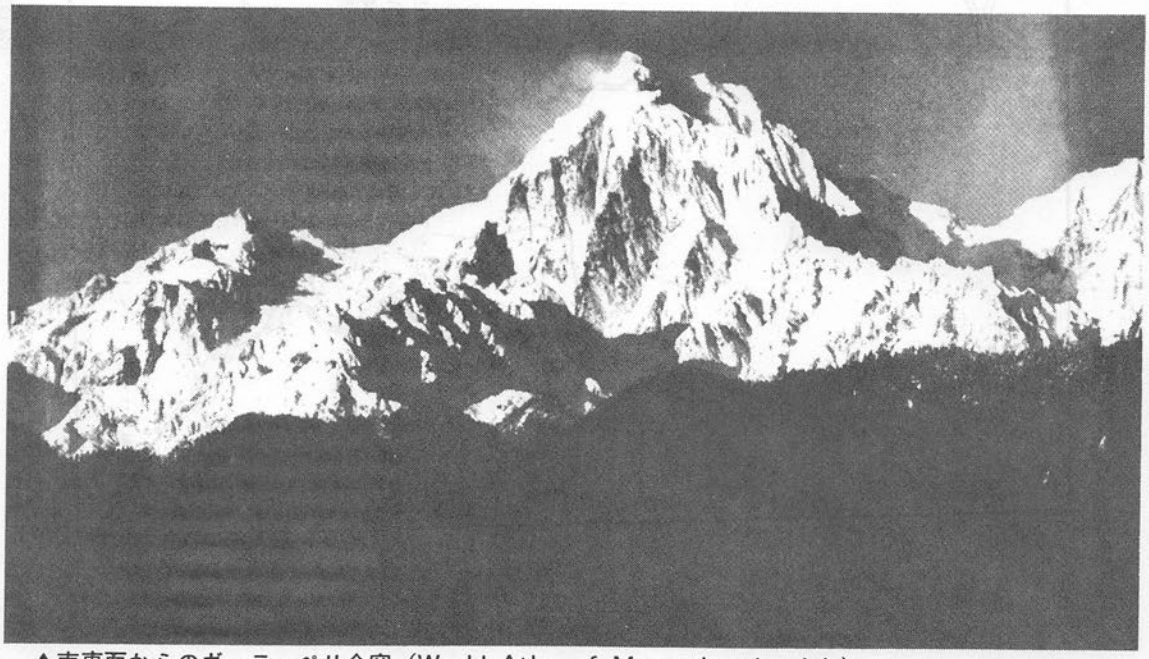
「謎の河」として知られるヤル・ツァンポー河の探検踏査にこの地を訪れたF. M. ベイリーは、加拉白里峰を望見した時の模様を次のように書き記している。

「ミピの下から、その匹敵者ナムチャ・バルワに半ばかくれて見えていた雪のピークは、今、その威容を眼前にあらわした。ギャラ・ペリ、7,151ｍである。この山自体、世界の巨峰であることはもちろんであるが、さらに驚くべきことは、ナムチャ・バルワ、7,756ｍとの距離はわずか20.8キロであり、ツァンポー河は両者の間、ギャラ・ペリより4,267ｍ下、ナムチャ・バルワより4,877ｍ下を流れているという事実であった。これはグランド・キャニオンにおけるコロラド川のように、驚くべき水の力を示すものといえよう。」

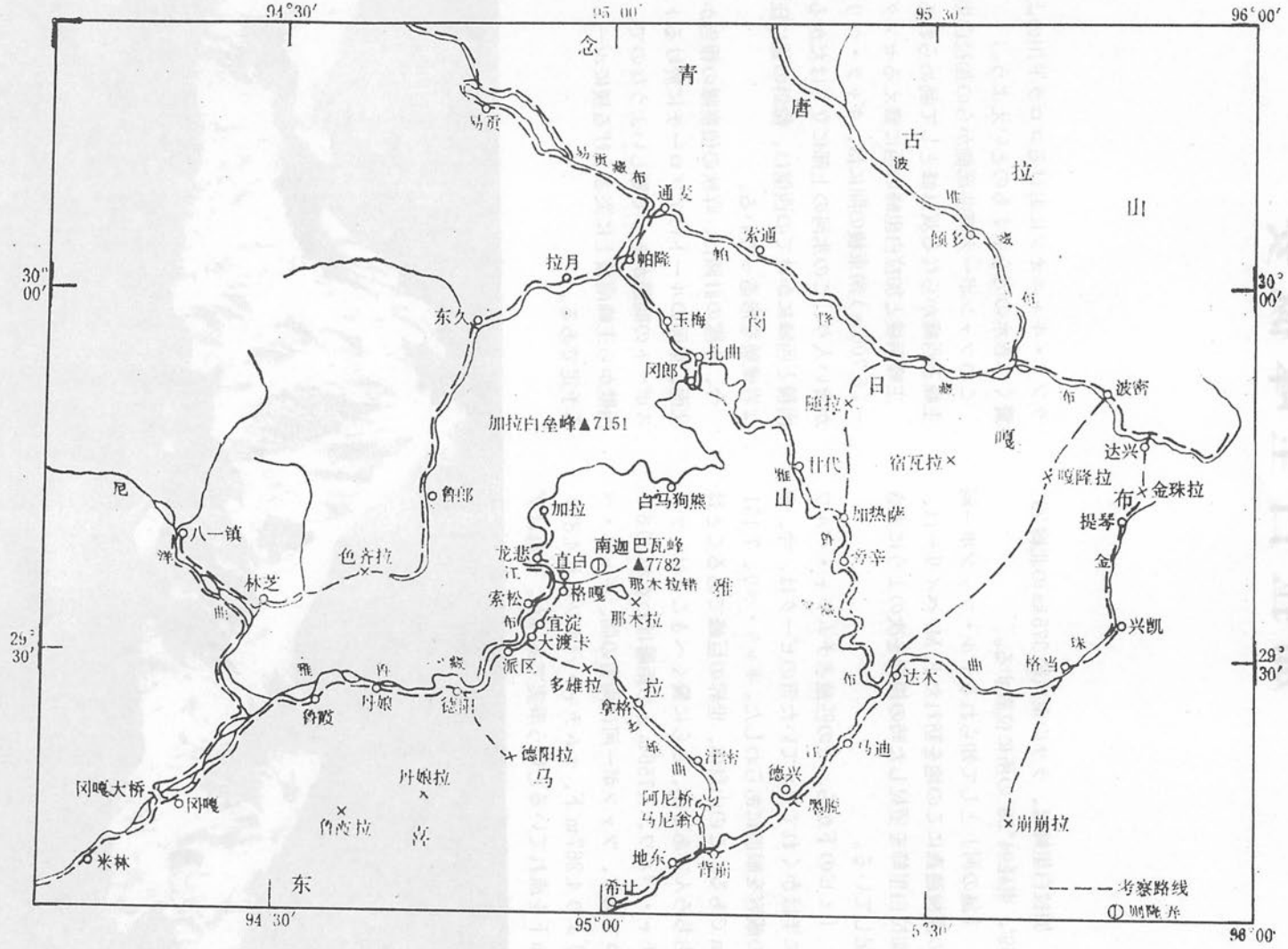
このツァンポー大湾曲部側からの加拉白里峰は主峰と西峰からなる双耳峰として眺められる。

主峰南稜と加拉白里峰の西に聳えるセンダンプー（6,700ｍ）南東稜の間には、ギャラ・ペリ氷河が食い入り、この氷河の上部に立ちはだかる主峰南稜と西峰にかけての西壁は、傾斜の強い圧倒的な岩壁層を形造っている。

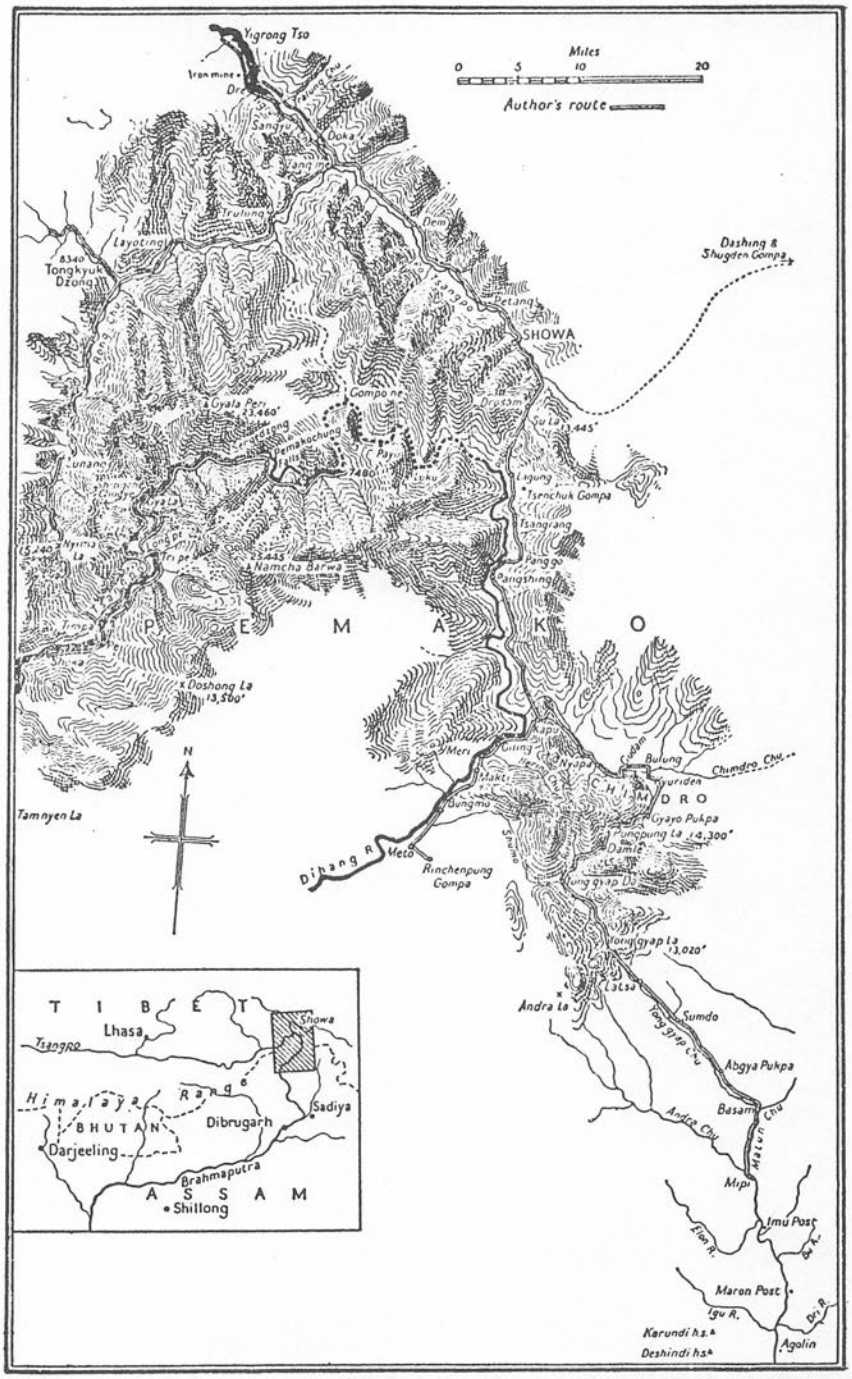
今、本隊の計画は、昨秋の偵察隊の報告から、北面、東面のルートはアプローチに於けるトランスポートの問題があって難しいようなので、この西壁から主峰南稜上に突き上げる稜にルートを取る予定である。



▲南東面からのギャラ・ペリ全容（World Atlas of Mountaineering より）


94°30′
95°00′
95°30′
96°00′
30°00′
29°30′
念
青
唐
古
拉
山
易贡
易贡藏布
通麦
索通
帕隆
拉月
东久
玉梅
扎曲
冈郎
加拉白垒峰▲7151
鲁郎
加拉
白马狗熊
南迦巴瓦峰
▲7782
龙悲
直白
格嘎
那木拉错
索松
宜淀
大渡卡
那木拉
派区
多雄拉
拿格
汗密
阿尼桥
马尼翁
地东
背崩
希让
德阳拉
丹娘拉
鲁霞
丹娘
德阳
鲁霞
冈嘎大桥
冈嘎
米林
鲁霞拉
八一镇
林芝
色齐拉
尼
洋
曲
雅
鲁
藏
布
马
喜
东
雅
拉
山
日
嘎
布
随拉
甘代
宿瓦拉
加热萨
旁辛
达木
马迪
德兴
墨脱
崩崩拉
波密
达兴
嘎隆拉
金珠拉
提琴
兴凯
格当
珠
金
曲
考察路线
① 则隆弄

南迦巴瓦峰地区示意图



▲「ヒマラヤの謎の河」（あかね書房）より転載

II 報 告

謎の河の白い山

ギャラ・ペリ登山を終えて

登 頂 日 記

機会は瞬時に過ぎ去った

ヤル・ツァンポー西・東

ティンベ村の交差いとこ婚と
ギャラ村の家族婚

ギャラ・ペリの気象

ヤル・ツァンポー河大湾曲部調査

チベット登山の現状

英文サマリー

中文サマリー

登山隊員・行動表

HAJ GYALA-PERI EXPEDITION 1986

謎の河の白い山

プロローグ

チベットの西部、聖地カイラス山の近くに源を発したヤル・ツァンポー河は、チベット高原の世界で最も山岳重畳とした荒涼たる大地を約1,500㎞東流した後、突然流れを南西に転じて大ヒマラヤの主軸を貫き、アッサムの平原に向けて南流する。アッサムに入ってその名をブラマプトラ河と変えるこの大河は、さらにバングラディッシュを流れてベンガル湾へと注ぐ。その流れは、源流から約2,900㎞もの万里行をなしている。

前世紀迄は、このヤル・ツァンポー河とブラマプトラ河が同じかどうかハッキリ解明されず、ヒマラヤの「謎の河」とされていた。

何故、「謎」とされたかと云うと、それは、このヤル・ツァンポーとブラマプトラのつながり部分、即ち、「グレート・ベンド」と称される大湾曲部が非常に深い峡谷を成しているために誰も近づけなかったからである。

この謎を秘めた大湾曲部にツァンポーの大河を挟んで2つの高峰が対峙している。南（内）側にナムチャバルワ（7,782m）、北（外）側にギャラ・ペリ（7,151m）の玉峰がそれである。

ナムチャバルワは、世界の未踏峰の最高峰として世界のヒマラヤニストが虎視眈眈と狙っており、これ迄中国隊によって3度にわたり偵察・試登が行われたが未だにその頂は登られていない。

一方、この対岸に聳えるギャラ・ペリは、試登はおろか全容写真すら殆ど無いまま、ナムチャバルワと云う垂涎の玉峰に隠れて不遇をかこってきた。この深いベールに覆われてきたギャラ・ペリをこの世に紹介したのは、1913年に此の地を訪れたF・M・ベイリーであろうか。

ベイリーのその時の記録は、「ヒマラヤの謎の河」として訳出されており、彼はその中でギャラ・ペリを次のように紹介している。

『ミピの下から、その匹敵者ナムチャバルワに半ば隠れて見えていた雪のピークは、今、その威容を眼前にあらわした。ギャラ・ペリ7,151mである。この山自体、世界の巨峰であることはもちろんであるが、さらに驚くべきことは、ナムチャバルワ7,756m（註：現在は7,782mとされている）との距離は、わずか20.8㎞であり、ツァンポー河は両者の間をギャラ・ペリより4,267m下、ナムチャバルワより4,877m下を流れていると云う事実であった。……』

いかにこの間を断ち切って流れるツァンポーが凄い峡谷を形成しているか想像できよう。

日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）では、以前よりナムチャバルワの登山を熱望してきた。然し、これ迄同峰は、中国隊が登る迄は外国隊に開放しないと云う方針の元に、中国隊の独壇場として試登が

行なわれてきた。ＨＡＪではこれらの状況を鑑み、先ず、ナムチャバルワへの登龍門としてギャラ・ペリに対して登山許可申請を行った。其の後、中国登山協会及び西蔵登山協会と継続折衝を重ねた結果、国内の他団体との合同隊に依る登山許可を取得した。

この許可を得てＨＡＪでは1985年９月～10月にかけて偵察隊（山森欣一隊長他２名）を派遣し、同峰の南西面をつぶさに観察して貴重な写真を持ち帰ってきた。

そして本年、他団体との合同は相手側の都合により中止となり、ＨＡＪ単独チームでこの玉峰へ登山隊を派遣することになった。

以下に殆ど太陽を拝むことの出来なかった東チベットでの登山紀行の概要を記す。

アプローチ

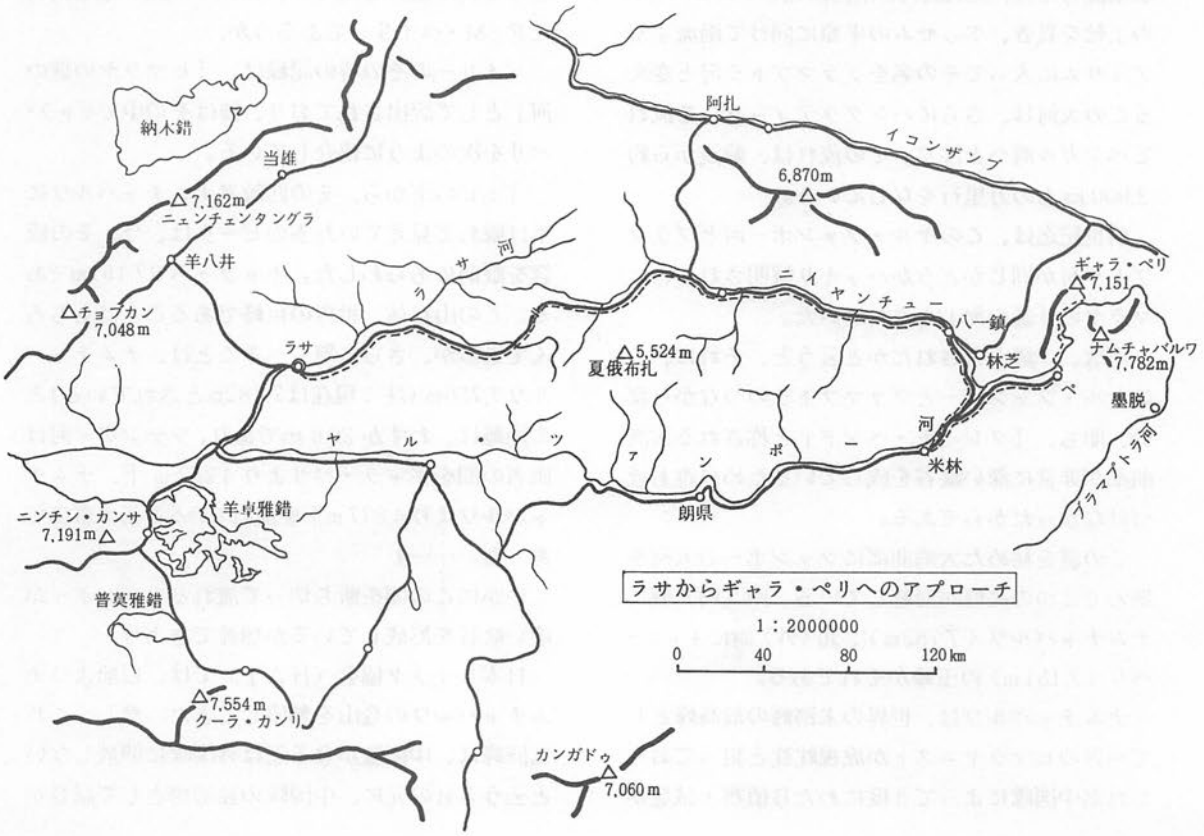
９月１日、ＨＡＪのチョー・ウィ隊（八嶋寛隊長以下10名）、カルジャン隊（新郷信廣隊長以下６名）、ラプチカン偵察隊（斎藤安平隊長以下２名）の３隊と共に日本を出発した当隊は、北京、成都を経て、４日にチベットのラサに入った。成都からのフライトでは、機窓からナムチャバルワ、ギャラ・ペリなどの雪嶺が眺められ、心は早くもその白き頂へと飛んだ。

ラサでの４日間の滞在で、隊荷整理や現地購入品の買物など最後の準備を終えた我々は、８日、ラサを出発して林芝県の八一鎮へと向った。

隊員、連絡官、通訳、連絡官助手を乗せた２台のジープは、ラサ市内を抜け、ラサ大橋を渡ってラサ河左岸の川蔵公路を進む。川蔵公路は殆無く砂利道となり、もうもうと上がる土煙りの中を車は疾走する。

道はやがてラサ河の支流に沿って進むようになり、その源流へと車はどんどん高度を稼いでいくラサから約３時間（約150km）でメラ峠（4,870m）を越える。峠周辺の広々とした高原にはノンビリと草を食むヤクの放牧が見られた。土地の人の話によるとこのメラ峠からギャラ・ペリが望見できると云うことであったが、生憎の曇天で眺望は得られなかった。

峠からは一気に白曲（パイ・チュー）の源流へ



と高度を下げた後、この白曲に沿って道は続く。東へ進めば進むほどこれが同じチベットかと思うほど緑青々とした肥沃な土地が拡り、豊富な森林が目につく。往き交うトラックはいずれも見事な木材を満載しており、これ迄のチベットのイメージとはほど遠い景観である。将にテライの大平原を知らずしてネパールを語れないのと同じで、広大なチベットも、この東チベットを知らないと単に荒涼たる大地として片付けられてしまうことだろう。

白曲に娘曲（クーニャン・チュー）が合わさり、河の名が尼洋曲（ニイヤン・チュー）になると間も無く工布江達県に入る。ここで橋を渡り、八一鎮迄は左岸沿に下るようになる。

土煙りで真白になり、お尻が悲鳴をあげそうになる頃、八一鎮に到着。八一鎮は農牧学院の宿舎に落ち着く。

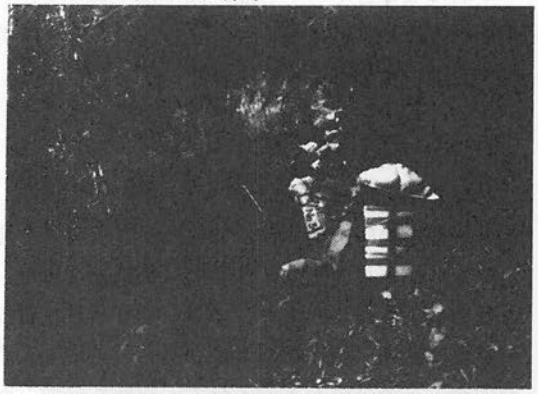
この日は、ラサから約400㎞東へ走行し、高度にして1,240m登って1,880m下ったことになる。やはり、ラサとの高度差約600mの違いは空気が濃いような気がする。

9日。この日は先ず米林県の県長を表敬訪問する。今遠征で一番懸念されたのが、ベース・キャンプ（BC）迄のトランスポーティーションである。100人ものポーターが集まるかどうかが大きな問題であった。その為にはポーターの所轄県である米林県の協力は是非とも必要で、前もって何度か協力依頼を要請しておいた。

八一鎮から小1時間程で尼洋曲はヤル・ツァンポーに出合う。暫くツァンポー左岸の車道を上流に向って走り、ツァンポーにかかる大橋を渡る。橋を渡るとキャラバンのスタート地であるペ(派)

▲ペからキャラバンをスタート

▼竹林の中のひと休み



と米林県への道が左右に分かれる。我々は先ず右の道を米林県へと向う。大橋から約30分、気持の良い松林の中を車で走り抜け米林県の県庁に到着する。

県庁で党書記兼県長の罗布次仁（ロブ・ツェリン）氏をはじめ公安局長、交通局長などの要人にお会いし、ポーターの件に関して確認する。

「既に100名のポーターは手配済みなので心配はいらない。特に今年は屈強な若者を集めたので問題はないだろう。」と云われ一安心する。さらに何か問題があるといけないので米林県公安局の者とペ区の管理人を目付としてBC迄同行させると云われ唯々〝多謝〟。

米林県を後にペへ向う。米林からペ迄は約100㎞。然し、途中何度も川を横切るような悪路の為、スピードは上がらず、3時間半ほど要す。

この辺りのツァンポーの河幅は広く、所々に広大な中州が見られる。また、途中にはどのようにして形成されたのか真白い巨大な砂山が見られるなど、運ばれてくる土砂量の多さに驚嘆させられる。

ペ区の招待所は、5人室のドミトリー。生憎とコックが病気とかで、早速、この日から自炊となる。

翌日は、トラックで搬送した隊荷の整理を行う。この地域でのポーターは、ネパールなどのポーターと違って20㎏しか担がない為、梱包が面倒である。また、今回のキャラバンは道が狭く悪いと云うことで、背負いにくい荷物は軽くするかコンパクトにまとめるかしなければならず、マットレスのようなかさばる物など僅か7㎏で1個分としなければならなかった。

午后になるとポーター達が三々五々集ってきて、招待所のまわりにはテントが立ち並び、我々はポーター達の見世物となる。

ヤル・ツァンポーに沿って

11日、キャラバン開始。

前日から14時間近く降っていた雨も夜明けと共に除々にあがり、出発する頃には曇天となった。

9時半頃からポーターへの隊荷割り振りを行う。米林の交通局、公安局の人の立会いの元で1人ずつ隊荷と支給装備が手渡される。荷物を受取ったポーターは走るようにして舟渡し場へと急ぐ。

ペの招待所から30分ほど下流でツァンポーを左岸に渡る。舟は丸木舟を2つ横につないだ双胴イカダのような簡単なもので、1回で15～18人のポーターが限界のようである。結局、このツァンポーの舟渡しには、7回の往復で4時間半かかり、午后3時前に漸く完了した。

全ポーターが左岸に渡り終えてからキャラバンを開始する。歩きだすとポーター達は道幅いっぱいに広がり、まるで競歩のような勢いで歩きだしたのには驚かされた。ティンベ村迄の小1時間はまるで競技会のようなありさまで、昨年の偵察隊の報告とは随分違った。これならキャラバン日程は予定以上に進めそうだと思ったのも束の間、ティンベで昼食の為休憩を取った後は、ガックリとペースが落ち、「小止」の連続となり、やはり聞いてた通りの歩みとなる。

ティンベから約1時間半進んだスースン村でキャラバン初日の夜を迎える。夜半から激しい雨に見舞われ初日からみじめな夜となる。

12日、視界が全く閉ざされ、シトシトと雨降る中を出発。スースンからターリン迄は、広い平担な道を辿る。途中、対岸にキィーカルの村を見たが、その背後に聳える筈のナムチャバルワの雄姿は望めず、僅かに下部の雪壁が雲間に眺められただけであった。

ターリンを過ぎると道は狭くなり、うっそうとした竹林の中をどんどん高度を下げ、ツァンポーの河原へと下る。水車小舎のある枝沢の橋を渡り、河沿の道を暫く辿るとチュベに着く。村と云っても人家は一軒だけで、この人家がツァンポー左岸では最奥の人家のようである。この日は、人家の外れにある気持の良い草原にキャンプをする。

13日、チュベを過ぎると道は益々悪くなり、全員ナタを片手に藪払いをしながらの行軍となる。この日は、朝から雨降る中を出発し、一日中陽の光を見ることもなくズブ濡れとなって藪との格闘を強いられた。

チュベから3時間程進んだ所に水場があり、杉の巨木の下で雨宿りをしながら昼食を取る。どんなに雨降る中でもポーター達は、松ヤニのたきぎを拾ってきては、それに火打石で上手に火をつけてしまう。雨季の間は、焚木が燃えにくいせいか

▲ヤル・ツァンポー河の渡し舟

皮で作ったふいごを持参して火をおこしていたのも珍しかった。帰路のキャラバンでは見られなかったのであれも雨季における生活の知恵なのであろう。

昼食後の2時間も雑木の多い辛い行進を強いられ、漸くギャラ村の対岸に出る。この日は、ギャラ村対岸の舟渡し場の上でキャンプする。キャンプ・サイトとしては狭すぎてテントも満足に張れなかった。

ギャラ・ゴンパの伝説

14日、この日は約3時間半の行進で、昼食地がそのまま幕営地となってしまった。先に適当なキャンプ地が無いと云う事で已むを得なかったが、それにしても余りにも短い行程であった。

幕営地から河岸沿の道を辿ると直ぐにギャラ・ゴンパの跡地に出る。ベイリーの「ヒマラヤの謎の河」にもでてくるこのゴンパも、今はただタルチョーのなびくマニ塚が残っているだけである。

地元の人の話によると、このマニ塚の背後を流れる激流の中には鎖でつながれたアシャン・チュ・ゼェ（註：1）の神像が安置されていると云う。この神は人が死んだ時、その人を天国にやるか地獄へやるかを決める神である。チベットの人達は、このアシャン・チュ・ゼェの神像のあるギャラ・ゴンパを生きているうちに必ず一回はお参りして極楽浄土の来世を願ったと云われる。そして、ここを訪れた時、この滝の中に「赤い色」のアシャン・チュ・ゼェの神具を見ることが出来た人は、幸運で長生き出来ると云われ、「白い色」のそれを見ることが出来た人は、運が普通の人。「黒い色」のそれを見た人は、凶運で人によっては直ぐ死ぬことがあると云う。然し、実際にはこの色を見る事は希れのようである。

ゴンパの裏手に続く山は、五台山と称されギャラ・ゴンパを訪れた巡礼者は、この山も一緒に参拝したと云う。

ギャラ・コンパの跡地を過ぎると道は除々に河岸から離れてツァンポーへ張り出した尾根の先端を高捲くようになる。尾根の反対側に入るとうっそうとした竹林となり。暫くして道が下るようになると程無く小さな沢が出合う。この沢を渡った草地でランチ・タイムとなる。そして前述の通り、この日はそのままこの草地で幕営となる。

この日初めてギャラ・ペリの南稜末端の岩壁部を垣間見ることが出来た。

15日、前夜の話によると今回のポーターは5日分の食糧しか持参しておらず、この日一日の行動で帰ると云う。どうも、昨年の偵察隊のベース・ホーム（B・H）迄のつもりで来たようである。

兎も角、この日中に何としてもB・C迄運んで貰わないと大変な事になるので、この日は朝食を取ると直ぐ尾形以下3名が先行した。

途中、露岩の所に6m程フィックスを張り、前日同様ナタで藪を払いながら小1時間も進むと眼下にギャラ・ペリ川が俯瞰出来る展望台に出る。晴れていればギャラ・ペリの雄姿が望められるのであろうが、相変らず山は濃霧の中である。この展望台には古いマニ塚があり、このマニ塚の横を通ってギャラ・ペリ川右岸沿の道をトラバース気味に辿る。ナタ目、赤布を探しながら雑木の多くなった踏跡を辿っているうち速いポーターに追いつかれてしまう。

幕営地から約2時間半でギャラ・ペリ川河原の

▲ヤル・ツァンポーの流れ（南稜上からの俯瞰）

昨年のB・H跡に到着する。早々に着いたポーター達は荷物を置いて休みはじめたので、隊員はB・Cを目指して先行する。

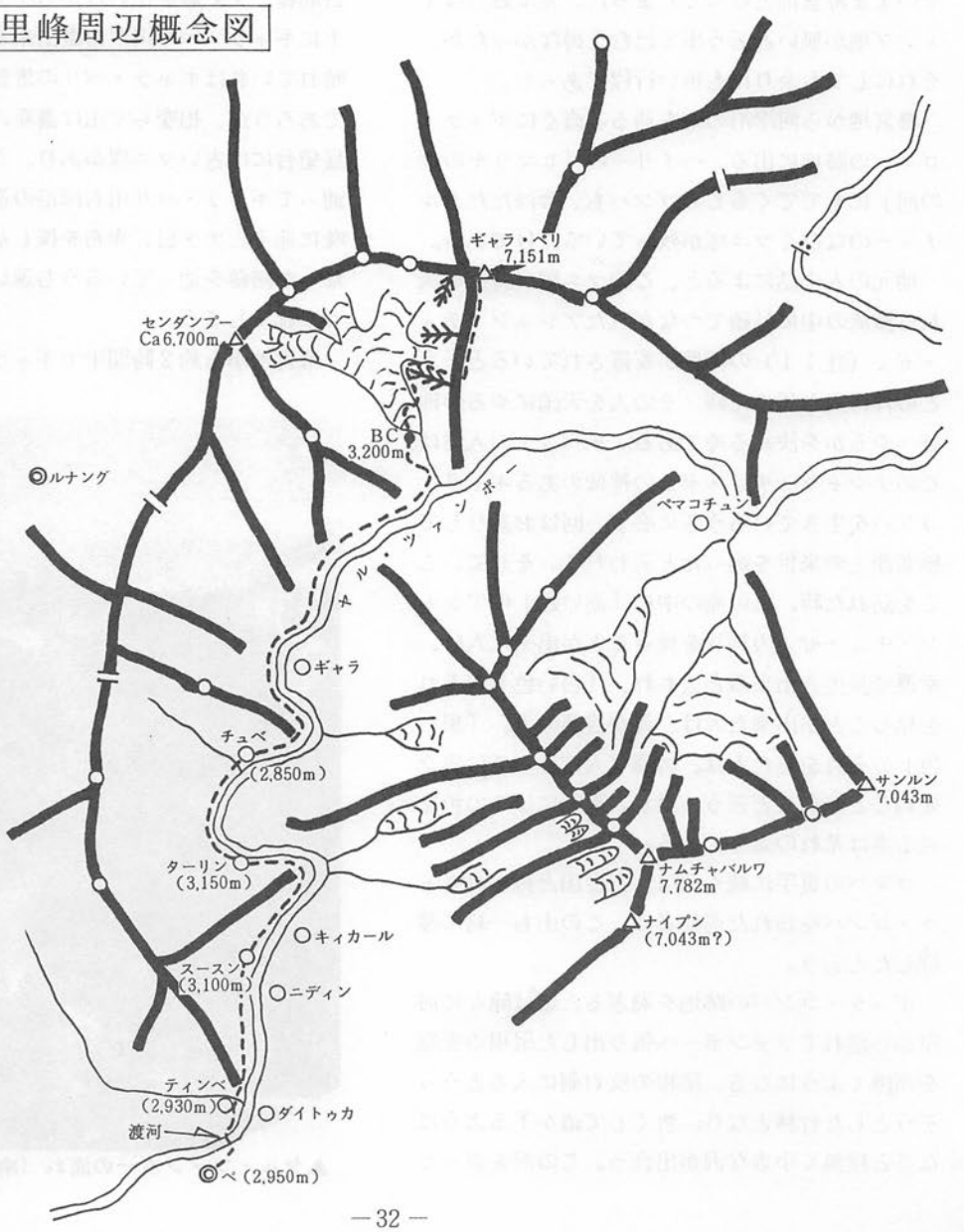
河原から枝沢に沿って5分程登ってから急登に取りつき、一気に高度を稼ぐ。丁度、道はギャラ・ペリ川のゴルジュ帯を高捲くようにつけられている。

やがて、道はシダ類の密生する大草原、〃センダンの広場〃に出る。此々にも昔はゴンパがあったそうだが大地震で崩壊してしまったとの事。今はただ広場の真中にある繁みの中にタルチョーが一本寂しくはためいている。センダンの広場の手前の竹林に転っていた銅製の大鍋などもゴンパの名残りなのであろう。

この広場で昼食を取っていると、早く着いたポーターは、早速、小屋がけを始め、此々に泊る素振りをみせる。此々に荷物を集結されては一大事と、昼食もそこそこに先を急ぐことにする。

赤布、ナタ目を探しながら獣道のような踏跡を辿って行くと、所々に大きな獣の足跡や糞があって気味悪くなる。大きな声を上げたり、ザックにつけた鈴を鳴したりして進む。（後日談になるが、

加拉白里峰周辺概念図



我々が登山活動に入っている時、B・Cへ熊とタヌキが招かざる客として訪れた。）

この日は、もうポーターは動かないと思い、途中にザックをデポしてルートを切り開いて行くと、14時の交信でポーターは自分達の荷物をセンダンの広場に置いて隊荷のみを担いで先迄運ぶとの連絡が入る。それではと、夢中でルートを探していくも途中でルートを見失い、２～３ｍもあるトゲの木の密生した林の中で右往左往する。その内、昼食を終えたポーターが追いついてきて混乱をきたしはじめたので、已む無く下の河原へ隊荷を集結することにして河原へ降りる。

日中友誼橋

それにしてもセンダンプー側から流れてくる激流はもの凄く、とても渡渉で渡れるような流れではなかった。一度、流れの中にある大岩から対岸へ飛び移り、ザイルを張って渡渉してみたが危くおぼれそうになった。

当初の予定では、この流れを渡り、対岸に押し出しているインゼル状のモレーン台地上にB・Cを設けるつもりであった。然し、この激流を前にポーターは此々迄で諦めざるをえなかった。

ポーター１人１人にポラロイド写真を撮ってやってお別れする。

ポーターが帰った後、暗くなる迄河原の整地に追われ、どうにか４張のテントを設営する。

こうして我々は、５日間にわたる悪絶困難なキャラバンを経て、漸くギャラ・ペリ氷河舌端のインゼル下部迄辿り着いた。各隊員の手はトゲだらけとなり、熊のような手が今キャラバンの苦労を物語っていた。

▲日中友誼橋

翌朝、この日はなんとしてもこの激流に橋をかけなければと、架橋の段取りを話していたら、ポーターが丸太を担いでやって来た。ペのポーター９名が自発的に橋かけの為に残ってくれたと云う。その好意には隊員一同唯々、感謝。米林県公安局のツェリン・ドルジェ氏、ペ区の管理人、ソラン・ドルジェ氏の両氏と９名のポーターの協力により、小１時間ほどでとても立派な橋が出来上った。この〝日中友誼橋〟の完成で、橋かけの大仕事が片づいたので、この日は早速、インゼル上部へのルート作りに出かける。

昨年は、インゼルの右端にルートを取ったようであるが、今年はモレーンの崩壊が激しくルートにならなかった。我々は獣道を利用してインゼルを直上するルートを切り開いた。約２時間程かかってインゼルの頭迄道をつけ、トゲの木の密生から解放されると目の前にはモレーン・カバーされたギャラ・ペリ氷河が現われた。荒れた氷河を挟んで対岸（左岸）にB・C予定地が眺められる。ポーターに帰られてしまった状況下で、隊員だけであそこ迄隊荷を運び上げることは時間的に無理であった。

この日の偵察結果からB・Cは、前日の河原にするほかないと判断して、連絡官の王さんに了解を求める。はじめは激流が気になってか難色を示したが、登山活動の日数の件やテントを山側の高台に設営することなどを話したら了解して呉れた。B・C決定となり、午后はメス・テントの設営などB・C作りに汗を流す。

B・Cの高度は3,200ｍと、当初の予定よりも約300ｍ程低くなり、頂上迄の高度差が約4,000ｍにも及ぶことになった。

▲河原のＢＣ（3,200m）

登　山　活　動

登山開始とルート変更

2日間、隊荷整理などでB・Cに滞在した後、順応訓練を兼ねてA・BCの偵察に向う。

インゼルの頭からギャラ・ペリ氷河を横切って対岸に移り、左岸に走る長大なモレーン稜に取り付く。このモレーン稜はかなり古いものらしく、山側はすっかり草で覆われている。我々のA・BCはこのモレーン稜をドン詰り迄登りつめて4,200mの地点に設けることにした。ほぼ予定通りの位置である。

この2日間の順化トレックを終えて、22日からA・BCへの荷上げを開始した。B・CからA・BC迄は、約20kgの負荷で2～3時間の行程である。高度差は大きいものの高度が低いので楽である。A・BC下のアブレーションバレィーは、森林帯となっており、緑青々とした景観が眼を休めて呉れる。

A・BCへの荷上げがほぼ完了した後、26日から上部の登山活動に入った。

当初の計画では、西壁の頂上よりに突き上げる顕著な岩稜にルートを予定していた。然し、ルート工作の初日からA隊（尾形、太田）が、氷河内で2発の雪崩に襲われる一幕などもあって、このルートは早々に諦める。兎も角、西壁内は一度雪が降ると雪崩のオンパレードとなり、とても恐しくて近づけなかった。因に10月12日の深夜に発生した大雪崩は物凄く、その爆風によってA・BCのテントが100m以上も下方へ吹き飛ばされるほどであった。幸い誰も居なかった為に重大事故だけは免がれた。

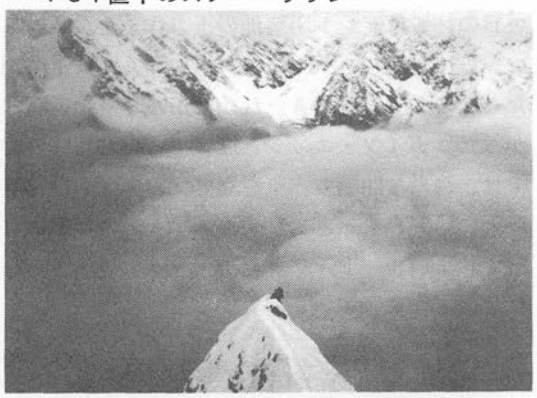
結局、ルートは第2案であった西壁の右端を縁どる長い岩稜に取ることになった。

27日、A隊はA・BC裏手のガリーから岩稜に上がって4,740m地点迄登りルートの見通しをつけた。

ルートは、急峻なガリーを7ピッチ登るとスラブ状の奥壁にぶつかり、この基部を2ピッチ半右へトラバースすると10m程の岩場が立ちはだかる。この岩場を〝スフィンクス岩〟と名付けた。この右手には井戸底を思わせるような深く暗いガリーが喰い込んでおり高度感がある。これを越えるとその上で右から支稜が合わさってきて稜は広い雪面となってくる。さらに左の尾根筋に沿ってどんどん高度を稼いでいくと広いスノー台地（4,600m）に飛び出す。これを横切ると再び稜は痩せてきてナイフ・エッジとなる。途中、3ピッチ程は、蟻

▲ギャラ・ペリ西壁の全容

▼C１直下のスノー・リッジ



の刃渡りのようなナイフ・エッジで緊張させられる。

30日、蟻の刃渡りの上の細い雪稜を削ってＣ１（5,000ｍ）予定地とする。

10月３日、休養明けのＡ隊によってＣ１が建設され、翌日からＣ２へのルート工作にかかる。

Ｃ・２へのルート

４日、前夕からの大雪で、この日は出だしから胸、腰を没する深いラッセを強いられる。前回の最高到達点から雪稜を１ピッチ登って、さらにいやったらしい岩稜に４ピッチ、フィックスを延すと稜上にピナクルが立ちはだかる。アブミを持参しなかった為、この日は、この基部で打ち切りとなる。

翌日、このピナクル越えの荷上げでは大変なアルバイトになると思い、右手のルンゼ側にエスケープ・ルートを探す。ピナクルの２ピッチ手前から雪壁をルンゼ側へ10ｍ程懸垂で下ると、側壁に急峻ながらも断続的に雪のバンドが続いており、ここにルートを取ってみる。〝洞穴バンド〟と名付けたこのスノー・バンドを３ピッチ登ると、前日立ちはだかったピナクルの上に出れた。再び稜上に戻り、さらに１ピッチ、フィックスを延すと、〝門〟のようなピナクルにぶつかる。この〝門〟の上は、〝ノミの刃渡り〟とでも云えそうなナイフ・エッジとなっており、馬乗りになって２～３ｍ程進んでみたが余りにも不安定な為、ギブ・アップする。結局、このピナクルも基部から左手のスラブを10ｍ程懸垂で下り、不安定な雪壁を登り返してエスケープする。スラブの上に積った雪壁を騙し騙し２ピッチ登ると漸く安定した雪稜となる。

６日、空間と雪面の境界が判らないような相変らずの悪天の中、雪稜上に８本のフィックス・ロープを施して、ブラック・ジャンダルム上のナイフ・リッジに飛び出した。

７日、前日の最高到達点から尻の切れそうな雪稜を４ピッチ辿ると、スノー・ドーム取付きの急峻な雪壁となる。丁度、シマウマ模様の岩壁が露出していることから、此々を〝ゼブラ岩〟と呼んだ。この〝ゼブラ岩〟は、スラブの上に積った60°～70°位の雪壁で、不安定な積雪に最も神経を使う登攀を強いられた。この日は、〝ゼブラ岩〟を登り切った所で吹雪となり、ルート工作を打ち切る。

８日からＢ隊（橋本、今村）が上部ルート工作に向う。Ｂ隊は、９日、10日の両日で、〝ゼブラ岩〟上部のナイフ・エッジに５本のフィックス・ロープを施してスノー・ドームへと抜け出た。

11日、この日は、前日からの大雪で深いラッセルに苦しめられたが、Ｂ隊、Ｃ隊（飛田、藤原）の手によって夕方遅くＣ・２（5,650ｍ）が建設され、Ｂ隊がＣ・２に入った。

待望の南稜へ

12日、この日Ｃ・２からルート工作に向ったＢ隊は、高度約5,800ｍの地点で待望の南稜上に飛び

▲蟻の刃渡りを行く

出す。

C・2迄上がると稜線は幅広くなり、フィックス・ロープも不要になる。C・2の背後に聳えるスノー・ピークは直下の雪壁に2本のフィックス・ロープを施す。このピークの上でルートは、ほぼ直角に左へ折れ、その先で一旦コルへ下ってから南稜に突き上げる。

西壁右氷河（仮称）の突き上げるこのコルの所は約3ピッチのナイフ・エッジとなり、いつも強風が吹き荒れていた。また、コルの反対側は、足元から一気に3,000mも切れ落ちて、ヤル・ツァンポーの流れが真下に俯瞰できる。晴天の日は、対岸のナムチャバルワはもとより、麓のペマコチュンや大湾曲部を取り巻く重畳とした山々が眺められた。

南稜上に出るとルートは、それ迄の痩せた稜線とは対称的に幅広い雪壁となって頂上迄急峻に迫上がるようになり、新たな障害として幾重にも重さなる巨大な氷崖やクレバスが行手に立ちはだかるようになる。

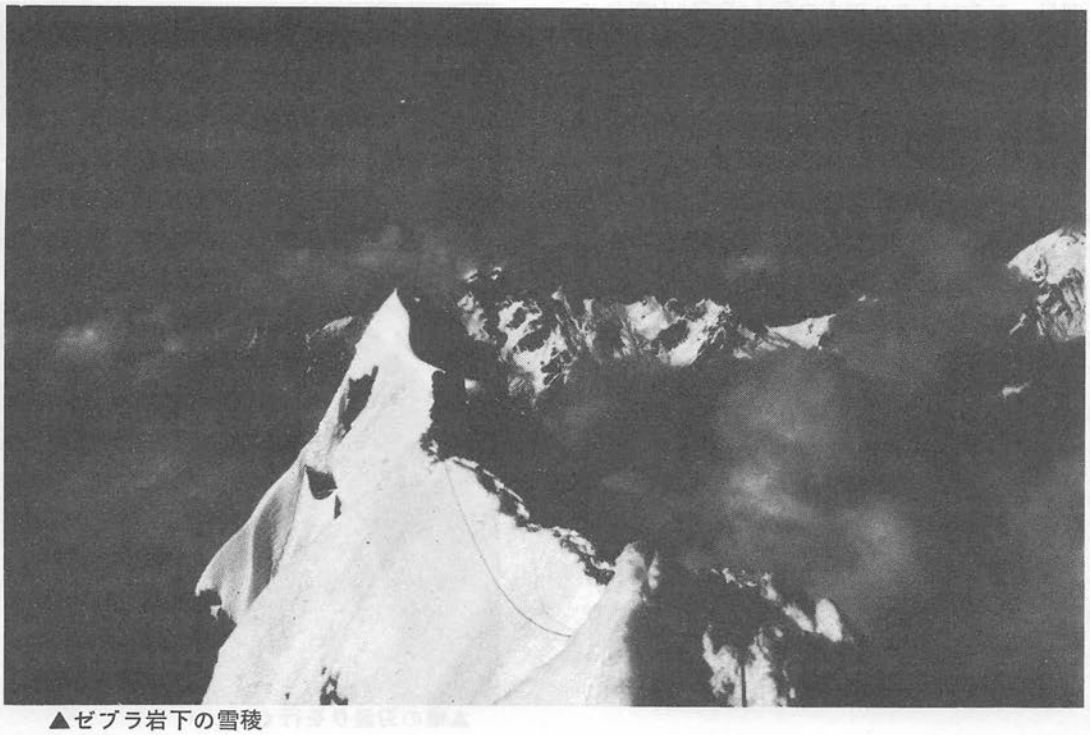
13日、この日、休養の為A・BCへ下った橋本、藤原より前述した雪崩事故の模様が各キャンプに伝えられ、取り敢えずかろうじて残ったテントを山側へ移動することになる。気の毒ながら彼らの翌日の休養はテント場整地の土方作業となる。

一方、上部ルート工作の方は、漸く南稜上に出たものの悪天候が続き、なかなかルートは延びなかった。ナイフ・エッジと違って広大な雪壁の中では、適当な間隔で赤旗を立てておいてもひと度悪天に見舞われるとホワイト・アウトの状態になってしまいルート・ファンディングに難儀させられた。

漸く太陽の恵みが

10月も16日になって漸く好天の兆が見えはじめ、雲間に青空が見られるようになった。

この日、A隊は前日の最高到達点に約3時間で到達した後、上部のルート工作にかかった。当初、ルートは、右の雪壁へまわりこむ予定でいたが、濃霧が晴れてみると稜上に立ちはだかるハンギングした氷崖も弱点がありそうに思われたので、取り敢えず稜通しに進む。上部からのチリ雪崩の堆積の為、胸まで没する深いラッセルを強いられ、漸くこの氷崖に取りついたが、右も左もクレバスが大きく口を開いていてどちらも登れなかった。已む無く一旦戻ってこの氷崖の基部を右の雪壁へまくことにする。稜から最初の100mは、首まで潜ってもまだ足場が定らないような深いラッセル



▲ゼブラ岩下の雪稜

で、その後、急峻な雪壁に２本のフィックス・ロープを延してこの日は打ち切りとなる。

17日、この日からＡ隊に橋本が加わり３人でルート工作に向う。前日の最高到達点から20ｍ程でまた氷崖にぶつかる。頭上にはシャンデリアの様な氷柱が垂れ下がり、脅かされる。後日、この〝ギロチンのトラバース〟と呼んだ所は、氷柱の大崩壊が起り、下の雪壁は中の氷の層まで洗われてしまった。

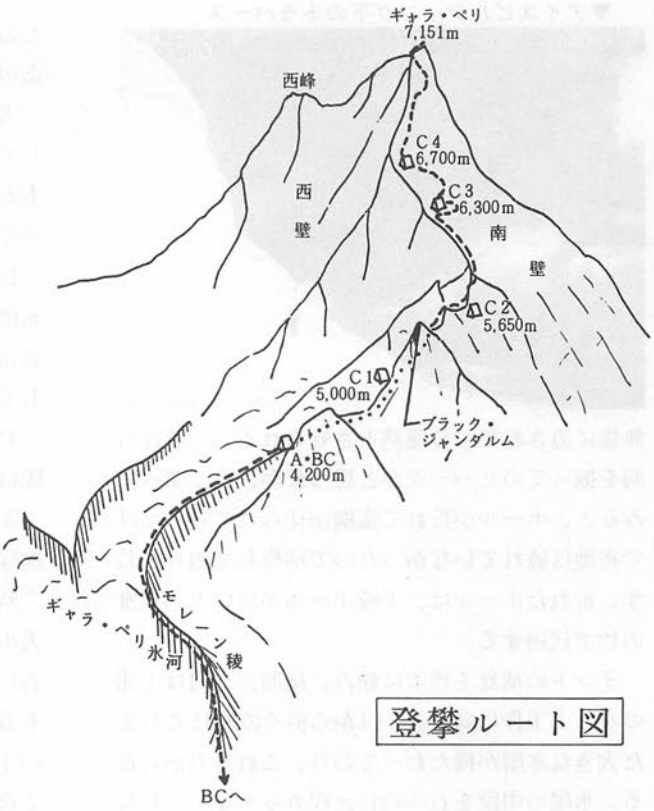
この氷崖の基部を右にまわりこんでから再び稜上に上がったが、クレバスに阻まれて前進できず、また、右の雪壁へ大きくトラバースする。大きく口を開けたクレバスが真横に走り、仲々越えられず100ｍ程真横にトラバースさせられる。結局、この日はここ迄で時間切れとなる。

翌日、ここから広大な雪面を右上し、斜面が急になる辺りからフィック・ロープを施す。２ピッチ登った所で氷崖のくびれた部分を越え、さらに半ピッチ程登ると適当なキャンプ地が見つかる。早速、この地をＣ・３予定地としてテントを１張設営する。ここは、正面にナムチャバルワのどっしりとした山塊が座り、眼下にはツァンポーの流れが銀色の帯の様に俯瞰できる最高のキャンプ・サイトであった。

19日、Ｃ隊（飛田、今村、藤原）のサポートを受けてＣ・３（6,300ｍ）が建設され、尾形、太田、橋本がこの日Ｃ・３に入る。

翌日、Ｃ・３の３名は、素晴しい御来光を拝んでからＣ・４のルート工作に向った。

Ｃ・３背後の台地に上がると氷崖崩壊の爪跡、デブリの塁々とする雪原が広がる。これより氷崖の右手のくびれたところを目指して登っていく。途中、大きなクレバスが横たわり、その上から傾斜が急峻になってくる。この雪壁に４本のフィックス・ロープを施し、フィックスの終点より直ぐ上の氷崖を越えると頂上は一段と大きくなって目前に迫る。フィックス・ロープの節約の為、その上の雪面は赤旗だけを立てていく。約200ｍ程登ってから氷崖と氷崖の間にルートを求め、激しいス



登攀ルート図

ノー・シャワーの中を最後のフィックス・ロープを張る。アンカー・ポイントはスノーバーが無くなったのでアイス・バイルを打ち込む。然し、ここ迄登るとこれ以上の前進を阻むかのように激しいブリザードが哮り狂い、立っていられない状態となった。手足はチリチリと痛み、髪、ヒゲはつららで真白となり、長居は無用とばかりに下降に入り、Ｃ・２迄一気に下る。

21日、Ｃ・３を出発した飛田、今村、藤原の３名は、前日の最高到達点からさらに６ミリの補助ロープを50ｍ程延して、Ｃ・４（6,700ｍ）を建設する。

こうして漸くアタック態勢が出来上がり、我々は順次Ｂ・Ｃへ下って最後の休養を取った。

アタック

高度3,200ｍでの休養は、本当によく休まる。３日間の休養でリ・フレッシュした我々は、25日からアタックに向けての行動を開始した。

先ず、第１次隊として尾形、橋本、今村が25日Ｂ・Ｃを出発して一気にＣ・１入りする。翌日から順次キャンプを進め、28日にＣ・４入りした。

一週間振りに上がったＣ・４は、テントが見るも

▼アイスビルディング下のトラバース

無惨に潰されており唖然とさせられる。一時は雪洞を掘ってのビバークかと思ったが、良く調べてみると、ポールが折れて張綱が切られているだけで布地は破れていなかったので補修して張りなおす。折れたポールは、予備ポールが無いため赤旗の竹で代用する。

テントの補修を橋本に頼み、尾形、今村は上部のルート工作に向う。C・4から直ぐの所にこれまた大きな氷崖が横たわっており、これを右から攻る。氷崖の中段を右へ約15m程カッティングしながら水平にトラバースした後、直上してここを抜ける。さらに、氷崖の上を左へ50m程トラバースすると稜上に出る。目の前にはセンダープーが大きく現われ、ギャラ・ペリの頂は指呼の間に見える。去来する上層雲に一沫の不安を抱きながらC・4へ戻り翌日のアタックに備える。

雪崩事故に依ってC・4で使用予定のテントが吹き飛ばされた為、C・4には2人用の軽量テントが配置された。2人用に3人と云う事ではじめから窮屈が予想されたところにきてポールが破損した為、最悪の居住性となり、まんじりとしないアタック前夜を迎えることになった。

29日、第1次隊の3名は、その居住性の悪さから1時半に起床し、4時50分にC・4を出発する。ヘッド・ランプの明りを頼りに前日の最高到達点へと登り、さらに稜通しに進む。50分程登った所でクレバスにぶつかり、どちらにルートを取って良いのか判らず、明るくなる迄ツェルトを被って待機することにする。−24℃の寒気はオーバー・シューズを通して容赦なく浸透し、両足はチリチリと痛む。約1時間半程の待機であったがひどく長く感じられた。7時過ぎに漸く明るくなってきたので出発する。明るくなっても天候の方は前日迄の好天とは大違いで風雪が行くてを阻む。

雪面の傾斜は登るにしたがって立ってきてどうしてもフィックス・ロープを施すようになる。何もかもバリバリに凍てついた中でのルート工作は辛く、ペースも遅々として上がらない。

11時の時点で高度計の針は、まだ6,850m(6,980m位の高度か？）であった。この時点でこの日の登頂は諦め、さらに50mフィックス・ロープを延して下山にかかった。

C・4で第2次隊に翌日のアタックを託し、1次隊はそのままC・3迄下った。

30日、2次隊の飛田、太田、藤原の3名は、1次隊の結果から、この日は明るくなるのを待って7時10分にC・4を出発する。然し、前日同様の悪天の為にペースが上がらず、前日の最高到達点に着いた時は既に11時になっていた。結局、2次隊も登頂を断念して下山にかかった。C・3で待機中の1次隊に再度のアタックを託して、2次隊はC・2迄下る。

▲南稜上の登高

烈風の白き頂へ

1次隊、2次隊と相次いで敗退した後、再び尾形、橋本、今村の3名にアタックが託された。

31日、重苦しいプレッシャーにさいなまされ、殆ど眠れぬまま3時半に起き出す。時折り風の吃哮がテントを打つも、天候の方はまずまずのようである。

6時出発の予定が15分遅れで出発となる。一応6時出発、15時登頂、19時帰幕の予定でアタックすることにしていた。

夜明け前の闇夜に新月が淡く光る中をヘッドランプの明りを頼りに登る。C・3上部の雪壁の中程で御来光を拝む。明るくなるにつれ素晴しい雲海が広がり、雲上に浮ぶものは約6,000m 以上の山ばかりのようであった。

C・4にはほぼ予定通りの2時間15分で到達する。ここでスノーバーを2本回収して持参する。

C・4から上もまずまずのペースで進み、前回の最高到達点には予定より少し早く、11時前に着いた。何がなんでもの思いが先を急がせる。途中で回収して持参したP・Pロープ（8㎜）とナイロン補助ロープ（6㎜）を合わせて約100mを急峻な雪壁にフィックスする。その上も急峻な雪壁が続きフィックス・ロープのほしいところであったが、全て使いきってしまった為、ノー・ザイルでそのまま雪壁を直上する。積雪は大腿部まで潜り、深いラッセルにアルバイトを強いられる。頂上岩壁は直ぐ手の届きそうな所に見えるも仲々近づかず、時間だけが過ぎていく。

フィックス・ロープの終了点からさらに200m 程雪壁を直上して漸く頂上岩壁の基部に到達した。時間は、丁度15時。予定では登頂の時間である。然し、ここから見る頂上は直ぐそこであり、迷わず前進する。然し、直ぐ近くに見えた頂上稜線もここから3ピッチもあり、思いのほか時間がかかった。

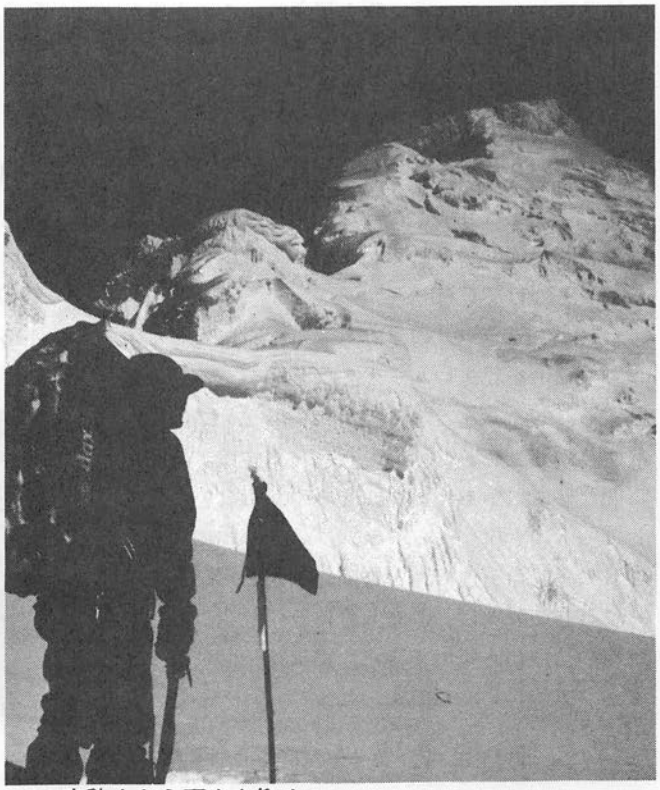
懸念された頂上直下のクレバス帯も、予想通り右端の岩壁よりに難無く越えることが出来た。然し、その上もクレバスが錯綜しており神経を使わせられる。最後のツメは、コルへ直上するか、左へトラバースしてから頂上稜線に出るかの二者選択にせまれたが、ルートの長さとクレバスを考えて、より急峻ながらも前者のルートを取ることにする。

井戸の底のようなクーロワールの基部からダブルアックスで逆くの字状の氷壁を登り、中段から左へ2m程トラバースした後、シュカブラの塊りのような不安定な雪壁を乗越してコルに飛び出す。よもや、頂上直下でこれほどアクロバティックな登攀を強いられるとは思わなかった。

頂上稜線に出ると雲間に西峰の怪峰が眺められ、稜線上には大きなクレバスが口を開けていた。

コルからさらに稜線上に立ちはだかる10m位のシュカブラで覆われた雪壁を登るとその上は平坦な稜線となり、ほどなく頂上であった。C・3から約11時間の苦闘の末、漸く16時55分にギャラ・ペリの白い頂は、我々の足元となった。

ゴーゴーと唸る強風と去来する暗雲に、初登頂の感激や頂上からの眺望を味わうこともなく、手早く頂上での儀式を終えて逃げるように下山にかかった。頂上での気持は、初登頂の感激よりも、あのノー・ザイルで登ってきた約200mの雪壁の



▲南稜上から頂上を仰ぐ

▼11時間の苦闘の末、頂上は我々の足元に

トレールがこの風雪で吹き消されたらどうしようと云う心配であり、C・3への無事帰幕の事ばかりであった。

17時15分、頂上を後にする。コル直下のクーロワールは、50mのメイン・ザイルを記念品としてフィックスして懸垂で下る。これで全てのロープ、スノーバーを使いきってしまった。その下2ピッチの雪壁はクレバスに注意しながら山側を向いて慎重に下る。

頂上岩壁下の雪壁は、案の定トレールが吹き消されていた。それでもかすかな痕跡を探しながら進み、奇跡的に往路に立てた赤旗を見つけた。

往路のトレールは全て吹き消され、この赤旗から下7ピッチは深いラッセルを強いられる。このラッセルに加えて間断無く降る雪と視界の悪さで帰路は難儀を極めた。

それでもどうにかC・4には19時20分に到着。最後の一光が沈む寸前であった。あっと云う間に小雪舞う闇夜につつまれてしまい、その中をヘッドランプをつけてC・3へと下る。

C・3背後のデブリの塁々とする雪原に入った頃よりルートを見失いルート・ファンディングに難儀する。しんしんと降る雪がヘッドランプの僅かな明りの邪魔をし、地形を判らなくする。時間が時間だけに気がもめるが仲々みつからない。暫くして一本の赤旗がヘッドランプの光の中に入った。これで漸く自分達の進む方向が判明した。

こうして我々は、21時5分にC・3を見つけ出し風雪の彷徨から脱出できた。実に15時間に及ぶアタックで、長い一日であった。

エピローグ

こうして我々は、10月31日と云う遅い日にどうにかギャラ・ペリの頂を踏ませて貰うことが出来た。それは、将に今回の登山の苦闘を象徴するかのようなギリギリの登頂であった。

11月1日、冬風の冷たく感じられる中を、上部キャンプを撤収しながらB・Cへと下って、長かった登山の幕は降された。

最後にギャラ・ペリの高度についてふれておきたい。

現在公表されている同峰の高度は7,151m であるが、実際にはもう少し高いような気がする。と云うのは、我々は今回トーメン高度計を3台持参した。そして各高度計をラサ・ホテルの高度 3,650mを基準として高度計の目盛りをセットし、それ以後調整を行わず、各地点で高度計の示度を記録した。10月31日の登頂の際、頂上での高度計の示度は7,150m であった。この数字を見る限りにおいては、公式高度とほぼ同じ値な訳だが、これまでの経験から、この種の高度計は基準点より高所に上がれば上がるほど示度は実際よりも低い値を示すことが知られており、この事から考えると示度が7,150m と云うのは、実際の高度はもう少し高く、7,200～7,300mはありそうに思えるのである。

（文責：尾形好雄）

—HAJギャラ・ペリ登山隊1986年—

隊長　飛田和夫（40）　登攀隊長　尾形好雄（38）
隊員　太田　健（32）　橋本康弘（32）　今村裕隆（27）　藤原拓夫（30）
連絡官　王家瑞（46）　通訳　崔昌燮（26）　連絡官助手　朱　飛（22）

▲頂上稜線からの西峰

ギャラ・ペリ登山を終えて

隊長　飛田和夫

「ヒマラヤの謎の河」。ヤル・ツァンポー河の大湾曲部に外国人が入域したのは今世紀初頭の数隊の探検隊のみで、大湾曲部は現在も「謎」であり、その付近に聳えるナムチャバルワ（7,782m）、ギャラ・ペリ（7,151m）は謎に拍車をかける存在であった。が、ナムチャバルワには中国隊が偵察と試登。ギャラ・ペリには1985年秋に日本ヒマラヤ協会隊が偵察に入り、又、同時期にヤル・ツァンポー河沿いに大分岳連東チベット踏査隊が入域し、貴重な資料が発表され、謎は少しづつ解明されつつある。然し、大湾曲部は依然として「謎」のままであり、目指すギャラ・ペリは南面・南西面の写真は入手出来たものの、詳細な地図や天候等については不明のままであった。

1986年10月31日。16時57分にトランシーバーから風の吹き荒る音と共に、荒い息遣いながらも弾んだ尾形登攀隊長の声が届いた「16時55分に登りました……。」

10月29日アタック失敗（第一次隊）、30日アタック失敗（第二次隊）、そして再度3回目のアタックをかけた一次隊の尾形・橋本・今村が未踏の頂に立つことが出来た。タクティックスの面からも、日程的にも、さらに冬の装いが始まってきているなかでの最後のチャンスに、尾形登攀隊長を中心とした登攀活動によって、白い未踏の頂に3名の足跡を残す事が出来た。この日が失敗に終れば山頂に背を向けざるを得ないギリギリの成功であった。「吹雪の中を彷徨しながらC3に戻った。」と、C2に入っている二次隊に連絡が届いたのは21時を過ぎていた。ギャラ・ペリ登山はやっと終った。

成功し全員が無事に下山すると、今までの高所登山では考えられなかったことが脳裏をかけめぐった。早くキャラバンを開始させ、早く日本へ、早く家庭に戻りたい……。それ程までに今回のギャラ・ペリ登山は私にとって心身共に疲れた登山だったのかも知れない。原因は、不順な天候、長大なルート等があるが、なによりも自分自身の体の故障があるように思える。日本出発の1ケ月半程前に左足指付近の骨折で、何とか歩ける様になったのが出発の約10日前であった。そして、登山開始の約1週間後にはBCからA・BCへの荷上げの帰路、ルート上でスリップし体の右側の胸・脇腹・背中を強打して3～4日の休養、その後は痛みをおさえるために弾力包帯を巻いての登山活動。帰国後もまだ痛みがわずかに残るのでレントゲンを撮ってもらうと肋骨が3本折れていた。

高所登山は、隊を構成し、登山活動に入り、ルートが困難で長大になればなる程、ルート工作、荷上げ、休養といった歯車の1つとなって初めて目的が達成される。以前は自分もピークに立ちたいがために隊長の任につき、歯車の1つとなって行動してきたし、今回も同じ様に計画を遂行してきたが、体の故障により歯車の1つとして成り得なかったことは残念であった。

だが、東チベットでの100名のポーターの雇用とキャラバン、ヤル・ツァンポー河の丸木舟の渡し、連日の雨の中でのキャラバン、ナタを振ってのルート整備、BCの位置の変更、ルートの変更とキャンプ展開の変更、未知なるルート等々、すべての面で未知の地、未踏の頂「ヒマラヤの謎の河の白い頂」は、私達6名のメンバーに登山本来の喜びを学ばさせてくれた。地球上に残り少なくなった未踏の7,000m峰「ギャラ・ペリ」にメンバーの力が結集出来たことは嬉しかった。より大きな目標のステップになったと思っている。

登攀中、眼下に流れるヤル・ツァンポーの淡々たる流れ、対岸には世界最高の未踏峰「ナムチャバルワ」の雄姿がさらに私達の登山意欲をかきた

たせてくれた。

○ポーター

中国登山は一般的に、車道の終点が大本営。その後、ヤク等により前進しＢＣを設けている（カラコルムは、ラクダによるキャラバン）。今回のＢＣは派（ペ）という所から６日間のキャラバンで、途中からは動物による輸送は困難なためにポーター（低所協力員）を雇用した。ポーターとして従事した事の無い人達による輸送は、中国登山協会としても、隊としても心配だった。然し、現地に入ると、中国登山協会、西蔵登山協会からの何度かの連絡と直接に出向いた意気込みが伝わって100名のポーターには、派区を管轄する米林県の公安局長、派区の責任者が各１名づつＢＣまで同行。大きなトラブルも無くＢＣに到着した。

東チベットに住む人達の野外生活を見、歌声を聞く事が出来た。

○天　候

1985年の偵察隊によると10月の２日頃から好天期間に入り以後は、雨がほとんど降っていない。大分岳連のペマコチュンまでの踏査隊も好天に恵まれている。10月に入ると乾季になるのか。

キャラバン中は連日の雨。９月16日にＢＣに到着、18日午後になると、厚い雲はいずこかへ去り、目指すギャラ・ペリと対岸にはナムチャバルワ山群が姿をあらわす。翌19日好天の下で4,200ｍまで偵察に上り、西壁と中央に走る予定ルートを偵察出来たが、20日からは再び厚い雲に入りＢＣは雨、A･BC（4,200ｍ）付近は、雨～ミゾレ～アラレ～雪といった変りやすい天気。Ｃ１（5,000m）は雪。悪天も10月に入ればという気持には応えてくれず続くが、４日に好天が訪れ、いよいよ好天期間に入った……。（派区の責任者にメールランナーになって頂き、５日にＢＣ到着し、６日に戻って行った。日本への連絡は、好天到来とした）。だが５日午後からは再び悪天に入る。とにかく、東チベットには太陽が無いのかと思える程であった。連日の降雪に、許容量を越えた雪は、昼、夜と云わず雪崩が発生し、夜半の大雪崩は爆風でA･BCにおそいかかり、３張あったテントの内、１張はわずかの布を残しはるか下方に飛ばされていた。隊員が滞在していなかったのがせめてもの救いだった。

10月17日頃より好天に入った様子だが、青空が広がると、今まで無風悪天だったのが一気に強風となり稜線の雪煙は雲のごとくたなびき、ブリザードは強烈。気温も下り出し、アタック時は－25°位までになり、ヒマラヤは確実に冬の装いになってきた。その間も何度か降雪に見舞われる。

帰路は、好天の下のキャラバンで、ナムチャバルワを心ゆくまで望む事が出来、派近くでは真白なギャラ・ペリも望めた。

11月～12月は好天が多いとの事だが山々は冬。

○登　攀

計画ではＢＣを約3,500ｍに設ける予定だったが、3,200ｍとなり山頂との高差約4,000ｍ。

A･BCを計画通り西壁の基部、氷河をへだてたモレーン稜の最奥部に設営（4,200ｍ）。西壁中央のⅡ稜を計画するが、取付までの間にクレバスと雪崩のために断念し、偵察の後にⅠ稜に転進。６名のメンバーを２名づつの３パーティーに分けて、ルート工作・荷上・休養のローティーションにする。Ｃ１へのルート工作から荷上げに入っている時点で私のスリップ事故により、２パーティーになり、10月６日頃より再び３パーティー。ルートは西壁の右端から大きく迂回するようにして南稜に達した。

登山も中期に入ると、高度が上ることから高所の影響と疲労等で100％の稼動率は難しくなり、結果的にはルートが伸びなくなるので、２名３パーティーから３名の２パーティーにする。

ＡＣ（6,700ｍ）までルートを確保し全員ＢＣに下降、３～４日の休養後アタック態勢に入った。予定していたＡＣ用のテントが、A･BCで雪崩に飛ばされているので、人員の割には小型のテントを使用した。テントが狭かったのか、又、他の要因も加わっているだろうが、一次、二次隊は睡眠はおろか、精気を抜かれた様な状態でアタックに向うことになった。第一次隊による第３回目のアタックはＣ３（6,300ｍ）より行なった。

結果をみるなら、Ｃ３とＡＣのキャンプ配置と高度を変える事により、又、違った結果が生まれたのではないかと思っている。

登　頂　日　記

今　村　裕　隆

今回、初めて日本ヒマラヤ協会の一員として、中国登山に行く事になりました。結果は、尾形、橋本の両氏と３度目のアタックにして初登頂する事が出来ました。

しかし、何よりも登山期間、誰一人として脱落する事なく、全員無事帰国できたのがよかったと思います。

今回の登山で、印象に残ったアタック３日間の日記から

第１次アタック

10月29日　曇り時々雪

狭いＡ・Ｃテントで眠れない夜だった。

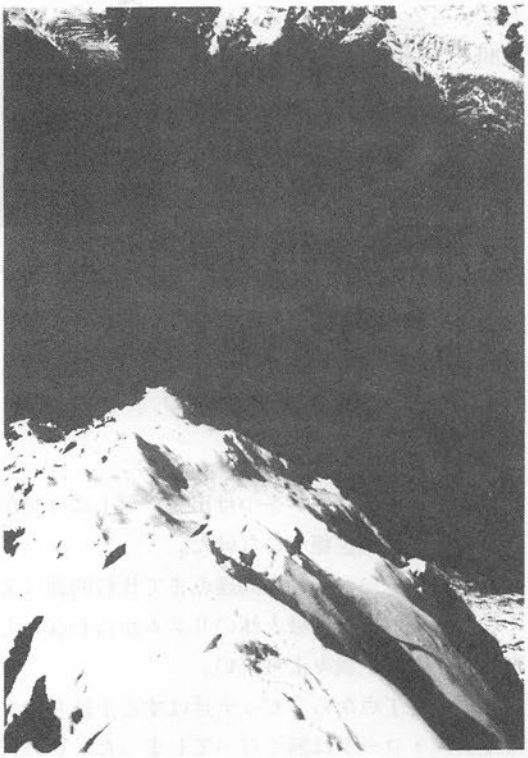
３時起床予定を１時半頃起き出発準備をする。５時前、まだ暗いうちにＡ・Ｃを出発。生憎、外はガスっていて雪を伴った風が吹いている。

出発するとすぐ、調子が悪い事に気が付いた。―昨日、昨夜と眠れない日が続いた為だろうか？この調子でどこまで行けるか不安になる。

Ａ・Ｃ裏の垂壁を乗越し、広い稜線に出るとクレバスがあり、まだ暗くそれ以上のルートが判らず、ツェルトを被って夜が明けるのを待つ。

１時間位い待つと明るくなってきたので出発。雪稜から不安定な雪質の雪壁となる。その先でクレバスに阻まれ、クレバスにそって２ピッチ右にトラバースをする。この頃から天気も悪くなってクレバスの上からスノー・シャワーが降ってくる。

フィックス・ロープを６本張り。私の高度計で約6,900ｍまで尾形氏が達したところで、フィックス・ロープはおしまいになった。天候は益々悪くなるばかりで、このまま行っても頂上まで達しない、との判断からここまでで断念する。



昨日の13時以後、交信の止絶えていた第２次隊の飛田パーティとＡ・Ｃで出合った。尾形氏のトランシーバの受信部が壊れていた様だ。

明日、二次隊には予定通りアタックしてもらい、我々、１次隊はＣ３で１日休養後再度アタックの予定となる。

今日の体調ではとても山頂まで着かないだろう。どうにか明日の休養で体調を戻さなくては。

第２次アタック（１次隊休養）

10月30日　ガス時々雪

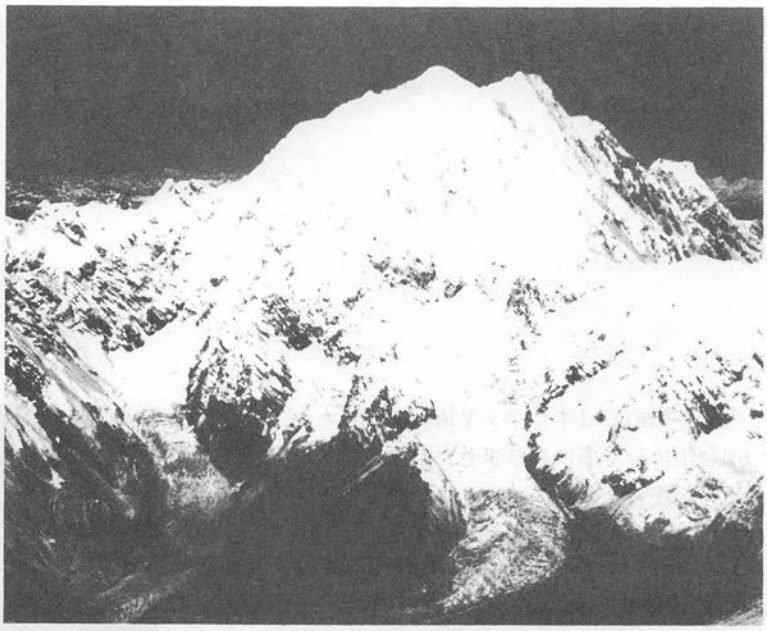
昨日クタクタになって下って来たが、一晩ぐっすりと眠れたせいか、幾らか調子がよくなってき

た。それでも、起きた時は頭が重く、身体もだるかった。

飛田隊長以下２次隊は、７時頃Ａ・Ｃを出発し、３時間余りで昨日の最高到達点付近まで達したが、やはり狭いＡ・Ｃで眠れなかったのだろうか、体調不良の為断念。14時過ぎＣ３に下って来た。

尾形氏のトランシーバが故障している為、以上の報告をＣ３で聞く。飛田隊長が「すいませんでした。」と言っていたのが印象的だった。

報告後、２次隊は疲れた様子でＣ２に下って行った。



残すは、明日もう一度。最後のチャンスを与えられた１日となった。

明日はＣ３から一気に頂上を目指す。

第３次アタック

10月31日　ガス時々晴れ

Ｃ３をヘッドランプをつけ出発。天上には星がきらめき、微風、穏やかな朝だ。

Ａ・Ｃから先日の最高到達点まで比較的調子よく進む。尾形氏は呼吸と体のリズムが合わないと言っていたが、我々より早い。

先日の終了点から２ピッチ延ばすと手持ちのフィックス・ロープは無くなってしまった。この付近から傾斜も幾らか弱まってきたので尾形氏がメインザイルだけを引っぱって登って行く。

相変らずラッセルが深くなかなか進まない。我々もくっついて行くのが精一杯だった。頂上岩壁が一向に近づかない。

頂上岩壁直下のクレバスに着いた時には15時を過ぎてしまった。どうするのかなと尾形氏の顔を見ると「行くしきゃない。」と言う。確かに頂上は目と鼻の先に近づいている。

約２ピッチ分、頂上岩壁基部を捲く様に登ると氷のクーロワールとなる。約50ｍ、最後にかぶった雪壁を乗越すと頂上稜線に出る。このクーロワールは傾斜も強く、よく尾形氏が登ったと感心させられた。

そこから少しでスノードームの様になった頂上に着く。頂上は風が強く、時刻も押し迫っているので初登頂の感激など味わう余裕などなく記念写真を写すと早々に下降にうつる。

また、私の高度計で頂上は7,150ｍを指していた。Ｃ３からの高度差が約1,000ｍだ。京大方式で換算すると約7,300ｍとなる。ギャラ・ペリの7,151ｍという高度が怪しくなってきた。登頂時刻が遅れたのも予想以上に高度差があった為でもある。

下降は途中で日が暮れ、Ｃ３上のプラトーではキャンプの方向が判らなくなり、一時はどうなるかと思ったが、運よく赤旗が見つかり無事キャンプに戻る事が出来た。

翌日、Ａ・ＢＣまで下ると、連絡官の王先生、通訳の崔氏が我々を出迎えに来られていた。

我々以上にうれしそうな顔しているのを見ると、登頂したのだな、長かった登山もようやく終ったんだなと思えてきた。

機会は瞬時に過ぎ去った

太　田　　健

頂上に立つつもりでいた。いつのまにかその機会は瞬時に過ぎ去った。

トランシーバーの故障により、いまひとつ1次隊の最高到達点の様子が判らないままの1日早いアタックと風雪により壊されたポールを修復したACテントの想像以上の不自由さ。

ACのほとんど眠れない息苦しい夜が明けた。気温は−25℃。体感温度はかなり低く、手はじんじんする。昨日の1次隊のトレールは消えているが、広い稜どおしにクレバスをかわしながら氷崖のトラバースとなる。雪は膝下だが悪く、乗ると谷側へ滑り落ちるラッセルに体力は消耗する。頂上稜線とそれに続くピークを見ると、少し手前で見たピークよりずっと遠くに見える。手からも足からも力が一気に抜ける。正直云って届かないと思った。今夜もACに泊ると体がもたないような気がする。C3には1次隊が待機しているので、C2まで降りなくてはならないと思うと絶望的になる。ACに戻ったときには全身虚脱状態で座りこんでしまった。

あのたった一度のチャンスにやはり行くべきだったと悔まれる。夢みた登頂だったが……いやピークを踏むことよりも、たとえ1ピッチでも自分の手で1次隊の最高到達点よりのばすことができなかったか。もし、のばすことができていれば今回の登山も充分納得できたと思う。

11月2日8時、少し雲の浮かぶ爽やかな秋の朝だ。BCのまわりの木々も黄色く色づいている。濡れた個装を干し、荷を少しまとめる。

困難な中、様々な問題がでてくる中での飛田隊長の臨機応変のタクティクスや尾形登攀隊長をはじめとする風の様なアタックは勉強になりました。氏の言葉で「この一歩一歩、これが頂上に近づくんですよ。これっきゃないんですよ。」は印象的です。

食糧担当の私の仕事には、藤原、今村、橋本君にずいぶん協力してもらい、私にとって初顔合せのメンバーだったにもかかわらず、いい協力的な雰囲気の中で登山ができたことに感謝いたします。

▲C1上部、洞穴バンドから門への登り

ギャラ・ペリ偵察の思い出

三　浦　敏　弘

「ギャラ・ペリの偵察で思い出す事は、キャラバン中、晴れた日は２日間、Ｂ・Ｃからの偵察で偶然にも４日連続晴れて何とか西面の写真を撮る事が出来たが、拉薩から拉薩に戻るまでは32日間中、９日間晴れ間が覗いただけでしかもそれがまったくの快晴という日は少なかった。晴れ間の出るまでは、この地方は晴れの天気はあるのかと思える位だった。おかげで、連日濡れネズミの行動には参った。

中でも忘れられない出来事がある。一つめは、「金八（ハチ）事件」、キャラバン途中、雑木林の草地にハチの巣があり、その脇を通ってハチを避けたつもりが不幸にもズボンの中にハチが入り、小生の金玉にハチが一刺し、一瞬、訳が分からなくなり飛び上がった。「ハチだ!!」激痛が走り過ぎた。すばやく金玉周辺をズボンの上からつまみ何とか殺した。金玉をハチに刺されるのは、おそらく、後にも先にも生涯二度とない事だろう。それ以降、何故か偵察隊の中では「金八（ハチ）」先生と呼ばれたものだった。その２日前には昼食時に隊全体ハチに襲われ皆、四方八方逃げ廻ったのだった。結果は連絡官が顔に三カ所刺され、その刺された顔を見て爆笑せずにはいられなかった。後日、小生にその罰が当ったのだろうか？

２つめは「トゲ物語」、翌年、本隊がＢ・Ｃにした地点迄の雑木林のルート作りには、トゲの木帯がありナタで切り開いては進み、１日で両手に20箇所程トゲが刺さったのを記憶している。毎晩トゲ抜きに精を出したものだった。

３つめは「熊との遭遇」、そして、Ｂ・Ｃへ上がる前々日ギャラの猟師が子グマをとったと我々のＢ・Ｃへ立ち寄り、翌日からの上部偵察に恐怖を覚えた。「子グマが殺されれば、さぞ親グマが怒っている」と考えられるからである。そして、翌日、山森さんと２人で10日分の食料の荷上げをしたのだが、熊が怖いのでピッケルを叩いたり、犬の吠え声をかかさずに荷上げをしたのである。帰路、草原に出る手前の雑木林の中でギャラの猟師の銃声を聞く「ズドーン」という丁度、日本のお祭りでよく使われている火縄銃の音と同じだった。その瞬間、山森さんと小生は、恐怖におののきながら足を止めて情勢を伺った。そうしているうちに犬の吠える声が徐々に近付き、とうとう我々のすぐ近くになってきた。そして獣道に、人を這わせたのよりもひと回り位大きく、丸々とした茶褐色の熊が現われた。その差約10ｍ、我々は、声も出ず、朽れた大木に身を寄せ、一歩も動く事ができなかった。何せ瞬間の事なので、神に祈る間もなく、どうなる事かと思っていたら、その熊は、獣道を下らず、雑木林の中へ消えて行き、そのすぐ１～２ｍ後を、ギャラの猟犬が追いかけていった。「ホッと一息、よかった!」、その熊の動作ののろさには、とても逃げ回っている様には見えなかったのは不思議だった。

後に、Ｂ・Ｃへ立寄った猟師によると射止められなかったと云うことで、益々、翌日の上部への偵察に行くのに恐怖心を覚えた。熊の足跡は至る所にあり中でも本隊の登頂ルートに選んだ4,000ｍ以上までも続いているのには驚かされた。

今回のキャラバンは、他の地域とは異なった天候の悪さ、ハチに刺され、クマと出合い（後日。我々の遭遇したものは、野生の牛という事が判明した）、トゲの木に悩やませながらのものであったが、振り返ってみると、その分、思い出多いものだった。

ティンベ村の交差いとこ婚と ギャラ村の家族構成

1. 交差いとこ婚か？

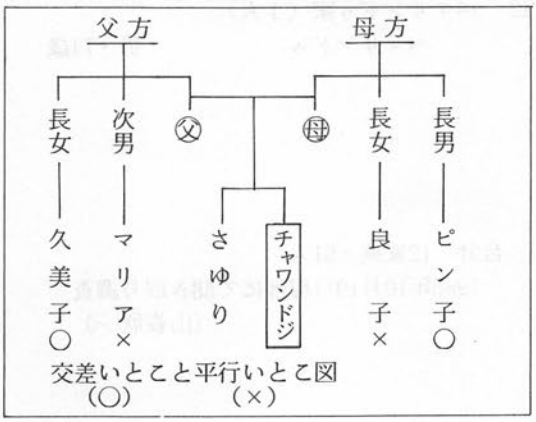
1985年９月20日、ヤル・ツァンポー河左岸のティンベ村（約120人）を出発した。馬10頭とポーター５人の小さなキャラバンであった。ポーター５人は女で17才から19才までの陽気な子達であった。初めは顔の特徴をとらえて、その子らを久美子、さゆり等と呼んでいたが、一人だけ特徴のない子がいたので仮に良子と呼んだ。

チュベの部落からは馬も使えないので、20人の男のポーターが代わった。この中にティンベ村でキャンプしている時から四六時中我々から離れないひょうきんな男がいた。名前をチャワンドジと云う。

キャラバンが進み、夜ともなると我々のテントの前はポーター達が集まりにぎやかになる。言葉を教わったり、トランプをしたりするうちに、どうもチャワンドジは、良子に気があるらしい事がわかった。そこで何故結婚しないのかとひやかすと、母親が姉妹同志なので結婚できないとのことだった。

私は、オジとメイなら無理だろうが、いとこ同志なら可能ではないか？と聞くと、「いとこ同志はＯＫだけれども母親が姉妹同志なのでダメ」と云う。交差いとこ婚の習慣であった。

交差いとことは、母の兄弟の娘と、父の姉妹の娘を呼び、母の姉妹の娘や父の兄弟の娘は**平行いとこ**と呼ぶ。結局チャワンドジと良子は、母親同志が姉妹のため平行いとことなり悲恋に終るのである。これらの習慣は血族中の結婚を防ぐための知恵であったのだろう。



交差いとこと平行いとこ図
（○）　（×）

チャワンドジが結ばれるのは、５人の中ではピン子、久美子のいづれかである。良子とマリアは平行いとこでダメ。

村松一弥の「中国の少数民族」によれば、このような交差いとこを嫁の優先候補とする習慣は、イ族や四川と雲南のチベット系民族に広く分布していることが紹介されている。

ティベ村付近は、大きな地震があり現在住んでいる人達は、ダライ・ラマ動乱の頃、四川省から移動して来たと話していることからみても、つじつまがあいそうな話ではあった。

2. ただ今ギャラ村は12家族61人？

ギャラ・ペリの偵察を終えての楽しみは、秋深い幻の村ペマコチュンへ入ることであったが、残念ながら時間切れとなった。しかし、ギャラ村へ直接イカダに乗ってヤル・ツァンポーを渡ることができた。F. M ベイリーの頃は、ここに綱が張ってありそれを頼りに舟を渡ったらしいが、現在では、上流までイカダを曳いて行き、流れに任かせて途中から一生懸命に漕ぐのである。ベイリーの時代はここも双胴の舟だったが、現在はギャラ・ペリに熊撃ちに行く猟師のイカダだけがあった。

対岸からみたギャラ村は、ヤル・ツァンポー河右岸にめずらしく平坦部が拓けていて緑一色の桃源境であった。上陸してみるとまさにそのとおりであった。村の中央には穀物を集める広場と保管する倉などがあり、家々の囲りには、実をたわわに実らせた胡桃の大木が所狭しと生えている。

ベース・キャンプに迎えに来てくれたから、一緒に生活したので村の人々は好意的だった。ヤル・ツァンポー河を渡る前の日と、当日夜に若者達から聞きとった村の構成は別表のとおりである。

1. ツェリンドジ家（9人）
父　ツェリンドジ（黒い服）　男・51歳
母　　？　　女　？
1　サンジトシ　男・24歳
2　？　？　？
3　ツェリノブ　男・19歳
4　テンジタシ　男・16歳
5　タチン（裸足）　女・14歳
6　パサンツェリン　男・7歳
7　ミマツエリン　男・6歳

2. ミンジュ家（11人）
父　ミンジュ（写真無い）　男・51歳
母　ワンモ（歯欠け・喉異常）　女・58歳
1　バルン　女・17歳
2　ゴゾマ（一番可愛い）　女・14歳
3　ニャク　女・12歳
4　？
⋮
9　？　女・2歳

3. プッツオ家（3人）
父　プッツオ　男・？
母　ツリオモ　女・25歳
1　？　？　？

4. チュンベ家（9人）
父　？　男・？
母　？　女・？
1　チュンベ　男・34歳
2　ペマオンチュ　男・？
3　ペマトジュ（猟師）　男・27歳
4　ゲソン　女・15歳
5　？
6　？
7　？

5. ペマラモ家（6人）
父　？
母　？
1　ペマラモ　女・22歳
2　？
3　？
4　？

6. ツュラ家（7人）
父　？（良い男）
母　？
1　ツュラ　女・25歳
2　ツリサム　女・22歳
3　ケサンドジュ　男・14歳
4　？
5　？

7. スナオンチェ家（5人）
父　？
母　チュラ　女・60歳
1　スナオンチュ　男・34歳
2　？
3　？

8. ペマ家（3人）
父　ペマ　男・62歳
？
1　？

9. ドジェ家（5人）
ドジェ　男・32歳
？
？
？
？

10. ハモ家（1人）
ハモ　女・72歳

11. ニマ家（1人）
ニマ　女・65歳

12. ペマサンドゥ家（1人）
ペマサンドゥ　男・74歳

合計　12家族・61人
1985年10月10日現地にて聞き取り調査
（山森欣一）

ギャラ・ペリの気象

尾形好雄

私は1985年の秋、ブータン・ヒマラヤのガンケル・プンスム（7,541m）の遠征に出かけた。先発隊として８月15日にブータンの首都ティンプーを出発して８月28日にＢＣを建設したのだが、この時期のキャラバンは、モンスーンのさ中と云うこともあって、殆ど連日雨に見舞われる散々なものであった。本格的な登山活動は９月２日から開始したのであるが、９月一杯はモンスーンの影響で悪天候に悩まされた。ポスト・モンスーンの好天期間が訪れたのは10月１日になってからである。

今回、ギャラ・ペリ遠征の参加が決った時、先ず浮んだのがこのガンケル遠征時の天候であった。ガンケルよりもさらに東に位置するギャラ・ペリはガンケル以上の悪天なのであろうとそれなりの覚悟をして出かけたのだが、まさに聞きしに勝る悪天候のエリアであった。今回のギャラ・ペリの気象は'85年のガンケルに比べて、なお悪い天候であったと云えるのは確かだ。

９月11日にペを出発してＢＣへのキャラバンを開始したが、ＢＣ迄の５日間は連日雨に見舞われた。それでも高度が低いだけ同じ雨でもガンケルよりは楽であった。

９月16日のＢＣ建設から10月15日迄の１ケ月間で青天らしい青天に見舞われたのは、僅か２日間だけ。雨も雪も降らなかった日はこの２日間の青天を含めて４日しかなく、残りの25日間は殆ど陽の恵みを受けることはなかった。

また、この１ケ月間の気象パターンを見てみると、９月25日、10月３日、10月10日の夜にいずれも大雪に見舞われており、大体１週間周期で大きく崩れるパターンがみられた。

今回はＢＣの高度が3,200ｍと低かったこともあって雨と雪の境目は大体ＡＢＣの高度で4,000ｍ～4,200ｍ位であった。唯、10月も上旬を過ぎると気温も下がってきて、10月10日の大雪の時は3,300ｍ付近迄真白になった。

此の地に漸く秋の好天の兆が見られたのは10月16日になってからである。そして翌、17日から28日迄はまさにモンスーン明けのような素晴らしい好天期間が訪れた。この好天期間こそ此の地に於ける絶好のアタック・チャンスであろう。我々は１日違いでこの好天を逃してしまい苦労を強いられるハメになった。

'85年のＨＡＪ偵察隊及び同時期にペマコチュンまで入った大分岳連踏査隊の報告によれば'85年は10月２日頃よりこの秋の好天期間が訪れたと云われる。'86年は前年に比べて２週間程遅れたようである。尤も、これは東チベットの此の辺りだけではなく雲南、貴州などでもモンスーン明けが２週間程遅れたとかで、あの常春のような気候温暖で知られる雲貴高原でさえ９月は例年にない天候不順であったことが伝えられた。

秋の好天到来と共に気温も下がり出し、ＡＢＣの最低気温もマイナスを示すようになった。また、南稜上には雪煙が舞い上がり、ルート工作では目もあけられないようなブリザードに見舞われるなど悪天の後は風と寒気が新たに行手を邪魔だてするようになった。

風の問題については、ナムチャバルワの中国登山隊からも報告されているが、これはやはり大ゴルジュと云う地形的な影響で生ずるのであろうか。ギャラ・ペリの場合、大体Ｃ２直下辺りからヤル・ツァンポーの流れが俯瞰出来るようになると風に苦しめられる。とくに今回のルートでは、右氷河の源頭部付近が西壁からの風の通り路になって

たこともあって強風が吹き荒れていた。最もひどい日にはフィックス・ロープが縄飛びの縄のように宙に舞い上げられてユマールをセッティングするのに苦労したこともあった。

また、西壁の上端を縁どる南稜上には巨大な氷崖がシュカブラのお化けの様な鎧をまとってモンスターの如く立ちはだかっているが、あれも風によって生成されたものなのであろう。

登山期間中の気温については別表の通りである。10月上旬迄は悪天候ながらも気温は高くゼブラ岩迄のルート工作は軍手にオーバーミトンで充分であった。登山期間中の最低気温も10月末になって漸く−22℃程度であるからそれほどの低温では無かった。但し、これに風が加わるため体感温度の方はかなり下がる。

ナムチャバルワやギャラ・ペリはヒマラヤ山脈と横断山脈の接合地帯にあたり、ヤル・ツァンポーの流れは、此々で大屈曲部をなして流れを急に南へ向きを変え、インド洋に注いでいる。このためインド洋の湿った空気がヤル・ツァンポーの渓谷に沿って北上して大屈曲部に流入し、この地域の気候を温暖・湿潤で雨や雪の多いものしていると云われている。

土地の人に云わせると5月から9月末までは雨季で、時には10月まで長びくこともあると云う。雨季の間は殆ど毎日雨か雪が降り、雲は厚く、ナムチャバルワの雄姿は殆ど見ることが出来ないと云われる。11月〜12月にかけては寒くなるが好天の日が多くなり、山も良く見られるとの事であった。

この山塊の登山時期としていつがベターなのか一度の経験で言及することはおこがましいが、秋でも今回のようにモンスーン下の悪天時期に6,000m位迄ルートを延し、身体を高度順化させておき、好天到来したら一気呵成にアタックするようにすれば十分勝算はあるように思われる。因に今遠征では悪天による気象停滞は一日も無く、全天候型の行動であった。湿潤で腐った雪もうまく利用してルートを延すことが出来る。

但し、ナムチャバルワの場合は更に一考を要するように思われる。

ギャラ・ペリの気温（1986年秋）

月日	場所	時刻	気温	場所	時刻	気温
9/16	−	−	−℃	BC	23：30	14℃
17	BC	8：15	14	BC	22：10	10
18	BC	9：50	15	BC	21：10	11
19	BC	7：10	11	−	−	−
21	BC	8：30	12	−	−	−
23	−	−	−	BC	15：30	12
25	−	−	−	BC	19：00	10
26	−	−	−	BC	20：30	10
27	BC	8：00	8	ABC	19：00	3
28	ABC	7：00	2	ABC	19：00	4
29	ABC	7：00	2	ABC	20：00	3
30	ABC	8：00	2	ABC	19：00	4
10/1	−	−	−	ABC	19：00	4
2	ABC	8：00	3	ABC	21：00	4
3	ABC	8：00	1	ABC	20：00	2
4	ABC	8：00	−1	−	−	−
5	−	−	−	BC	19：00	10
8	ABC	8：00	1	C1	19：00	0
9	C1	7：00	−3	C1	21：00	0
10	C1	7：00	−1	C1	21：00	−1
11	C1	7：00	−1	C2	20：00	−10
12	C2	7：00	−11	C2	20：00	−9
13	C2	7：00	−10	C2	19：00	−9
14	C2	7：00	−9	ABC	20：00	1
15	ABC	7：00	0	ABC	20：00	2
16	ABC	7：00	−2	C1	20：00	−2
17	C1	7：00	−4	C1	20：00	−4
18	C1	7：00	−6.5	C2	20：00	−7
19	C2	7：00	−7	C2	20：00	−9
20	C2	7：00	−12.5	C3	20：00	−13.5
21	C3	7：00	−17	C2	20：00	−10
22	C2	7：00	−12	−	−	−
23	−	−	−	BC	20：00	7
25	BC	7：00	1	C1	20：00	−7
26	C1	7：00	−11	C2	19：00	−12
27	C2	7：00	−18	C3	20：00	−20
28	C3	7：00	−21.5	C4	18：30	−22
29	C4	4：30	−20	C3	19：30	−16.5
30	C3	7：00	−18	C3	21：00	−16
31	C3	6：00	−18	−	−	−
11/3	BC	8：00	2	−	−	−

ギャラ・ペリの天候概要(1986年秋)

	月日	天候	備考
キャラバン	9/8	◑→◎	
	9	●→◎時々◑	どんよりとした雨雲、朝方雨
	10	◎→●	夜、激しい雨
	11	●→◎→●	夜、激しい雨
	12	●時々◎	朝から雨
	13	●時々◎	朝から雨
	14	◎→●	
	15	◎時々●	
偵察・順応	16	◎時々●ニ	
	17	●時々◎	殆ど終日雨
	18	◎→●ニ→◑	午後から陽が射す
	19	◑	1日晴れ
	20	●→◎	午後は雨が降ったり止んだり
	21	◎	1日中どんよりとした曇り空
登山活動	22	◎時々●	ABCで雪がパラつく
	23	◎→●	午後3時から雨降り、夜、激しい雨
	24	●時々◎	4,000m 付近まで真白になる
	25	●	雨は夕方から雪に変わり、大雪となる
	26	◎時々●	C1では雪後曇り
	27	◒→◎	C1では曇り時々雪
	28	◎一時◒	
	29	⊛時々◎	
	30	⊛→◎→●	
	10/1	◎→●	朝珍らしく雨も雪も降らず
	2	◎一時●	夕方、束の間の陽射しあり
	3	⊛時々◎	朝、夕降雪、夜大雪
	4	◑	久々の晴れ間
	5	◎時々◑一時⊛	
	6	◎時々●	C1上部は濃霧、視界最悪
	7	◎→●	C1上部は雪
	8	⊛→◎	夜半からの雪降り続く
	9	◑時々⊛	BCは晴れ後曇り

	月日	天候	備考
登山活動	10/10	◎→⊛	一時雷あり、BCは終日雨
	11	◎→◑	3,300m付近まで真白になる
	12	◎→⊛	夜半に西壁で大雪崩発生
	13	◎時々⊛	
	14	◎時々⊛	
	15	◎時々⊛	C2上部はブリザード
	16	◎時々◑	朝方、青空みられる、好天の兆
	17	◑時々◎	C2は濃霧、風強し
	18	◑	時々濃霧、晴天らしい晴天になる
	19	◎→◑	前日同様の穏かな天気
	20	◑	晴れ後、濃霧、C3は強風
	21	◑	晴れ後、ブリザード
	22	◑時々◎	
	23	◎時々◑	雪煙もなく穏かな日和
	24	○	今遠征中一番の快晴
	25	○	前日同様の快晴
	26	◑→◎	濃霧
	27	○	夜半からの強風が朝迄続く
	28	○	午後から上層雲が見られる
	29	◎時々⊛	C4上部は風雪
	30	◎時々⊛	終日濃霧、小雪舞う
	31	◑時々◎→⊛	風強し、夕方より雪
	11/1	◑	午後、濃霧
	2	◑→◎	
	3	◑	1日晴れ
キャラバン	4	◎→◑	
	5	◎一時●	夕方雨
	6	◑	
	7	◑	霜が降り冷えこむ
	8	◑	
	9	◎	夜半に雨
	10	●→◎→●	夜半から雪にかわる
	11	◎	

ギャラ・ペリ周辺気象概要(1985年秋)

月日	場所・高度・天候			温度			備考
	8時	14時	20時	8時	14時	20時	
9/12	飛行機の中	ラサ 3,650m ◐	ラサ ◎	12			
13	ラサ 3,570m ◎	ラサ ◎	ラサ ◎			12	涼しい
14	ラサ 3,550m ◎	ラサ ◎	ラサ ◐	6.5	18	13	日差し強
15	ラサ 3,550m ◎	工布工達3,400m ◎	八一鎮3,050m ◎	8.5	18	13	風強い
16	八一鎮3,000m ◎	東久2,570m ◎	八一鎮3,030m ◎	10.5	18.5	15	時々雨
17	八一鎮3,000m ◎	−	派3,000m ◎	9.5	−	12	時々はれ
18	派2,960m ◎	−	ティンベ2,950m ◎	12	17	10.5	時々雨
19	ティンベ2,940m ◎	ティンベ ◎	ティンベ ◎	9	18.5	15	時々雨
20	ティンベ2,950m ◎	◎	タリン3,150m ●	9	−	7	朝方大雨
21	タリン3,120m ◎	ツ川畔2,800m ◎	チュベ2,860m ●	7	13	10	月見ゆ
22	チュベ2,840m ◎	−	林の中2,940m ○	8	14	10	一日晴れ
23	林の中2,870m ◐	沢筋 2,790m ◐	加拉対岸2,850m ◐	8	−	12	〃
24	加拉対岸2,800m ◎	◎	林の中2,990m ◎	5	−	10	
25	林の中2,970m ●	◎	BH2,890m ●	7.5	−	−	日中曇り
26	BH2,880m ●	BH2,870m ●	BH2,900m ◎	7	8.5	7	雨時々曇り
27	BH2,860m ◎	TC 3,250m ◎	BH2,850m ◎	6	−	10	〃
28	BH2,860m ●	TC途中 ●	BH2,870m ◎	7.5	−	9	〃
29	BH2,830m ◎	TC ●	BH2,830m ●	8	−	11	〃
30	BH2,830m ●	TC 3,200m ●	TC 3,190m ●	5	−	8	
10/1	TC 3,160m ●	TC 3,180m ●	TC 3,150m ●	4.5	6	3	
2	TC 3,130m ◎	BC 3,550m ◐	BC 3,550m ○	2	17	3	
3	BC 3,540m ○	BC上3,800m ◎	BC 3,550m ◐	−2	16	4.5	
4	BC 3,540m ○	西壁基部4,150m ○	BC 3,560m ○	−2.5	16	5	
5	BC 3,550m ○	BC ○	BC 3,550m ○	−0.5	16.5	6.5	
6	BC 3,540m ◎	TC 3,190m ◎	TC 3,190m ◎	2	16.5	13.5	
7	TC 3,190m ◎	TC 3,220m ◎	TC 3,220m ◎	5	10	9	陽出ず
8	TC 3,200m ●	BH2,870m ◎	BH2,850m ◎	4	13	10	
9	BH2,830m ◎	BH	BH ◎	6	14	11	
10	BH2,820m ◎	下山途中 ◎	加拉対岸2,830m ◎	6.5		11.5	
11	加拉対岸2,800m ◎	加拉2,805m ◎	加拉2,800m ◎	7	20	11	風強い
12	加拉2,780m ◎	断崖途中2,750m ◎	キャンプ2,780m ◎				
13	キャンプ2,760m ◎	ジュベ2,920m ◐	派手前 ◎				
14	派2,930m ◎	派 ◐	派 2,940m ◐				
15	派 ◎	米林 ◎	八一鎮 ◎				
16	八一鎮 ◎	◎	ラサ手前 ◎				

チベット登山の現状

新たな解禁峰

中国の高峰が開放されてから1986年で７年目を迎える。1980年のオープン時にチベット自治区内で開放された高峰は、チョモランマとシシャパンマの２峰とその姉妹峰だけであった。

其の後、西蔵登山協会ではモラムチン、カン・ペン・チン、ポーロンリ、チャンツェなどの山々を開放したが、これらは何れもシシャパンマやチョモランマの姉妹峰と云う範ちゅうでのオープンであった。

1985年になって西蔵登山協会では、これら２つの高峰以外の山域を初めて開放した。西チベットのナムナニ峰とラサの南のニンチンカンサ峰である。

そして、1986年春に同協会は、さらに1986年から1990年までに開放予定の18峰についてチベット人民政府に申請して承認を得たと発表した。

これら18峰のリストを見ると1987年までには、マカルー、ローツェ、チョー・オューなどの8,000ｍ峰がオープンされることになっており、予定通りオープンされれば、中国々内に有する8,000ｍ峰９座が全て開放されることになる。また、これらジャイアンツの姉妹峰としては、次のような山山が開放される。

－チョー・オューの周辺－

ギャチュン・カン（7,985ｍ）

チョー・ウィ（7,354ｍ）

チョラプサン（6,596ｍ）

チョー・ウィは、ネパールではチョー・アウィと呼ばれ、未踏峰としても人気の高い山であったが、1986年秋にＨＡＪ隊に依って中国側から初登頂された。

その他、1986年から1987年にかけては、クーラ・カンリ、カルジャン、ニエンチェンタングラ、ギャラ・ペリ、ラプチェ・カン、メンルンツェ、カンガァドゥ……など7,000ｍの未踏峰が10座もオープンされる。この内、1986年にオープンされたクーラ・カンリ、カルジャン、ニエンチェンタングラ、チョー・ウィ、ギャラ・ペリは何れも日本隊によって初登頂された。

また、ラプチェ・カンには1987年の本隊を前に1986年秋、ＨＡＪと西蔵登山協会の合同隊が偵察に入り、同じくカンガドゥには同志社大山岳会が偵察に入った。

これら順次開放された山々のいきさつを見ると、中国の新たな山の開放と云うのは、先ず、登山隊から未解禁峰への登山申請があってから、その山を調査し、その山の位置する所轄省や自治区人民政府と協議の上、開放するかどうかを決めているようである。

尚、新たに開放された山については、それらの隣接峰に対して姉妹峰の考えは適用されないとの事。例えば、従来の考え方からすれば、ギャラ・ペリが開放されたのならその隣接峰であるセンダンプー（6,700ｍ）などは開放されてもよさそうに思えるのだが、開放はあくまでもギャラ・ペリのみと云う事である。

チベットの開放されている主な高峰は、別添リストを参照されたい。

新たな開放旅遊地域

1985年のナムナニ峰のオープンに伴い、聖地カイラス山、マナサロワール湖の旅遊が出来るようになり、ルートとして新蔵公路、チャンタン高原も開放された。

ネパールとの相互旅遊に関しては、ザンムー（樟木）とフラン（普蘭、インド名タクラコット）の２箇所の国境が開放されており、1985年からラサ～ザンムー～コダリ～カトマンズ間の自動車旅

遊が開始された。フランの方は、ネパール側の道路事情などもあって今のところ自動車旅遊は出来ない。（フランからラサ迄の自動車旅遊は可能。）

1986年4月7日、中国公安省スポークスマンは、71の通関港（ロ岸）で中国人・外国人の出入国を認めると発表した。

この発表によると限定付き（国境を接する両国政府職員の証明書に基づく通行のみに限る。）ではあるが、中央部ネパールのランタン谷の入り口にあるシャベルベンシからギィロン（吉隆）へのルートが開放されたと云われたが、西蔵の国際体育旅遊公司の話では、まだ、開放されていないとの事。同じくシッキムのガントックからツォモ（亜東）へのルートも限定付き（特別な許可を受けた者だけが入出国できる。）で開放されたと発表されたが、これも同公司の話では、開放されていないとの事。

－公路の開放－

青蔵高原を縦断する西寧～ラサ間の青蔵公路の全長約2,000㎞が1986年春から正式にオープンされた。この青蔵公路の正式オープンに伴い、ツァイダム盆地、チャルハン塩湖の観光も出来るようになった。

また、ラサから四川省へ抜ける川蔵公路も開放間近かとなり、1986年4～5月に神戸大学と東北大学隊がラサと成都間の2,800㎞を踏査した。

中国国際体育旅遊公司

中国々内の山地旅遊に関しては、1986年1月に設立された中国国際体育旅遊公司（王富洲総経理）の扱いとなる。

これ迄チベット自治区内における登山隊のアレンジは、西蔵登山協会によって行われてきたが、1986年から西蔵国際体育旅遊公司が行うようになった。西蔵国際体育旅遊公司は、現在、西蔵体育運動委員会の敷地内に「ヒマラヤ・ホテル」を建設中で、1987年から登山隊はこのホテルに泊れるようになるとの事。

尚、西蔵登山協会は、西蔵登山隊の派遣、合同登山隊の派遣と云った登山活動の実践だけを担うようになった。

○躍進著しい西蔵登山協会

1986年、西蔵登山協会は4月にニンチンカンサ峰（7,191m）の初登頂に成功し、5月には日山協（主管・長野県山岳協会）との合同技術訓練で章子峰（7,538m）に登頂した。特にニンチンカンサ峰の初登頂は、これ迄に中国隊が単独チームで7,000m峰の初登頂に成功した1977年のトムール峰（7,443m）、1983年のナイプン峰（7,043m）以来の快挙である。

1985年は、西蔵自治区成立20周年の年にあたり、この年西蔵登山協会も創立20周年を迎えた。西蔵登山協会ではこれらを記念して、独力でチョー・オュー（8,201m）に登山隊を派遣し、9名が登頂に成功して実力の片鱗を見せていた。

チベット人の登山は、1960年チョモランマ登山訓練のために実施された1959年のムスターグ・アタ峰登頂から始まり、それ以後中国隊の一員として多くの成果を挙げてきた。然し、これらはあくまでも漢族の指導による登山活動であった。

其の后、1980年に中国の高峰が開放となり、チベットの人達は、チョモランマやシシャパンマなどで高所協力員として活躍した。この頃より西蔵登山協会では、独自のチームによる自国の高峰登山を考えるようになり、訓練に励まれてきた。

その結果、1983年、84年のナムチャバルワ登山における、ナイプン峰初登頂。85年のチョー・オュー登頂及び日中合同隊でのナムナニ峰初登頂などの実績が印された。

1987年はＨＡＪとの合同でラプチェ・カン（7,367m）登山の計画があり、1988年には、日本・中国・ネパール三国によるチョモランマ縦走計画があり、中国側隊の主力となることであろう。西蔵登山協会の活躍は、今後、益々期待されるところである。

（文責　尾形好雄）

西蔵の開放されている主な高峰

（＊印は未踏峰）

	山　　名	高　度	所在県	開　放　年
1.	チョモランマ（Qomolangma）	8,848ｍ	定日県	1980年
2.	シシャパンマ（Xixabangma）	8,012ｍ	聂拉木県	1980年
3.	モラムチン（Molamenqing）	7,703ｍ	〃	1982年
4.	カン・ペン・チン（Gan Ben Chen）	7,281ｍ	〃	1982年
5.	ポーロン・リ（Porong Ri）	7,292ｍ	〃	1982年
6.	チャンツェ（Zhangzi）	7,553ｍ	定日県	1985年
7.	ナムナニ（Naimonanyi）	7,694ｍ	普蘭県	1985年
8.	ニンチン・カンサ（Ningchin Kangsha）	7,191ｍ	浪卡子県	1985年
9.	クーラ・カンリ（Kula Kangri）	7,554ｍ	洛扎県	1986年
10.	カルジャン（Karjiang）	7,216ｍ	〃	1986年
11.	チョー・ウィ（Cho Aui）	7,354ｍ	定日県	1986年
12.	チョー・オュー（Cyo Oyu）	8,201ｍ	〃	1986年
13.	ギャラ・ペリ（Gyala Peri）	7,151ｍ	米林県	1986年
14.	ニエンチェンタングラ（Nyainqentanglha）	7,162ｍ	当雄県	1986年
15.	チョラプサン（Chonab Fen）	6,596ｍ	定日県	1986年 ＊
16.	マカルー（Makalu）	8,463ｍ	定日県	1987年オープン
17.	ローツェ（Lhotse）	8,516ｍ	〃	1987年オープン
18.	ギャチュン・カン（Gyachung Kang）	7,985ｍ	〃	1987年オープン
19.	ラプチェ・カン（Labuche Kang）	7,367ｍ	〃	1987年オープン ＊
20.	メンルンツェ（Menlungtse）	7,181ｍ	〃	1987年オープン ＊
21.	レンポ・カンリ（Loinbo Kangri）	7,095ｍ	仲巴県	1987年オープン ＊
22.	チョブカン（Qungmoganze）	7,048ｍ	尼木県	1987年オープン ＊
23.	チョンラ（Zanla）	6,495ｍ	聂拉木県	1988年オープン ＊
24.	プルウ（Fulu）	6,404ｍ	定日県	1989年オープン ＊
25.	チャンサンラモ（Jiansanglamo）	6,324ｍ	浪卡子県	1990年オープン ＊
26.	ジェトンスウスン（Jietonsusong）	6,244ｍ	〃	1990年オープン ＊
27.	カンガァドゥ（Kanggado）	7,060ｍ	錯那県	1987年オープン ＊

西蔵の主な解禁峰

阿里地区
那曲地区
昌都地区
日喀則地区
拉薩市
マナサロワール湖
ナムナニ (7,766)
ヤル・ツァンポー河
ニェンチェンタングラ (7,162)
チョブカン (7,048)
ラサ
ギャラペリ (7,151)
シシャパンマ (8,012)
ポーロンリ (7,292)
カンペンチン (7,281)
モラムチン (7,703)
チョンラ (6,495)
レンポ・カンリ (7,095)
ジェトンスウスン (6,244)
ニンチンカンサ (7,191)
チャンサンラモ (6,324)
クーラ・カンリ (7,538)
カルジャン (7,216)
ネパール
山南地区
カンガァドゥ (7,060)
チョモランマ (8,848)
ローツェ (8,501)
マカルー (8,463)
チョー・オュー (8,201)
ギャチュンカン (7,985)
チョー・ウイ (7,354)
チャンツェ (7,553)
チョラプサン (6,596)
メンルンツェ (7,181)
ラプチェ・カン (7,367)
プルウ (6,404)
ブータン
インド
ビルマ
ブラマプトラ河

1986年チベット登山隊

チョモランマ（8,848m）

●カナダ隊（18名）

西稜からホーンバイン・クーロワールを辿り、5月22日、ドウェイン・コンドンとシャロン・ウッド（女性、29歳）が登頂。

●アメリカ隊（ジョセフ・E・マーフィ隊長(56)ら11名）

北壁のグレート・クーロワールの1984年オーストラリア・ルートからの登頂を試みたが、雪崩のため最終キャンプが出来ず、7,770ｍで断念。

3月19日にB･C（5,180ｍ）を建設した後、C･1（5,550ｍ）、C･2（5,790ｍ）、C･3（6,100ｍ）、C･4（6,980ｍ）と順次キャンプを延した後、4月29日C･5（7,770ｍ）を建設。然し、その後、C･6の建設が果せず、日数不足で断念。5月25日にB･Cへ全員下る。

（※春には、この2隊の他に10人から成るスペイン隊がチョモランマに入山したが結果は不明。）

●チリ隊（クラウディオ・ルセーロ隊長ら9名）

北東稜のノーマル・ルートに挑んだが、8月16日、ビクトル・ウーゴ・トルヒーヨ（22）が雪崩で死亡した為、断念。

●フランス・スイス隊

エアハルト・ロレタン（26）とジャン・トロワレ（39）のスイス人ペアが、北壁日本ルートから登頂。

8月28日の深夜に北壁に取付いた後、夜間登攀で高度を稼ぎ、29日の日中は休養。そして、翌30日の午前2時に頂上に立った。下降は取付まで3時間30分と史上最も早いタイムで下りきった。

ピエール・アニー（37）とニコール・ニキュは、女性初の無酸素登頂を目指したが、北壁取付の直ぐ上の約6,500ｍで断念。

●アメリカ隊（アンドルー・ハーヴァード隊長（37）ら9名）

8月～10月にかけて北東稜からマロリー、アーヴィンの遺品探索を兼ねて挑んだが、悪天候の為、C･5で断念。10月17日には、ノース・コル下でシェルパ4名が雪崩に遭いダワ・ノルブが死亡。

●イギリス隊（ブラミー・ストークス隊長）

未踏の北々東稜に挑んだが、悪天候の為、10月16日にC･3（8,000ｍ）上部のピナクル群で断念となる。

（※この他、モンスーン期にアメリカ在住のカナダ人ロジー・マーシャル（45）が、単独で北壁のグレート・クーロワールを目指したが、6,500ｍで断念した。）

シシャパンマ（8,013ｍ）

●イタリアの公募隊（アルベルト・レー隊長ら15名）

北面のノーマル・ルートに挑んだが、8月26日にスペインのホルディ・ポンスとホアン・ロカスバラが7,700ｍ迄達して断念。

●フランスの公募隊

北面のノーマル・ルートから9月10日にフランスのエリク・エスコフィエ（26）、ジャック・クサヴィエ・ミュリヨ（30）と日本の尾崎隆（33）が登頂した。

（※この他、スペイン隊が南東壁に挑んだが、詳細は不明）

チャンツェ（7,553ｍ）

長野県山岳協会（主管）と西蔵登山協会による日中合同登山技術研修会（第6回）が、同峰で実施された。

日本側は、堀内利美隊長（50）ら17名、中国側は貢布総隊長ら19名に支援隊員5名、それに中国側報道が3名の総勢44名。

4月23日B･C（5,050ｍ）建設後、30日A･BC（6,050ｍ）、6,200ｍの仮C･1をへて5月8日C･1（6,930ｍ）建設と順次キャンプを進める。10日一次隊として双方8名ずつが頂上に向い、7,100ｍで東稜に出て登頂。日本側は松原繁（44）、宮本義彦（41）、古畠俊彦（38）、島方健次（38）、山田正充（33）、榛葉伸男（25）、山田誠（28）、小林之美（26）。中国側は仁青平措、旺加、次仁多吉、拉巴、大斉米、仁那、小斉米、桂桑（女性隊員）

翌11日にも二次隊が頂上に向い、中国側が8名登頂した。

ニエンチェンタングラ（7,162ｍ）

東北大学隊（葛西森夫総隊長（63）、金森安孝登攀隊長（33）ら12名）

爬努曲（パニュチュー）の源頭となる南氷河から西稜に出て初登頂に成功。

3月25日にB•C（4,800m）建設した後、28日L•C（5.150m）を設営。4月5日にA•BC(5,300m)、8日C•1（5,700m）、20日西稜のコルにC•2（6,270m）、西稜上の6,600mに仮C•3を作り、5月6日「軍艦岩」直下にC•3（6,800m）を建設。7,000m迄のルート工作の後、5月8日、長沼宏（32）、丸山裕介（27）、和田道治（25）の3名が22時12分に初登頂に成功。

ニンチンカンサ（7,191m）

西蔵登山協会隊が独自のチームで初登頂に成功。4月10日にラサを出発した同隊は、5.000mにB•Cを設けて13日から登山活動を開始。18日にC•1（6,100m）を建設。さらに6.700mにC•2を設けた後、27日よりアタックを開始して、28日9時25分初登頂に成功した。

登頂者は桑珠、辺巴、加布、拉旺、丹真多吉、格桑、旺多、旦増、加措、辺巴扎西、次仁、普布の12名。

クーラ・カンリ（7,554m）

神戸大学隊（平井一正総隊長（54）、岡市敏治登山隊長ら総勢25名、学術5名、報道4名を含む）は、北面から西稜を経て初登頂に成功した。

4月15日にB•C（4,450m）、20日にA•BC（5,350m）を建設した後、氷河を遡って西稜に取付き、25日C•1（5,750m）、4月2日C•2（6,200m）、11日C•3（6,700m）とキャンプを建設。20日に7,100mの地点にA•Cを設けて、翌21日、居谷千春(36)、坂本淳（29）、尾崎久純（27）、大谷映芳（39）が登頂。22日には二次隊として森長敬（32）、長谷川浩（27）が登頂。

カルジャン（7,216m）

HAJ隊（新郷信廣隊長（43）ら6名）が北面から西面氷河を経て初登頂に成功した。

9月10日モンダ（4.200m）にB•Cを設営。その後、西面氷河上にA•BC（5,300m）、C•1（5,730m）と建設した後、北西稜の末端壁に取付く。28日北西稜の肩直下にC•2（6,150m）、10月11日仮C•3（6,580m）、13日C•3（7,000m）と建設し、翌14日新郷隊長、友田健治（37）、岩崎洋（26）の3名が18時30分に登頂。

16日には二次隊として宮崎勉（38）、保坂昭憲（38）が登頂。

チョー・ウィ（7,354m）

HAJ隊（八嶋寛隊長（36）ら10名）が、加布拉氷河から北西稜にルートを取り、全員初登頂に成功した。

9月21日、加布拉氷河上にB•C（5,800m）を建設。25日（6,100m）、10月2日北西稜上の6,700mにC•2を建設。さらに大岩近くまでルート工作を終えてから、11日C•2から一次隊が頂上に向った。然し、一日で頂上まで届かず、約7,200m地点でビヴァークとなり、翌日12時59分登頂した。一次隊は遠藤幸寿（33）、志小田美弘（27）、江村克志（29）、松木克雄（30）。14日には二次隊として八嶋隊長、小野寺光義（40）、佐藤修（38）、石川啓二（29）、山田敏雄（27）、大久保主計（27）の6名も登頂し、全員登頂となった。

ラプチェ・カン（7,367m）

HAJと西蔵登山協会の合同隊（HAJ側斎藤安平隊長（33）ら2名、TMA側成天亮隊長(46)ら2名）が、1987年の本隊派遣を前に偵察した。

9月9日、朗果村（4,500m）にB•Cを設けた後、錯朗瑪の氷河湖を経て北面から西稜直下の6,200m地点迄偵察活動をする。

ギャラ・ペリ（7,151m）

HAJ隊（飛田和夫隊長（40）ら6名）は、西壁から南稜に出て初登頂に成功した。

9月16日、ギャラ・ペリ氷河舌端にB•C(3,200m）を建設。25日A•BC（4,200m）、10月3日C•1（5,000m）、11日C•2（5,650m）、19日C•3(6,300m)、21日A•C（6,700m）とキャンプを建設した後、アタック態勢に入る。29日、30日に一次、二次隊がA•Cからアタックするも悪天のため約7,000m地点で敗退。31日に三次隊として一次隊の尾形好雄（38）、橋本康弘（32）、今村裕隆（27）がC•3から頂上に向かい、16時55分に登頂した。

カンガァドゥ（7,060m）

同志社大学山岳会隊は、1987年の本隊派遣を前に偵察を兼ねた踏査隊（宮崎貴文隊長ら4名）を10月から11月にかけて現地に派遣した。

ヤル・ツァンポー西、東

（1984年～1985年の経験から）

山　森　欣　一

はじめに

ＨＡＪのヌン峰遠征から帰国して間もない1975年12月に、私は一つの夢を所属していた山嶺登高会々報に寄稿した。「うつつの夢」と題した内容は、「国際情勢を考えれば、それは全く不可能なことであるが……」とことわりをつけたが、骨子はチベットの山と川を結ぶ計画であった。

ナムナニ（グルラマンダータ）を登り、ヤル・ツァンポーを舟で下り、ナムチャバルワを登り、更にヤル・ツァンポーからブラマプトラと名の変わる川をインド平原を舟で下ってベンガル湾へ至るものであった。

当時としては未踏であったこの２つの7,700 mの巨峰と、謎の河ヤル・ツァンポーを結ぶ、私にとっては心躍るアドヴェンチャーであった。勿論その中にギャラ・ペリがあったことはいうまでもないことである。

1975年といえば、日本が中国と国交を正常化して３年しかたっていず、中国領ヒマラヤで日本人が活動できるはずもなかった。それが冒頭の「国際情勢……」となったのである。

だが、中国では1976年にそれまで指導者として君臨してきた、周恩来、朱徳、毛沢東が相次いで黄泉の人となり、それ以後四人組の逮捕があり、文化大革命10年のもたらした混乱と破壊から立ち直るため、鄧小平を中心として急速に「四つの現代化」が促進されることとなった。その中には「国の対外開放」も含まれており、遂に待望の中国領ヒマラヤのオープンが実現したのである。1979年春のことであった。

ＨＡＪの中国

私はその頃、カンチェンジュンガ大縦走の夢にとりつかれており、中国へ具体的に目を向けることはできなかった。その間、中国ではチョモランマ（1980年）、コングルー（1981年）、チョゴリ（1982年）と大物が登られ、ミニヤ・コンガの日

ヤル・ツァンポー川概念図

本隊２つの遭難などもあり、相変わらずの狂騒曲が鳴り響いていた。カンチェンジュンガが終了後、私はＨＡＪ事務局に専従することとなり、活動の舞台は必然的にＨＡＪとなったのである。

ＨＡＪがようやく中国に目を転じたのは、カンチェンジュンガが一段落した1982年秋であった。中国に対する主眼は定っていた。それは「未踏」への根張り強い挑戦であり、垂直と水平の未踏への挑戦の中心として、ナムチャバルワが据えられたのは当然であった。

ＨＡＪの目指す未踏を充分にかなえてくれる広大なフィールドが中国にはあった。黄河、長江、ヤル・ツァンポーに代表される大河、チャンタンや四川の高原、崑崙や横断山脈、グレート・ヒマラヤの峰々、そしてそれらを結ぶ、川蔵、雲蔵、新蔵、青蔵公路。永遠の聖地カイラス、マナサロワール湖。又、インド、ネパール、ブータンなど隣接する国々のチベット系文化圏。

第一期の計画として、西南中国とインド、ブータン、ネパールを含んだ「中国及び周辺地域総合探査計画」がまとめられ、当面３年間で10のプロジェクトを展開し、合わせて随時、中国隊ナムチャバルワ峰登頂への協力、支援活動を開始することとなった。10のプロジェクト内容と実施状況は以下のとおりである。

ほぼ当初計画どおり遂行できたのは、それぞれ未踏への熱き想いを抱き続けているＨＡＪの面々なればこそと思われる。

尚、このプロジェクトとは別に、1985年には、秘峰クラウン、崑崙慕士山、黄河源流、青蔵公路からネパールに隊を派遣し、1986年には四川省横断山脈岷山山脈の主峰雪宝頂、チベットのチョー・アウイ、カルジャン、ラプチェ・カンに隊を派遣して、大河、砂漠、森林、高原と、中国のフィルドの持つ未踏へ足跡を残せたのであった。そしてこれらは、その都度会報「ヒマラヤ」誌上で報告され、会員の新たな未踏への憧れを醸成しているのである。

ヤル・ツァンポーの西へ

冒頭に述べた私の夢は、現実味を帯びはじめたのである。しかし、ここで大きな暗礁に乗り上げた。それは1983年秋に胡耀邦総書記が来日したことに始まった。ナムナニ（グルラマンダータ）の許可が京都大学、同志社大学の京都勢に中国登山協会が合同で実施することで決定したのである。

これによって西ネパールから河口慧海の道をたどりプラン（タクラコット）からナムナニ、マファモツォ（マナサロワール）、カン・リンポチェ（カイラス）を巡礼しラサに至るルートに開放後外国人として最初に入域したいとの夢は破れたのであった。それにも増して、ネパールと中国の国境通過が可能にならなければこの計画は実現しない。１～２年前から盛んにカトマンズ方面からは、コダリ～ラサの国境通過が許可される噂が飛んでいたが、現状はなかなかむづかしいものであ

プロジェクト名	計画内容	実施内容	期間	隊長
１四川踏査隊（第１次）	中部山岳	スークーニャン	1983. 9～10	角田不二
２雲南遠征隊（第１次）	北部山岳	玉竜雪山	1984. 4	飛田和夫
３ブータン王国遠征隊（第１次）	西部山岳	ジチュ・ダケ	〃 4～5	八木原圀明
４チベット遠征隊（第１次）	西部カイラス	ナムナニ他	〃 6～8	山森欣一
５インダス源流踏査隊（第１次）	インダス源流	マモストン・カンリ	〃 7～9	尾形好雄
６　〃　（第２次）	〃	サセル・カンリ	1985. 8～9	沖允人
７ブータン王国遠征隊（第２次）	北部山岳地帯	ガンケル・プンスム	〃 8～10	大内倫文
８チベット踏査隊（第２次）	大屈曲部	ギャラ・ペリ偵察	〃 9～10	山森欣一
９チベット遠征隊（第３次）	〃	ギャラ・ペリ	1986. 9～11	飛田和夫
10四川遠征隊、雲南踏査隊(共に第2次)	チョラ山北部	成昆鉄道～ゲニ	〃 9～11	山森欣一

※プロジェクト名と計画内容は、当初探査計画のままである。この他、1983年秋には、中国ナムチャバルワ隊々員への岩登り技術訓練へ角田不二、吉田憲司の２名を派遣し、併わせて1984年春のナムチャバルワ登山隊へ登山装備の一部を寄贈した。（ヒマラヤ148号参照）

った。

そこで、一担ネパール側ルートを棚上げし、ラサからヤル・ツァンポー沿いに聖地へ入域し、ナムナニ、カン・リンポチェを偵察し、更にラサへ戻りギャラ・ペリを偵察し、ネパールへ抜ける計画に切り換えたのであった。これには、ヤル・ツァンポーを源流から大屈曲部まで観察する目的も含まれていたのであった。

機は熟していなかった。ギャラ・ペリ偵察は複雑な許可状況下にあり（詳細は別稿）、国境通過も寸前のところでダメであった。（可能になったのは翌1985年春）結局1984年に許可されたのは、ナムナニ峰偵察のためにラサからヤル・ツァンポー沿いに辿るルートと付随したカン・リンポチェ周遊であった。（詳細はヒマラヤ156号参照）

ナムナニの西

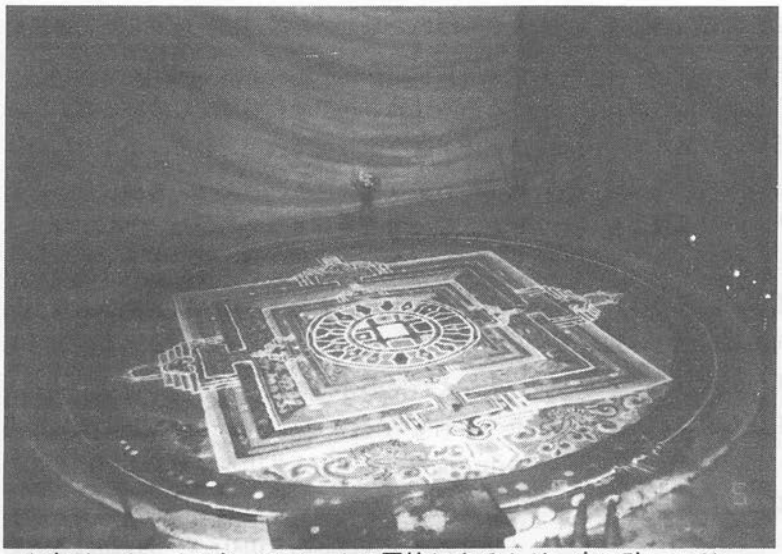
ナムナニの北側は、聖湖マファモツォに続く丘陵である。ナムナニの中腹から見ると右に聖湖、左にラカス湖その間を緩やかな丘陵が続き、遥か彼方に聖山カン・リンポチェの美しい南面の姿を眺めることができる。その聖湖から続く丘陵の一番低い鞍部から続々とヤクと羊の群れが降りてきた。群れの多くは、30〜50頭のヤクと200頭の羊や山羊そして2〜3頭のチベット犬の集団である。

一団また一団と切れ目なく続くその模様は、まるで一幅の絵巻物を見るが如く、私を19世紀初頭まで引き戻してくれた。

群れは、ナムナニの南にあるチベット、ネパール、インドの国境の街である普蘭に向かう。ヤクは既に刈りとった羊の毛を缶詰のパイナップルのように丸くして両側につけている。山羊はコンパクトにまとめ袋に入った塩（約10kg）を背につけている。羊はまだ刈りとっていないもので、これは普蘭でそれぞれ大きなハサミで刈りとられる運命にある。チベット犬は番犬だ。

ナムナニの西面は、このような一団が続々と南下するルートとなっている。ナムナニは東の頂上から西に長大な尾根を派生しており、その尾根の据野は広大な丘陵となっており、チベット高原に住む人とインド、ネパールの人々の交易ルートとなっているのだ。

ナムナニの西面は、また、聖地マファモツオ、カン・リンポチェを巡礼する信者達の行き交うところでもある。ネパール側から来る巡礼達は、山羊に木の枝を積んでくる。馬はジープを見て驚き駆け去って行く。インドのヒンディーは、年間総数198人に限りカン・リンポチェ巡礼を許可される。彼等は普蘭と巡礼のスタート地である大金（ダルチェン）まで専用バスで送迎される。大金には彼等のためのゲストハウスがある。ネパールやチベットの信者達は、思い思いのテントを張り巡礼を続けていた。悠久の大地が汚染されることもなく続けられた、この巡礼の歴史は何時から始ったのであろうか。



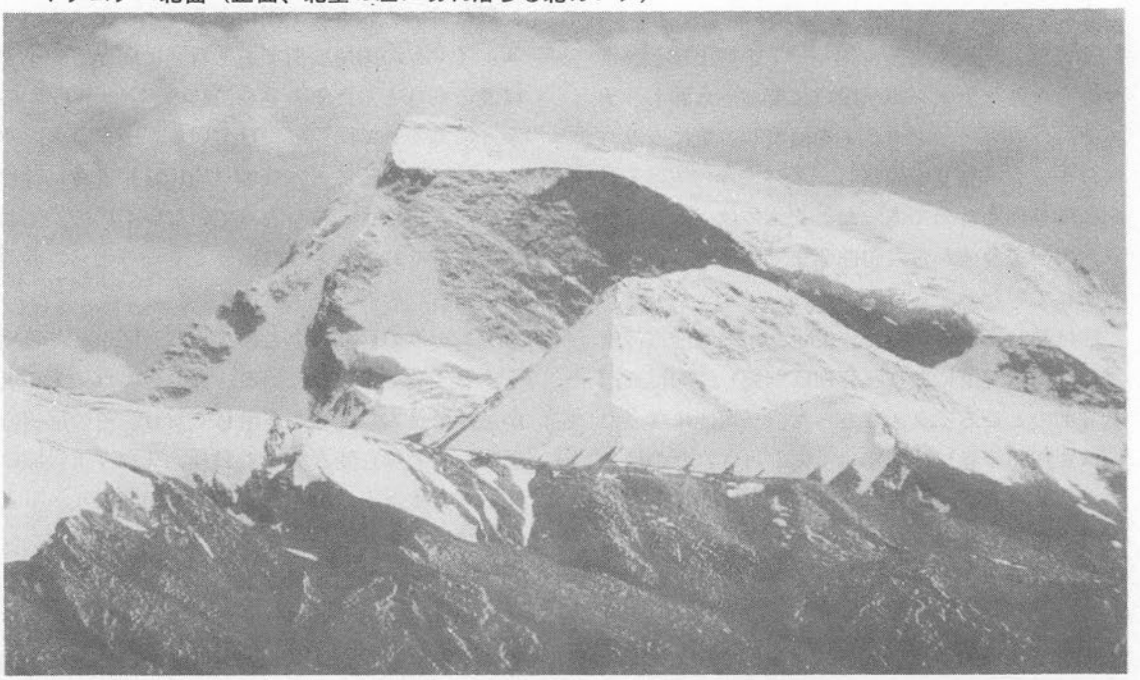
▲ネパール、インド、チベットの国境にあるクジャ寺の砂マンダラ

ナムナニの登路

ナムナニは雄大な山姿の山である。西に長大な稜を派生し、その南側の上部は壁となっている。北西側に大きな氷河が2本あり、北面は巨大な岩壁となっていて北東に急峻な尾根を派生している。

ナムナニは1905年イギリスのロングスタッフによって西稜が6,700mまで登られたが、その上の深いギャップを越えることができなかった。その後は深いベールに包まれたままであったが、1963年に北海道大学隊が当

▼ナムナニ北面（正面、北壁の左に切れ落ちる北カンテ）



時ネパールにあるといわれたナラカンカール峰と誤認し、国境を越えて南東面に到達した。

1985年には、京大・同大と中国登山協会の合同隊によって、北西面のザロンマロバ氷河と西尾根を継ぐルートから初登頂された。

ザロンマロバ氷河の北に広大な氷河が走っており、私達はこの氷河に入り北面から直接頂上に至るルートを偵察した。しかし、西面からこの氷河に直接入ることはできなかった。氷河から流れだす川の下流が大きなゴルジュ帯を形成しているためである。このため一旦ナムナニの北西面を5,300ｍまで巻くようにして登った。驚くことにこの斜面には数十頭の野生のロバが生棲していた。

私達はこの氷河から頂上直下で北東稜に合流している、短かくてこの氷河に顕著に切れ落ちている「北カンテ」を偵察した。純白の氷河が北東稜末端まで続き、右岸側にはナムナニの第二峰とも云うべき古納峰（6,912ｍ）の頂上が手の届く所にある。アプローチの輸送の問題さえ解決できれば絶好の登頂ルートと言える。何よりも激しい風の通り道となる西面や長大な北西面の氷河ルートの殺伐さに比べてここには、山を登る者にとって心躍る岩と雪の雰囲気があった。

何時の日にか再び大志を持ってこの稜に挑む決意を抱いて山を下りたのである。

ヤル・ツァンポーの源流

マファモツォを後にヤル・ツァンポー源流に向かう。良く晴れた青空の下を東に向かう。サモ川が流れる小さな谷は緑一色でその中に古い轍がかすかに残されていた。ところどころカルカの跡を見るがほとんど無人地帯を行く。やがて左右が開らけた高原となりチベット野ロバやチベット羊の群に会う。後を振り返えると遥か彼方に雄大なナムナニが浮んでいた。その左には6,000ｍ級の山が連らなっている。やがて前方から4人連れの巡礼が近づいて来た。この辺は乳色をした岩と黒い岩が散在し、カルカやチョルテンがあった。

とあるせせらぎで遅い昼食をしていると、30頭ほどのヤクを連れた移牧民と会う。かなり広い扇状地に石がゴロゴロとありジープも進むのに苦労した。この場所でもキツネを見た。そしてマファモツォを出発してから3時間ほどで大きな湖である公珠錯に出た。手前には小さな池塘があり小魚が元気に泳ぎ花が咲き乱れている。湖を過ぎるといよいよ待望の「マヨム・ラ」への登りとなる。その手前で南方の呑拉（4,951m）越しに支馬雍丹夫山（6,532m）と思える山を見た。あいにくこの頃より雨雲となり判然とはしない。

マヨム・ラは標高約5,050ｍ。今は訪れる人も

なく峠であることの証左であるタルチョーが淋しくたなびいていた。訪れる人が少ない証は他にもあった。この峠の前後には野ロバが群れていた。

峠を下るとかなりの悪路を経て、ヤル・ツァンポーの北の源流であるマヨム・ツァンポーに出た。

マヨム・ツァンポーの右岸側には、4家族が住んでいた。エーデルワイスの咲き乱れる緑の岸を辿ると、源流に向かうと右岸は4～5段の広い河岸段丘となっている。やがて東側から大きな支流が合流する。合流点は緩やかな扇状となり、ヤクなどの骨が散在していた。源流はなだらかな丘陵が続く北西方向のようだ。標高約4,840 mであった。

マヨム・ツァンポーを下れば、そこはヤル・ツァンポーの本流であり、流れを見たかったが時間がなく断念した。いづれにしてもヤル・ツァンポーを源流から下降するためには、南側の源流をも偵察しなければならない。ナムナニを登った後で果して呑拉を越えて南側の源流に入ることができるだろうか。北側の源流は、水量は充分にあるものの浅瀬が多くゴムボートでも難しいようにも感じた。

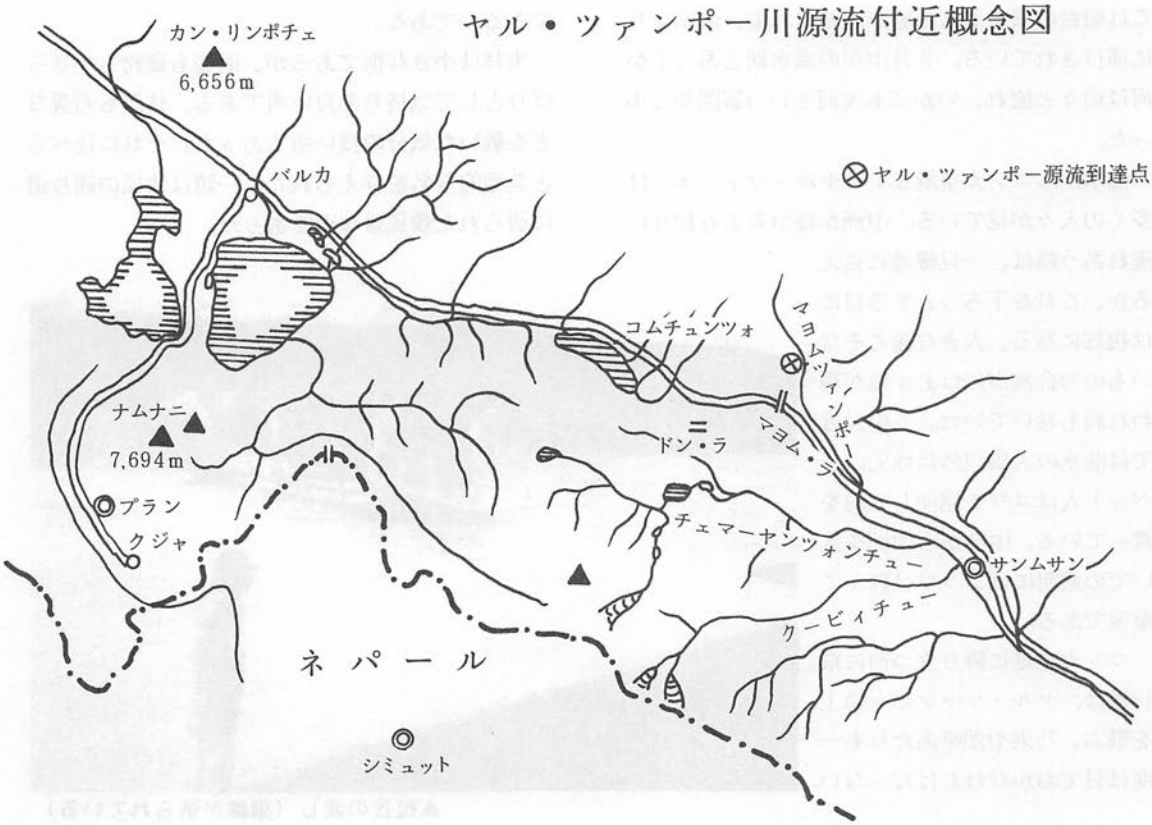
▼静まりかえるマヨム・ラ

尚、現在中国では、ヤル・ツァンポー川の源流はマヨム・ラの南にある、チェマヤンツォン・チューであるとしており、その南にありかつてヘディンが源流としたクービィ・チューを否定している。

ヤル・ツァンポーの中流

チベット最大の河であるヤル・ツァンポーを渡るには、橋と動力による船、コワやイカダなど幾つかの方法がある。中流部に位置する曲水から上流部には、大竹と拉孜の二ケ所に動力による船が

ヤル・ツァンポー川源流付近概念図



▼マヨム・ラ下のチベット野ロバ

運行されている。

拉孜の渡しは、太い一本の鋼線が両岸を継いでおり、船は両岸の動力によって引き上げられるようにして運行していた。多分この渡しは開放後外国人としては、私達が1984年７月に渡ったのが初めてであったと思われる。この付近は川幅が極端に狭く、曲水あたりの広さを見ている目には、増水期にはどうなるのだろうか？と思った。しかし、７月～８月と云えば充分に増水期であり、これが満水の状態ならば充分に下降の可能性があると思えた。

大竹の渡しは、川幅も広く流れも早かった。ここは船台の横に通常の船が連結されて、両岸交互に運行されている。８月中旬の満水期とあってか河は滔々と流れ、いかにも大河という雰囲気であった。

曲水からコンガ空港までのヤル・ツァンポーは多くの人々が見ている。中洲が幾つもあり相互に流れあう様は、一見優雅に見えるが、これを下ろうとする目には複雑に写る。大きな滝こそないものの合流点には必ず滝が現われ渦も巻いていた。この付近では曲水の大橋以外は地元のチベット人はコワを駆使して河を渡っている。中洲から中洲を継いでの渡河には、コワは軽くて重宝である。

コンガ空港に降り立つ前に飛行機は、ヤル・ツァンポーの上を飛ぶ。乃東や朗県あたりも一度は見ておかなければならない。特に加査から米林の間には、最近になって人工衛生から発見されたといわれる「滝」の存在も噂されており、これが真実ならば川下りにとっては、黄河の壺口瀑布や長江の虎跳峡に匹敵する困難な障害となるだろう。

東のヤル・ツァンポー

大河ヤル・ツァンポーは、ナムナニの西から発して1,500㎞東流し、朗県から除々に北東に進み、ナムチャバルワの東で南へ向きを変えて、アッサム平原に入り西へ流れ行く。その北東から南へ流れを変える付近を「大屈曲部」グレート・ベントと称する。

グレート・ベントの入口となる場所が米林である。林芝からニイヤン・チューに沿って小一時間も下るとヤル・ツァンポーに合流する。この付近はリンゴの産地でもある。ヤル・ツァンポーは川幅も広くゆったりと流れている。上流側には、現在地元民でも通行許可証無しには、通れない立派な大橋がかかっている。米林の南に大きな谷が入っており、約150㎞も下れば、アッサムである。この大橋の重要性はその造りからも察することができるのである。

米林は小さな街であるが、街並も建物も小ざっぱりとして気持ちの良い所である。林芝も石畳などを敷いた気分の良い所であった。それに比べると典型的な名を与えられた八一鎮は強風の通り道に造られた殺風景な街であった。

▲拉孜の渡し（鋼線が張られている）

米林はヤル・ツァンポーの右岸側にある。これより下流にあるグレード・ベントの喉とも云える「派区」には、右岸通しに道が作られている。しかし、アッサムとの狭間にある山々から幾つもの水流が、ヤル・ツァンポーに流れ込み、道はいたる所で氾濫しており、トラックといえどもその渡渉は容易でない。減水期でこの有様では、7～8月の満水期は相当の水量となるだろう。

派区までのヤル・ツァンポーは、徐々に川幅を狭めて行くが、不思議な事に両岸のところどころに白い砂が小山を造っている。南の広けた谷からの風のためであろうか。

以前、建国の意気に燃えていた頃は、ヤル・ツァンポー河左岸にも自動車道路が走り、派区からトラックなども積める動力の渡船があった。現在は往き交う人も地元民だけのためか、左岸の道と動力船は使われていない。痕跡が残るだけである。

派区は、大屈曲部への旅装を整える所である。招待所の屋根越しには、夕陽に映えるナムチャバルワの圧倒的にそそり立つピラミダルな三角錘の頂上と、人を寄せつけない絶望的な西壁が手の届くほど近くに見える。こんな素晴らしい景色が見える所も少い。

派は、これから奥のギャラや中心地米林への隊商が一休みする中継地でもある。この付近の馬は小柄のものが多い。派の標高は約2,960 mであり、この付近にはヤクはいない。馬が輸送手段の主なものである。しかし、それもギャラやチュベまでである。派区の人口は2,753人と話してくれた。

グレード・ベントへ

派からヤル・ツァンポー左岸へ、双胴の丸木舟

▲ラサ市内でコワを担ぐ

▼大竹の渡し（船が横から曳く）

で渡る。馬鹿でかいオールで漕手が3人河の中ほどから懸命に漕ぐ。水は容赦なく荷物や乗客に降りかかる。丸木舟の中にも水が溜り、全ての人と荷が水を浴るころ対岸に着く。この間約5～7分。ここですかさず漕手に煙草を差し出すのがコツのようだ。そうすれば、往復がスムーズになる。

左岸はティンベという。ティンは数字の3という意味でありネパール語と同じである。人口120人、小学校生徒26人（内女7人）先生2人。9月の中旬はまだ雨の日が多い。左岸沿いの高台につけられた幅の広い道を進む。少し登り気味にゆっくり歩いて1時間半でスースンに着く。ここから同じような道をカンブー（自生している小さな桃）がたわわに実るのを見ながら進むと、対岸にキイカルが見える。スースンから2時間で標高3,170 mのターリンに着く。草原もなく畑の土を掘り起したばかりの所にキャンプ。

「チャバダンゲドウ（雨がきた）」雨季のキャラバンは、この言葉の連続である。ターリンから狭くなった山道を一気に下り2時間で、左岸の最奥の部落チュベに着く。部落といっても一軒の家があるだけである。ヤル・ツァンポーに迫りくる山稜が少しばかり切れて小さな草原となっている。その切れた所は、一の倉沢衝立岩の何倍もの岩壁となっており、その下から草原まで広葉樹や針葉樹が生い繁り、この一軒の農家の格好の狩猟場となっているようだ。

チュベから先は馬も使えなくなる。1時間ほどは、小さな草原と灌木帯が続く。この付近から左岸に迫ってくる尾根を幾つも廻り込むようにして行く。河に降り立つ以外は、標高3,000 m付近を歩くことになる。

チュベの草原を過ぎると踏み跡程度しかなくなり、平地はある程度痕跡を辿ることができるが、一担山道に入るとほとんど下草や灌木が生い繁り道はわからなくなる。ティンベからギャラ・ペリ付近にクマ撃ちに行ったことがあるという猟師を一人案内人に雇ってきたが、やはりカンがあるとみえて考え考え迷いながらも道を拓いて行く。彼等は人間一人が通れる道しか作らない。後から続くポーターも背負っている荷物の事はあまり考えない。枝に引っかかろうがぶつかろうが強引に突破しようとする。荷主の私達はなるべく猟師の後について荷物の幅ほどまで枝や下草を払いながら進む。ポーターはその間「小止」の連続である。

深い森の中で昔さながらの小屋掛けをするポーター達と、私達の夏用テントが木立を通す仄な光に浮び上がる。まさしく探検時代を彷彿させる光景である。幸運にも落ちんとする光の中にギャラ・ペリの南西面がくっきりと浮び上がった。ポーター達も久し振りの晴れ間と、神秘なまでのギャラ・ペリの雄姿に歓声を上げる。写真を撮ろうとするが、前方の大きな樹が邪魔である。ポーターは50㎝ほどの長さの山刀でこの樹を倒してくれた。

ヤル・ツァンポーの河岸まで降りるようになる頃には、対岸に緑の美しいギャラ村が見えてくる。一本の小さいが水量が多く急峻な川の前後に、マニ塚が積まれている。タルチョーがはためきマニ石も苔むして何か寂し気である。チュベ寄りの大きなマニ塚からヤル・ツァンポー河へ少し下ると、滝となっており、ごうごうと周りを圧倒しながら水が落ちている。ちょうどマニ塚とヤル・ツァンポー河との中間位いの位置に、一部分だけ岬のように突き出た場所があり、ここがこの地方では神聖な場所とされるアシャン・チュ・ゼェの神像が安置されている所である。滝の右岸側に祭壇があったが滝身までは見えなかった。チベットのポーター達はここでお祈りを繰り返した。

下流寄りのマニ塚は小さいが、ここから5分ほど登ると小さな無人の寺がある。かっては、ギャラ村を中心にペマコチュンなど、この辺一帯が栄えていた頃は、多勢の信者が列を為したに違いない。今は訪れる人もなく石段には野生の牛の糞だけが点々と続いていた。

▼ペの渡し舟

ギャラ・ペリの対岸から、相変わらず尾根を廻わり込むように山道を行く。竹林も多くなる。そろそろ道も雑木の中に入り始め伐採しながら進み登りが続くと、ギャラ・ペリとセンダンプーから流れ出すギャラ・ペリ川がヤル・ツァンポーに注ぎ込む地点を見下ろす場所に出る。

この高台からヤル・ツァンポーの下流を見下ろすと、ギャラ・ペリ南稜や、ナムチャバルワ北西稜から派生する尾根を縫うように流れ落ちていた。

幻の虹の滝はどこにあるのだろうか。ロッパが住むという部落は、あの南稜の遥か彼方であろうか。大屈曲部最深部は、まだまだ遥かに遠い。

ギャラ村付近

ヤル・ツァンポー河大屈曲部へ至る右岸側の最奥の部落は、ギャラ村である。この村の住人については別稿を参照されたい。

ギャラ村からギャラ・ペリの南西面が良く見える。双耳峰の山姿はこの村の人々の生活に何かにつけかかわって来たのだろう。久し振りの外国人（多分1947年のルードロウら一行以来約40年振り）に違いない。一日中私達の周わりから離れず、老若男女を問わず近づいてくる。

ギャラ村の猟師は、センダンの広場や、ギャラ・ペリの西面、南面まで熊や野生の牛などを穫りに行く。その往復に使うのが太い木を削って三本を二等辺三角形状に継ぎ、その上に竹や板を渡した簡単なイカダである。竹を渡した小さなイカダは漕手も含めて大人3人と荷物50㎏ほどが限度である。村の少し下流が渡し場になっており、ペで見たと同じような双胴の丸木舟を造ろうとした残骸が捨てられていた。

▼ギャラ村のイカダ

ギャラ村は、川に面した場所が畑になっており、一段上った所が部落になっている。村の中心には脱穀場と保管場を兼ねた建物があり、周わりにそれぞれの家が建っている。尾根は板葺きである。村の周辺には、この辺特有の大きな胡桃の木があり、村全体を守っているかの如き風情である。更に上部にも少し畑があり、村の東側に馬や羊を放牧している広場があった。

9月の末頃から紅葉が始った。色とりどりの樹々がヤル・ツァンポーを染めている。その中にひときわ白いギャラ・ペリの山姿が浮び上がる。ギャラから上流は、白樺の木立が続き、ところどころアッサムとの境界の山々から流れ込む川を渡らなければならない。途中一ケ所だけ、岩壁を削ってつけた道がある。ここは、馬の荷を降ろし人手によって運ばなければならない。狭い急な坂道を馬は上手に歩いて行く。

ギャラ村から上流に8時間ほど歩くと、ジュベの部落になる。ここまで人家は一つもない。途中から左手に圧倒的なナムチャバルワが見えはじめる。10月に入ったというのに高い山には、まだまだ雲がまとわりつく。更に1時間ほどでキィカルに着く。キィカルの部落は戸数も多い。ここから山を巻くように自動車道路が造られている。その一番高い所から見ると、左下にキィカルの部落の尾根と田畑が、そして正面にはナムチャバルワの三角錘を眺むことができる。

山を降りるとキィカルから3時間でニディンの村に着く。刈り入れが終わり脱穀に忙がしい村人達も、先日私達が塩やチベット自治区成立20周年記念として、中央政府から一軒に一個プレゼントされた「花茶」を運んできた事を覚えていて愛想が良い。

ニディンから2時間で、ヤル・ツァンポー河を見下ろす場所に伝説の人「ミラ・レパ」の手形を祭った場所に出る。チベットには、ミラレパ伝説が多い。カン・リンポチェ巡礼コースにもミラレパが足を当てたと伝えられる石が残っていた。

ここから30分ほどで、大きな工場があるチョトンに出る。チョトンから1時間でペに到着する。

おわりに

カイラス山（カン・リンポチェ）マナサロワール湖（マファモツォ）グルラ・マンダータ峰（ナムナニ）などが聳えるチベット西部の高原から流れ出ているものと思われたヤル・ツァンポー河も、実際は南側の源流はネパールとの国境近くの支烏雍丹夫山（6,532m）付近を源流として、チェマーヤンツォン川となり桑木桑でクーピイ・チューと合流する。又、北の源流はマヨム・ツァンポーであり、マヨム・ラからも源流の一滴が流れ出す。マヨム・ラの一滴が流れだす湿原では、ジープがぬかるみに嵌まり脱出するのに往生した。

源流ばかりでなく、途中でチャンタン高原、グレートヒマラヤからの支流を合わせて、ヤル・ツアンポーは東流する。コンガ空港近くでは相当に広い川幅であるが、派近くからは川幅もぐっと狭まり、ブラマプトラと名を変えるアッサムに入るまでは、高峰の間を激流となって流れ落ちて行く。

ナムナニは初登頂され、ナムチャバルワは熾烈な情熱の末ＨＡＪに最初の機会が与えられた。ヤル・ツァンポー河下りには、100万ドルという巨額なロイヤリティが取り沙汰されている。

10数年前の私の夢は、現実味を帯びて私の眼の前にある。この残された最大のアドヴェンチャーとなるだろう計画には、巨額な費用を必要とし、それ故に本当の夢、幻となる恐れがある。

大屈曲部は今もひっそりと息づいている。計画を促進させるための膨大なエネルギーを上まわる、未知への憧景なくしてこの夢を遂行することはできないだろう。

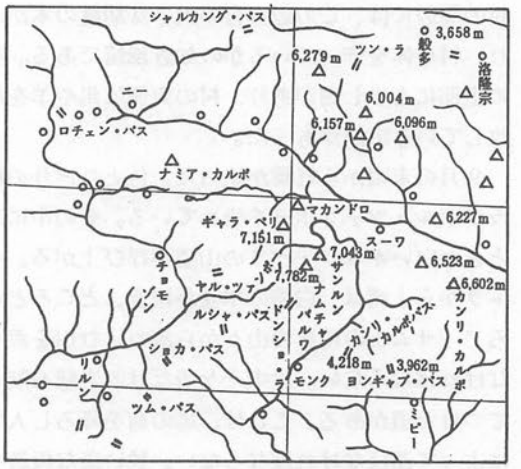
ヤル・ツァンポー河大湾曲部探査

中国科学院青藏高原総合科学調査隊
楊　逸疇

≪解説≫

1974～75年にかけて、中国科学院は青藏高原総合科学調査隊を組織し、自然科学の多方面にわたる調査を行ってきた。その調査範囲の中にヤルツァンポー河大湾曲部一帯の実地調査が含まれていたことは、F.M. Baileyの"No Passport to Tibet"（邦題：「ヒマラヤの謎の河」、あかね書房、1968）をはじめとする何十年も前の文献でしかこの地を知ることができなかった我々にとってひとつの注目すべき出来事であった。

中国科学院は1966～68年にかけて、珠穆朗瑪地区（エベレスト北面域）に同様な調査隊を派遣したが、その調査報告書はすでに何巻にもわたり現在まで公刊されてきている。そのような形での正式の調査報告書は、74～75年のヤルツァンポー河大湾曲部域調査については未だ公刊はされていないようである。しかしながら、その調査隊に参加した隊員の手による紀行、手記、写真などは、中間報告あるいはメモの形で「人民中国」、「中国画報」、「地理知識」等の雑誌に断片的に発表されてきていた。特に、グラフ雑誌である「中国画報」に掲載された写真には貴重なものが多かった。エベレスト地区の科学調査報告書は極めて学術的専門的なものであり直接的には我々の関心外にあった。おそらく、ヤルツァンポー河の正式報告書もそのような体裁をとるものと思われる。したがってここでは、大湾曲部の現在の様子と、調査の雰囲気を伝えるものとして、その調査隊に参加した隊員の手記を訳出してみることにしたい。この調査隊の持つ様々な意味と働きは別としても、興味深い記事である。



出典原題は下記の通りである。

楊逸疇、"雅魯藏布江大拐湾 — 考察隊員散記"「地理知識」、1975年、第6期、12－14頁。

なお、翻訳は丘睦美が担当した。

この調査に関する雑誌記事については、すでに「ヒマラヤ研究XI — インド・ヒマラヤのすべて」にまとめられているが、同書の発行後に次のものが発表されたので追加のうえあわせて参照していただきたい。

- "雅魯藏布江源区考察漫記"、「地理知識」、1976年、第6期。
- "ヤルツァンポー源流"、「人民中国」、1977年8月号。

1974年、我々中国科学院青蔵高原総合科学調査隊はヤルツァンポー河大湾曲部峡谷にふみ入り、峡谷地区の地質、地形、水利、地理、生物、林業などについて多分野にわたる調査を行ない豊富な成果をおさめることができた。

峡谷への入口

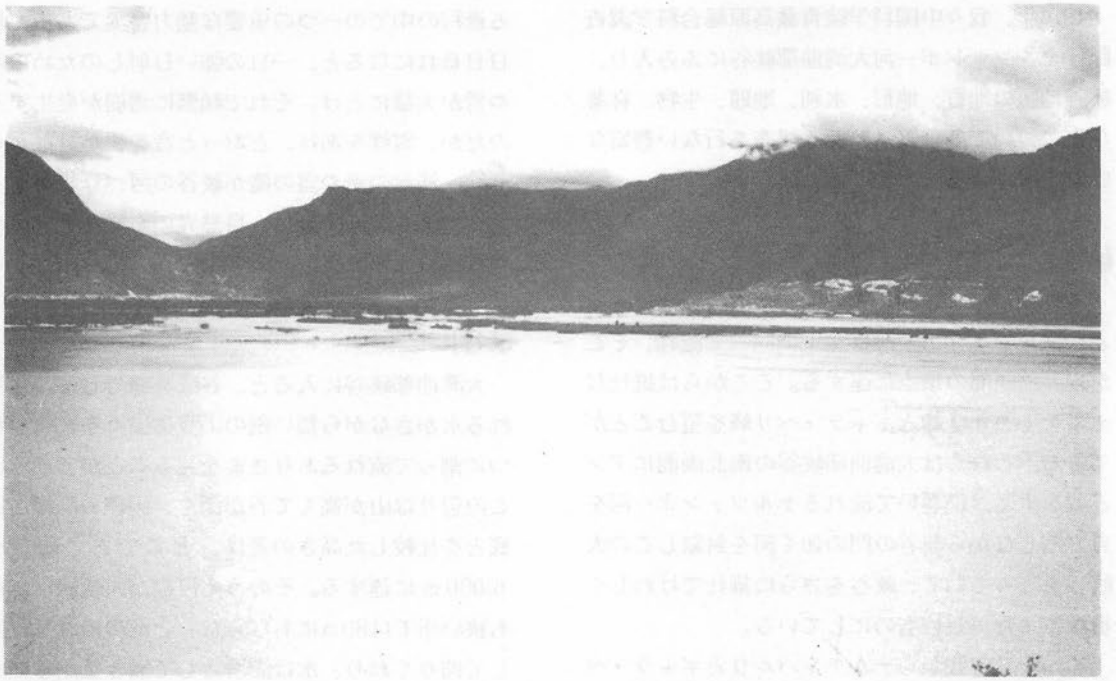
米林県の八一鎮から東に向って大湾曲部に入ると、ヤルツァンポー河は北東に向って流れ、そこから大湾曲部の頂点に達する。ここからは雄壮なナムチャバルワ峰とギャラ・ペリ峰を望むことができる。これらは大湾曲部峡谷の南北両面にデンと腰をすえ、逆巻いて流れるヤルツァンポー河を見おろしながら峡谷の門の如く河を封鎖しこの大峡谷を守っていて、峡谷をさらに雄壮でけわしく奥深くまた美しいものにしている。

ふつうは谷底からナムチャバルワとギャラ・ペリを見ようとしても、大体終日雲にさえぎられ霧がたちこめて、その“真実の姿”をなかなか現わさない。しかし、我々はやっとのことで良い日に恵まれ、八一鎮付近の山の斜面上でナムチャバルワが現われるのを見ることができた。この日空はどこまでも晴れわたって、ナムチャバルワの尾根のまわりには雲があわただしく涌いては消えるので、我々は雲や霧が吹き飛ばされているほんの短い間をのがさずにカメラや8ミリを一勢に動かして珍重すべきスナップを撮影した。日暮れに太陽がほどなく沈むころ夕がすみが空いっぱいに立ちこめて、そびえ立つナムチャバルワもギャラ・ペリもすべてをすっかり現わすと、金色の夕日がちょうど斜めからこの2つのピラミッド型の雪をかぶった峰を照らして、まっ白な峰は金の残照を身にまとい、赤い夕がすみにそれが映えて得もいわれぬ美しいながめを見せてくれた。ナムチャバルワとギャラ・ペリの上からは、何本もの氷河が伸びており、その空色に透きとおった氷の舌は、蒼くうっそうとした樹海をぬけて、海抜3,100ｍ前後のヤルツァンポー河畔に直接つながっている場所もある。雪線より上の雪をかぶった頂には、幾すじもの氷や雪が崩れて滑り落ちてゆく溝が散在しているため、山の嶺は特別高くけわしいものに見える。雪崩はここの氷雪地形が出来上がってくる過程の中での一つの重要な動力要素である。毎日日暮れになると、一日の強い日射しのために氷や雪が大量にとけ、それで頻繁に雪崩が発生するのだが、雪煙をあげ、どおっと音を響かせながら、一筋一筋氷の滝や雪の滝が峡谷の河べりまでまっすぐに落ちてゆくのは、自然界の奇観とも言うべきながめである。

峡谷にて

大湾曲部峡谷に入ると、谷底を怒号しながら流れる水がさながら鋭い剣のように山々をまっぷたつに割って流れるありさまを見ることができる。この辺りは山が高くて谷が深く、両側の高峰と谷底とを比較した高さの差は、どこでも大体5～6,000ｍに達する。そのうえ河幅が大変狭く、最も狭い所では80ｍにもならない。河の流れは迂回して曲りくねり、水は澎湃として涌き上がる如く、谷底にはかくれ岩が一面に散在し、牙のような石が乱立して、地勢はきまめて要害である。

大湾曲部峡谷で、我々は暗く湿った松や杉などの針葉樹林や隙間なく繁った高山林を通りぬけた。流れの速く浪の高い、冷たい支流の水も渡った。危険な浅瀬や細道、丸木橋を歩き、その上ぬかるみのひどい草地や泥沼にもふみ入った。思わず背筋の冷たくなるワイヤーロープにも何度もよじ登るはめになったし、独特な型の藤製のつり橋を渡る時には、激しい揺れを踏みしめねばならなかった。両岸の山にある森林は海の如く蒼々としてうっそうとして繁り、その間を縫って様々な野獣が出没するのである。峡谷の中で河の水は涌きかえるようにはね、しぶきが飛び散る。我々は自分の身がその場にのぞんだ時、心の中がファイトと大きな希望で満ちていた。調査隊員達は一人一人全身に闘志をみなぎらせ、山が高く路がけわしくとも怖れず、蛇も猛獣をも怖れず、危険で困難であればあるほどさらに前進した。ここで、水利調査員はトランシットをすえつけ、河面に赤いブイをいくつか投げ入れて、河谷の断面と河の流れの速度を実測した。ここは河底の降下がたいへん大きく、中でもチュアイからシーアまでの河段は、距離は7.8㎞にすぎないのに水面は350ｍも下降しており、ある河段での流速は秒速16ｍ以上もあっ



た。これらの事実は、峡谷は充分に豊富な水力資源を埋蔵していることを証明している。大まかに計算してみると、大湾曲部峡谷の水力資源はヤルツァンポー河の水力資源全体の2/3以上を占めそうで、これだけの発電可能水力の単位面積あたりの埋蔵量は、世界の同クラスの大河の中でもあまり見あたらないものである。地質調査員はいくつもの価値ある岩石標本を採集し、大湾曲部峡谷地区で主に外に現われているのは石英雲母片岩、花崗へんま岩、眼球状へんま岩などの中深度変質岩系であることを発見した。河に沿ったこれらの岩石地層は、強くおしつけられて異なった方向に構造が破壊されたが、これが河流の曲る主な方向を決定づけているのである。これらの岩石や構造の特徴は、ヒマラヤの地質を研究する上に多くの新しい資料を提供した。ここは山地なので垂直に地帯を区切ってみると、異なった高度においてそれぞれの地形、気候、植物、森林、土壌などがみな特有の点をもっていることがかなりはっきりと現われる。山の頂上から河べりまで下ってくると、春夏秋冬の四季の変化をめぐることができる。山頂では一面に極寒の北国の風景が広がっているとき、山のふもとではうす緑色の春景色や秋景色でさらに河べりの谷底では汗だくの真夏である。我我は9月下旬に峡谷の墨脱にやってきたのであるが、昼間よく激しい雨に出会った。するとその後はまた燃えさかるように暑く太陽が照りつけ、背は汗でぐっしょりとしみ通るようであった。晩になるとまたいつもぽたぽたと雨が降った。この降水が豊富で規則的であるというのは、熱帯モンスーン気候の雨の一つの特徴である。毎日早朝には ― 峡谷の中を朝霧が幾重にも重なり合っておおいつくし、重厚な雲海がふさぎつめ、近い山は黒黒とかげり、遠い山は薄墨でアウトラインを浮き彫りにした如くにぼんやりとかすんで見える ― そんな景色を見ることができる。陽光がかすかにさす頃には、雲や霧が下から上へ上から下へとただよい浮かんで揺れ動き、幾筋もの細い帯状の霧が山をとりまくようにただようのが見られる。真昼になると陽光は雲の層をつき抜けて射し、峡谷の気温は急激に上る。その時雲海はまた、上から下へ下から上へとただよいながら逆流しつつ、谷底から上へ向って飛び散る。これはまさにあっという一瞬の間の気象の変化であり、南からやってくる季節風の影響は、ここで大きく反映することになる。このあたりはチベット高原のへりにあたり、独特な、そして最も豊富で多彩な自然区なのである。高山の頂をおおっている氷雪は何本もの

氷河となって伸びており、湿った気流の影響を受けることによって河の水をさらに非常に豊富にしている。その上に地形が高くけわしいため氷や雪の雪崩が頻繁におこり、その中には大量の石のかたまりが混りこんで、常に谷みぞには泥や石のまじった氷河の流れができ、時にはヤルツァンポー河の谷をふさぐまでになることすらある。ここの氷雪地形は、中国にはめずらしいモンスーン型海洋性氷河の特徴をはっきり示しているばかりでなく氷河の豊富さと山の嶺のけわしさによって、その上高速度に運行する特殊性をもそなえているのである（毎年数百メートルほども移動する）。高山の氷雪地帯より下は、高山草原地帯や亜高山灌木地帯、山地の暗い針葉樹林帯、温暖で湿った混合樹林帯、広葉樹林帯などであり、谷底は亜熱帯常緑広葉樹林帯や熱帯モンスーン雨林帯である。地帯の配列はまったく整っており、順序もはっきりしていて、充分豊富な林産資源と多くの種類のめずらしい植物を内に秘めている。山林の中にはまた多くの動物や昆虫がいる。高地の寒冷な気候にも適応するヤク、温暖湿潤気候に向くあか牛や犏牛（ヤクとあか牛との雑種）、熱帯気候に適する駝峰牛（背にコブのある牛）などを高い場所から低い場所へ行くにしたがい見ることができる。また我々は自ら、黒熊やサイ、野性の羊、さるなどを捕え、河にいる色々な魚（うろこのあるもの、ないもの）をあみでつかまえた。青竹蛇、銀環蛇などの毒蛇にも出会った。バッタに咬まれたり蚊にさされたりという惨めさも味わったし、群れをなしたみつばちの襲撃を受けたこともある。林の中には、天麻、竹節三七、七葉一枝花、草烏、蓽茇、続断、八角蓮、党参、当帰、黄芪などの漢方薬草が生えている。黒きくらげや白きくらげ、様様なモーク（きのこの一種、しいたけ状で白い）ひじりだけ（まんねんだけ）などの菌類もあり、ここは実に中国の動植物界の豊かな宝庫である。

峡谷はいかに出来たか

大湾曲部峡谷の成立原因については、これまで多くの人が関心をよせ、推測を行なってきた。大湾曲部峡谷は河の流れが侵蝕したために出来たのだと考える人が少なくないし、高原の隆起にしたがってつくられた先成河谷だと考える人もいるが、彼らはみなこの地区にきたことがないため実際の資料にとぼしく、論証するための根拠がなかったのである。今度の大湾曲部区の実地調査を通じて我々は、大湾曲部峡谷全体は区域構造線の方向に順応して、東西から南北へ向きをかえ大断裂帯内に成長した先成河谷であるということをつきとめた（いわゆる先成河谷というのは簡単に言えば、先に河谷があり、その後で構造ができあがったものである。山地が隆起する時、河の流れはその前からの方向に沿って深くくぼんだ所を通るままである）。それを明らかにする証拠として次のようなことが挙げられる；峡谷には、河面から500～600ｍ位の高さまで現われている高台（台地や山の端、山の脊も含む）が広く分布しており、特にいくつかの大きな支流の分かれ目の所で水を分けている山の背は顕著である。これらの高台が明らかに我々に語るのは、以前ヤルツァンポー河の区域構造運動がわりに平穏だった時期にここに古い河谷が形成され、この古い河谷は現在のものよりもたいへん広く、だからこれらの高台は実は残った古い方の広い谷面に当たるのだということである。これらの高台の上には後から黄土物質が堆積した。この高台より下の、目前の河の流れは、完全にまぎれもない嵌入曲流形式の様相を呈していて、それは河の流れが山の急な上昇にしたがい、断裂に沿って強烈に下へ切りこんだ結果である。第四紀地層の岩の性質から対比してみると、この類の黄土状堆積の高台の時代は、第四紀更新世中期と一致する。もっと時を下ってできた河谷の中にも、河面から130～150ｍの高さまで現われている段丘が広く分布している。この段丘より下は河谷はさらに深くなり、けわしい谷がいくつもでき、支流や谷、滝も比較的多い。これは次のことを表わしているのである。すなわち；中更新世の後、こゝの区域構造は激しく上昇したが、上昇の途中にまた一度、その前後にくらべてわりに平穏な時期があらわれ、河流は高さが河面から130～150ｍの段丘地を形成した。この後ここには、更に激しい新たな構造運動が発生し、河流は更に速く流れを切りこませ、それによって一系列の谷や滝ができあがったのである。つまり、ヤルツァン

ポー河は構造に適応した先成河谷であり、はじめのヤルツァンポー河の河筋は、高原の地形全体の傾斜にしたがって区域構造の方向に適応し、中・上段の河岸は東西の向きに多くの湖やくぼ地と地脈を通じあっており、下段は構造線にしたがって折れ曲り、断裂帯の中を伸びている。それが大きく曲っているのは何も河流の侵蝕の結果ではなく、第四紀更新世中期の区域構造運動による激しい上昇の前にもうすでに存在していた古い川筋であり、今の大湾曲部咬谷は地殻によって上昇し、河の水が段層に沿って激しく切りこんでできあがったものなのである。だから先成谷と言えるわけだ。

大きく変わる峡谷

長いこと、大湾曲部はそのきわだった変化や深い峡谷、豊富な自然資源によってその名を知られており、多くの内外知識人をひきつけ、特に自然科学研究者に重視されてきた。しかし、解放前の暗い反動政治、それに加えて峡谷自身のけわしい地理形勢のせいで、めったに人の踏み入らない所となっていた。このため、大湾曲部の自然の様相は終始“謎”であり、多くの人に“神秘”の峡谷と見られてきた。しかし、我々はこの2年の実地調査と、当地の少数民族の貧下中農民への何度もの訪問とを通じて、大量の重要な資料を手に入れたばかりでなく、大湾曲部峡谷の地形に大きな変化が起きていることを発見した。例えば、大湾曲部峡谷にはかつて2つの大きな滝があり、いつも虹がかかっていると言われていたが、現在この現象はもうなくなってしまった。その原因を考えてみると、それは峡谷が新しい地質構造運動による変化を受けたからなのである。中でもとりわけ、1950年8月15日、峡谷地区を突然、震度8.5の強烈な地震がおそいヤルツァンポー河の下の方の河段はひどく破壊され、山は崩れ、地はさけて、峡谷の形態はがらりと変わり、河底の滝は消えうせ、支流は巨大な山くずれの泥や石の流れや、それらのまじった氷河の流れとなり、一度はヤルツァンポー河の河筋をふさいでしまって、河底の全体的な侵蝕堆積の過程に深刻な変化がおきた　山の嶺の氷や雪のなだれが大量に発生し、くずれ落ちた氷や雪が突き進んでまっすぐにずっと峡谷の河畔まで達した。明らかにこのように巨大な構造運動は峡谷に深刻な変化をもたらしたが、この種の自然現象はヤルツァンポー河の成長の歴史の中では、よく発生したものである。

それから、峡谷では、天地をくつがえす変化がおきたと言えばやはり社会制度が変わったことであり、工業・農業の生産にもたらされた巨大な変化である。墨脱県を例にすれば、民主改革前にはここは焼き畑農業を行なっていて、生産性はきわめて立ち遅れていた。その時は、交通はまったく閉され、さかまくヤルツァンポー河と何本もの流れの急な支流が、高くそびえたけわしい山々の間に天険をかたちづくっており、多くの労働人民が歩くのはけもの道で、河を渡るにもロープや丸木橋にたより、山くずれや山つなみの災害に未だに遭うことの多い村が少なくなかったし、三大地主の圧迫のもとで、多くの農奴は死線上であがいていた。当事のヤルツァンポー河には労働人民の血と涙がしみとおっており、多雄拉山口を見ると、労働人民の白骨がうず高くつまれていた。

1962年、墨脱が生まれかわり、メンパ、ローパ族の人民は、党と毛首席の指導のもとに組織に入り、天地と戦い山を切り開いて、数年間、彼らは多雄拉山口を越える道を整備し、県城から加拉莎区までの間の道を直した。これればかりでなく社員たちは更に河の水と激しく戦い、あいついで、解放大橋、血枚吊橋、金珠吊橋をつくりあげ、これらのワイヤーの長いアーチが、天険を通りみちに変えた。

農業生産は更に速く発展した。1973年の墨脱県の食糧の単位面積あたり生産高は連続2年“綱要”の基礎をこえ、さらに毎亩500斤の難関をも突破して“黄河”をまたぎ越えた。背崩村と墨脱公社では二期作の稲を試験的に植えて収穫に成功し、単位面積あたり生産高はそれぞれ703斤と1,018斤に達した。これは、社会主義制度の他に比べるもののない優越性をはっきりと示しており、峡谷区の農業生産には、限りない未来が開かれたのである。

（丘　睦美　訳）

（「ヒマラヤ」94号より転載）

加拉白里初次攀登记实

由西藏西部圣地喀拉斯山附近起源的雅鲁藏布江，沿着西藏高原那世界上山岳重叠的最为荒凉的大地向东奔驰约1,500公里之后，突然改变方向，转向西南穿过喜马拉雅的中部，流向阿萨木平原。流入阿萨木平原后便改称为布拉玛普多拉河的这条大江，穿过孟加拉继而注入孟加拉湾，其全长从源头开始大约有2,900公里的漫长里程。

在雅鲁藏布江那鲜为人知的大拐弯处，高高耸立着两座山峰，南(内)侧为南迦巴瓦峰(7,882米)；北(外)侧为加拉白里峰(7,151米)。南迦巴瓦作为世界上处女峰中的最高峰，世界上的登山家们对其虎视眈眈，跃跃欲试。中国登山队迄今为止曾3次对此山进行过侦察和试登，但均未如愿以偿。另一方面，耸立于对面的加拉白里峰，不仅无人涉足，就连其全貌的照片也未曾有人拍摄过。这样，多少年来它一直深藏在南迦巴瓦这座令人垂涎的山峰背后，遭到了不幸的冷遇。

日本喜马拉雅协会于1985年9月至10月派遣侦察队(山森欣一队长等一行3人)对加拉白里峰西南面进行了详细的探察，同时并拍摄了一些珍贵的照片。经过多方准备，喜马拉雅协会决定征服这座山峰。

1986年9月1日，喜马拉雅协会的乔乌衣队(八岛宽队长等10人)、卡热疆队(新乡信广队长等6人)、拉布及康侦察队(斋藤安平队长等2人)三支登山队同时从日本出发，经北京、成都，于4日到达西藏拉萨。在拉萨停留4天，经过整理行装，在当地购置用品等完成了最后准备后，8日由拉萨出发前往林芝县八一镇。这一天，由拉萨东行大约400公里。按高度计算由1,880米下降到1,240米，毕竟有600米的高度差，这里的空气似乎比拉萨浓厚一些。9日，我们首先拜会了米林县县长。在县政府，县委书记兼县长罗布次仁氏及县公安局长、交通局长等官员会见了我们。离开米林县后我们便前往派。米林至派村大约有100公里。

11日，登山队和为我们搬运行装的民工们一起开始向大本营进发。离开派村的招待所30分钟左右的行军后我们便在下游渡过雅鲁藏布江到达左岸，渡船是由两根圆木联结而成的简单的木筏，一次只能载15～18人。由左岸直奔砘陪村，稍事休息后，花一个半小时，抵达索松村，在这里迎来了第一个夜晚。半夜突然下起了暴雨，这一晚是在凄凉中度过的。12日，索松至多林的道路较为宽阔而平坦。13日，一过山脊道路益见险恶，全体人员手持砍刀，披荆斩棘，缓慢前进。这一天，我们在加拉村对岸的渡场露营。14日，加拉白里离我们越来越近，我们终于在这一天望见了加拉白里南部末端的峭壁。15日，我们准备横渡加拉白里河，但这里水流湍急，难以涉渡。按原订计划，渡过这条河流，要在对岸乱石堆上设立大本营。但是，在这条激流面前，民工们不得不在此结束他们搬运行李的工作。送走民工，我们赶在天黑以前，整平土地，好歹搭起了4顶帐篷。这样，经过5天困难重重的长途拔涉，我们终于

抵达了加拉白里冰河的边缘地带。次日清晨，我们商量无论如何要在这条河上架一座渡桥，正在讨论架桥方法时，民工扛着一根大圆木来了，据说有9名派的民工自发地留下来帮助我们架桥，对此好意，全体队员感谢不已。在米林县公安局次仁多吉氏、派区管理人索郎多吉两位和9名民工的协助下，不到一小时，一座象样的渡桥终于架成了，这座日中友谊桥，为我们帮了大忙。16日，根据侦察结果，大本营只能设在昨晚露营的地方而别无选择，在征得了王联络员的同意后，开始了大本营的建营工作，其高度为海拔3,200米。

在大本营整理行装等等滞留2天之后，兼带适应性训练，开始了进行前进基地探察工作。经过侦察，我们决定在乱石堆的最末端海拔4,200米处设立前进基地。22日，开始向前进基地搬运行李。这项作业完成以后，26日开始进入最后的登山活动。27日，A组由前进基地后面的峡谷攀上岩壁，探测了至4,740米高处的登山路线。30日，在5,000米处的鲫鱼背状的山脊处削平雪棱，预备在此地设立第一突击营地。10月3日，经过休整的A组完成了建立第一突击营地的工作后，翌日开始探查至第二突击营地的路线。11日，B组、C组(飞田、藤原)一行苦于前一天的大雪，在深雪中排雪前进，终于在傍晚于5,650米处设立了第二突击营地，B组于该日进入了第二突击营地。12日，B组开始探查由第二突击营地以上的路线，登上了盼望已久的5,880米处的南棱。16日，进入10月以后，终于在这一天遇到了晴天的兆头，蓝天在云彩间露出了它的面容。19日，在C组(飞田、今村、藤原)的协助下，第三突击营地(6,300米)建成，尾形、太田、桥本3人这一天进入第三营地。这里面对巍然耸立的南迦巴瓦峰，向下俯瞰，雅鲁藏布江象一条玉带，可以说，这里是一处最为理想的突击营地。21日，由第三突击营地出发的飞田、今村、藤原等3人，在前日到达的最高处，继续向上铺设了50米长的辅助缆绳，并在6,700米处建设了第四突击营地。这样，实施最后攻击的准备工作逐渐完成，我们依次回到大本营进行最后的休整。

在高度3,200米处的休整，使我们得到了充分的休息，经过3天的休息，恢复了体力的我们一行，于25日开始进行最后的突击。首先，第一梯队尾形、桥本、今村3人25日由大本营出发，到达第一突击营地，第二天依次进入各营地，最后于28日抵达第四突击营地。当他们抵达营地，不禁目瞪口呆，仅时隔一周，只见帐篷被狂风暴雪刮的东倒西歪，惨不忍睹。为此，只好留下桥本整理帐篷，尾形和今村继续往上探查路线。在第四突击营地的正面，横立着一座巨大的冰崖，他们决定从右面进攻，从冰崖中部向右15米处用冰镐开路，同时在水平线上呈Z字形向上攀登，继而在冰崖上端按Z字形向左上方前进50米，终于登上冰崖顶部，这时只见森丹普峰呈现在眼前，加拉白里峰顶巅仿佛伸手可及，乌云在脚下翻滚，在不丝不安中，两人回到了第四突击营地，准备翌日的冲刺。29日，第一梯队一行3人，因在严寒中难以入睡，1时30分起床，4时50分由营地出发，凭借手电筒的光亮到达前一天抵达的最高处，零下24度的寒气，透过登山鞋，冻得双脚生疼。11时，高度计量表的指针仍然停在6,850米处(或

许是6,950米？)在这个时间，继续登顶已不可能。于是，在又固定了50米缆绳后，一行回到了营地，把翌日登顶的任务委托给第二梯队以后，3人下到了第三突击营地。30日，第二梯队飞田、太田、藤原一行3人，吸取第一梯队的经验，待天亮后，7时10分出发，但是因气候与前一天一样恶劣，前进速度十分缓慢，当到达前一天最高点时，时针已指向11时，结果，第二梯队也只好放弃登顶，下山。

在第一、二梯队相继失败以后，最后攻击任务又一次落在尾形、桥本、今村3人身上。31日，在寒冷中难以入睡的3人于3时半起床，这时，咆哮的狂风吹打着帐篷，天气仍然不很理想。一行稍迟于原定出发时间，于6时15分离开营地，黎明前的夜空，月亮只发出暗淡的光亮，凭借手电筒3人缓慢地向上攀登，终于按计划花了2小时15分钟到达了第四突击营地，在这里他们抵达前一天最高点的时间不到11时，比原计划稍早一些。他们抓紧时间，继续向前，这时，积雪一直陷到大腿部，被迫排雪前进，峰顶的岩壁似乎就在伸手可及之处，但是仍难以接近，只见时间在一分一秒地消失。由绳索的终点，又继续向前攀登了200米的雪壁，逐渐到达了峰顶岩壁下。这时，时针正好指向15时。终于，一直担心的山顶笔直垂下的冰河裂隙带，和预想的一样较之右端的岩壁而顺利地被征服了。登上顶峰的边角，透过云彩可以远远眺望怪石林立的西峰及张着大口的冰河裂隙。沿顶峰鞍部往上，有一块10米左右覆盖着冰棱的雪壁，登上这块雪壁，地形稍见平坦，不久就到达了最顶峰。从第三突击营地出发开始，经过11个小时的艰苦搏斗，16时55分加拉白里那雪白的顶峰，终于被踏在我们的脚下。呼呼地呻吟着的狂风和翻滚的乌云，使我们没有心思回味那第一次登上顶峰的喜悦心情，更无暇从顶峰眺望那广阔无垠的大自然，尽快地结束了登上峰顶的仪式，便匆匆地逃下山来。

17时15分，顶峰已在我们身后。所有返回路线的标识被风雪吹得无影无踪。在深深的积雪中扫雪前进，呼啸着的风雪、极差的能见度，加上深深的积雪，使返程显得极为困难。尽管如此，总算于19时20分回到了第四突击营地。当一行继续下到第三突击营地背后因雪崩而形成的重叠的雪原时，迷失了方向，大雪使微弱的手电筒的光线显得更加暗淡，地形根本无法辨认。过了一会儿，终于，一面红旗出现在手电筒的光线里，这样我们判明了方向，终于从可怕的风雪中逃脱出来，到21时5分抵达第三突击营地为止，实际上长达15小时的突击，真是漫长的一天。

从登山活动开始的数十天之后，我们终于于10月31日登上了加拉白里峰。它说明了这次登山的艰苦，也证明了我们付出了坚韧不拔的努力。11月1日，在刺骨的寒风中，我们撤掉了帐篷，回到了前进基地，漫长的登山活动终于降下了帷幕。

A SECRET MOUNTAIN OF RIVER IN REDDLE

— HAJ GYALA PERI EXPEDITION —

1986

(By YOSHIO OGATA)

PROLOGUE

Yarlung Tsangpo Jiang (river) takes its source from western Tibet, run to the east for 1,500km in Tibet plateau, after leaving the plateau, crashes through an immense gorge, beneath the high Himalayan peak and come down to the south. Then, this river comes to be called as Brahmaputra in Assam. This was a river in riddle, for this has very deep a gorge which is called " Great Bend " and nobody could approach there.

The Great Bend area has two high peaks, Namcha Barwa (7,782m) to the south and Gyala Peri (7,151m) to the north.

We had deep interest in some peaks in the Eastern Tibet, and we applied for climbing permission to the peaks to the Chinese Mountaineering Association (CMA) since 1983. Gyala Peri is also, one mountain of great interest to us.

We, at last, got the permission to climb Gyala Peri thoughtful the good office of CMA and Tibet Mountaineering Association (TMA) and we dispatched a reconnaissance party to the Gyala Peri in 1985.

After one year, Our 6 members started for mountaineering to a secret mountain by the side of river in riddle.

APPROACH

We left Japan on Sep. 1st with other three HAJ's Tibet Expedition and arrived at Lhasa on Sep. 4th.

On Sep. 8th, we left Lhasa by 2 jeeps with members, liaison officer, translator and assistant liaison officer. We drove about 400km to the east and arrived at Bayizhen.

On Sep. 9th, we met Yarlung Tsangpo Jiang and ran along the river. We crossed a big bridge and we had call with chief officer of Mainling Xian at his

office. A chief officer told us that 100 porters were already arranged and a manager would be join us. We were just greatful to them for all help.

We left Pe for Base Camp of Gyala Peri on Sep. 11th. We crossed the river at Pe. We were now introduced to a wired-looking craft call a " tru " which consisted of two conifer dug-outs, each about 12m long, lashed together. It was a most unwieldy craft, but carried a big cargo. The first day crossed the river, after which we went along the Tsangpo and we arrived at the Susong. It had rained hard in the night.

On Sep. 12th, we marched in drizzle and the next day in rain. The second day, we camped at the Chube. Chube is the last Tibetan village on the left bank of the Tsangpo.

On Sep. 13th, we marched for 6 hours and came to the place which is opposite the Gyala village. This place is called Gyala Gompa.

It is said that Tibetan people once made a pilgrimage in their life to this Gompa.

On Sep. 15th, we traversed along the right bank of Gyala Peri river with porters.

The current seemed threatening and we judged it would be impossible to cross the river on foot. So we allowed porters to return home and camped next to the ford.

On the next day, however, some porters came with logs to make a bridge. We tied up with them to set a bridge. This bridge is called " China-Japan friendship bridge ".

And then, the place of Base Camp was decided.

CLIMBING

Staying in Base Camp for 2 days, we went scouting for Advance Base Camp (A. BC). We climbed on a moraine ridge to the end and decided to set up A. BC there. It was at an altitude of 4, 200m.

The unloading was began from 22nd of September. Then we began climbing of the upper part from 26th.

On Sep. 26th, 2 team members, I and Ohta left A. BC for route making to Camp 2. We climbed to the complicated glacier when we happened big avalanche in the west wall of Gyala Peri. But, we had narrow escape. Avalanche happened many times in the west wall on afterwards. We changed our climbing route that the sight of this avalanche made us determine immediately.

We climbed up on a ridge of right corner in the west wall. And C1 was set up

on a thin snow ridge on Oct. 3rd.

We had to climb in a deep snow, a pinnacle like " Gate ", and knife edges. Moreover climbed on a snow wall which we called " Zebra Rock ". And at last we set up C2 at the height of 5, 650m.

We stood on the hoped-for south ridge at 5, 800m on 12th. We could see the flow of Yarlung Tsangpo river right beneath. On the south ridge , the steep snow wall seemed to be leading us up to the summit. But the bad weather continued.

We could see the blue sky at last on Oct. 16th. Our party began route making for upper part. We had a hard time to march in the very deep snow which reached up to our neck. The route-making party set up C3 at the height of 6, 300m on 19th. Ogata, Ohta and Hashimoto left in C3.

The next day, we set 4 fixed ropes in the blizzard and came back to C2.

On 21st, Tobita, Imamura and Fujiwara set up C4 at the height of 6, 700m and we got ready for the attack.

ATTACK

We took a rest at the elevation of 3, 200m and we were re-fresh. Then we began marching for attack.

The first party which consists from Ogata, Hashimoto and Imamura left BC for C1 on 25th. And reached at C4 on 28th.

The 3 members left C4 at 4:50 on 29th. The snow wall was getting steeper and we had to put some fixed-ropes. Then, we gave up the climbing because of the lack of time and got back to C3.

The second party which consisted from Tobita, Ohta and Fujiwara left C4 at 7:10 on 29th. But the weather continued to be bad. They, too, had to give up the climbing.

Hashimoto, Imamura and I were charged with the attack again. We left C3 at 6:15 on 30th. We had a hard time to march in the deep snow, and arrived at the beginning of the summit wall. It was just 15 o'clock. But we advanced without any hesitation. It took 3 pitches for climbing. Moreover we climbed in a very steep couloir with very acrobatic movement. About all, it took 11hours for us to the summit since we had started C3. We leave the summit in the violent wind at 17:15, and we descended to C3.

We could set our foot on the summit by the last-minute effort. The long climbing concluded on Nov. 1st.

EPILOGUE

The virgin peaks more than 7,000m were very few nowadays of the earth, Now is the time for the higher virgin peaks so to speak " The Shining Mountains of the last " for that reason. We were able to first ascent a 7,000m virgin peak at such a time, and we were very happy.

We would like to extend our thanks to the Chinese peoples that we were fortunate enough to receive a lot of support.

We left a precious footprints in the one page of the history of Eastern Tibet.

In conclusion, The height of the Gyala Peri officially announced is 7,151m. But we felt it would be higher, for we measured it by our altimeter.

SUMMARY AND OUTLINE

Name of the team: HAJ GYALA PERI EXPEDITION 1986.
Sponsor: THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN (HAJ)
Period of the Expedition: From September to November, 1986.
Expedition Members:
Leader: Kazuo TOBITA (40) Climbing Leader: Yoshio OGATA (38)
Members: Takeshi OHTA (32) Yasuhiro HASHIMOTO (32)
Hirotaka IMAMURA (27) Takuo FUJIWARA (30)

登　山　隊　員

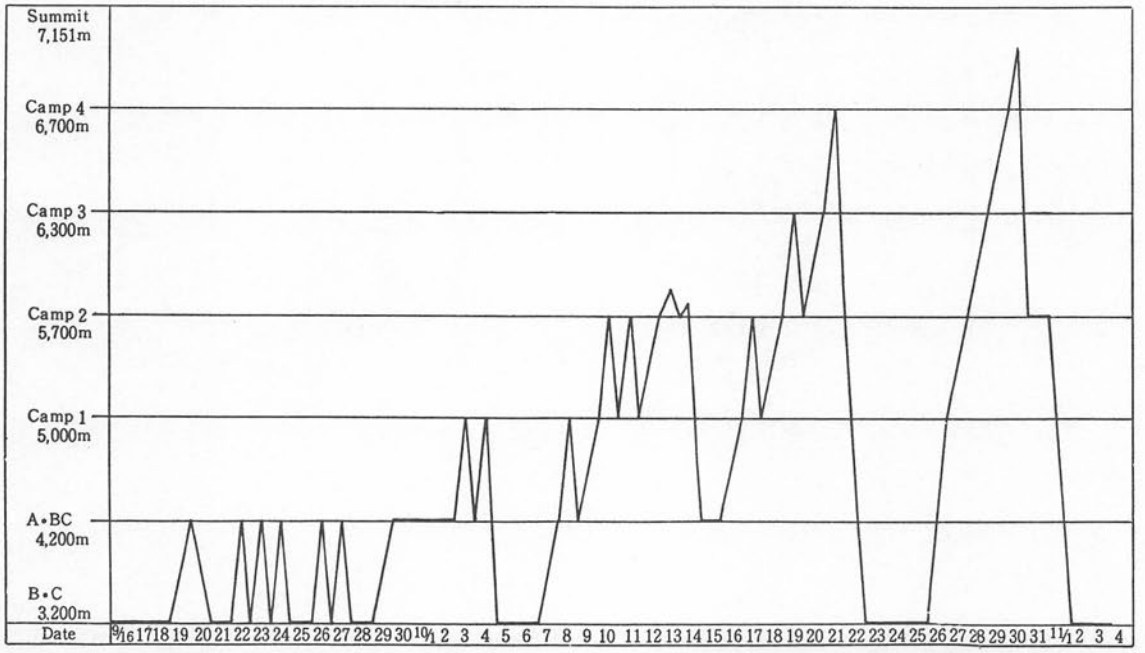
CLIMBING MEMBERS LIST

（①生年月日　②所属クラブ　③勤務先　④住所　⑤海外登山経験）

隊　長

飛　田　和　夫（Tobita Kazuo）

①1946年1月5日生
②国鉄関東山岳連盟
③国鉄拝島運転区
④〒183 東京都府中市矢崎町1−16−5
　国鉄ＡＰ2−103 ☎0423-66-5017
⑤1976年夏　カラコルム偵察
　1978年秋　トリスル（7,120m）登頂者
　1981年春　ヤルン・カン（8,505m）登頂者
　1983年春　韓国・雪岳山
　1983年夏　ヌン（7,135m）隊長
　1984年春　中国・玉龍雪山（5,596m）隊長
　1985年夏　K_2（8,611m）隊長
　1986年冬　ゴーキョ・ピーク
　1986年秋　ギャラ・ペリ（7,151m）隊長

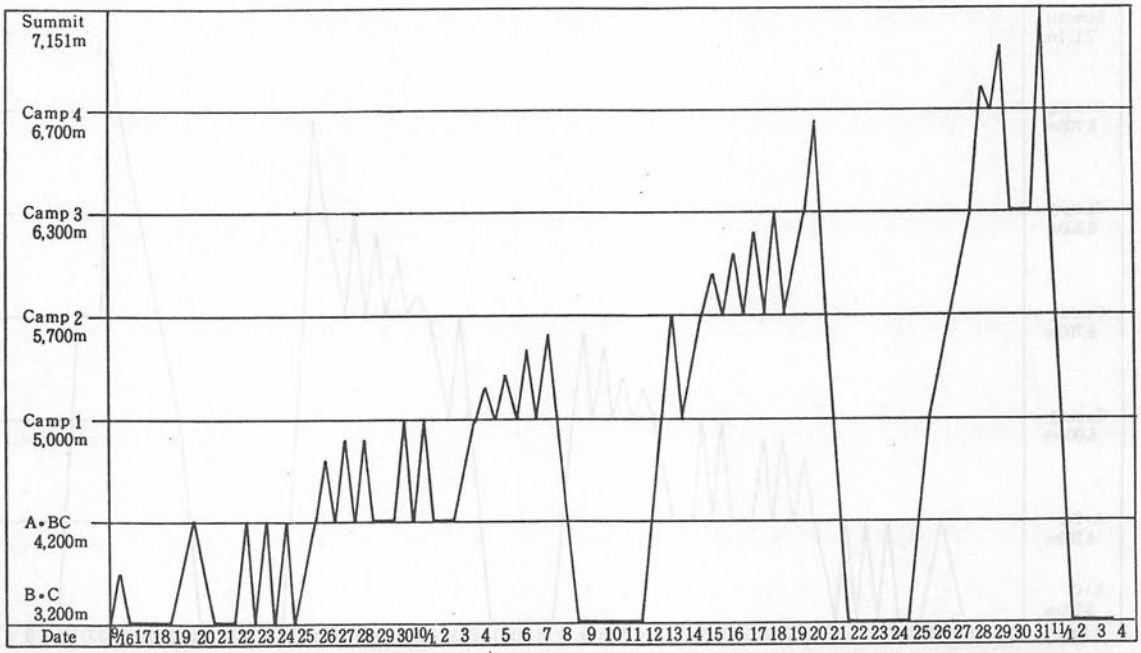


登攀隊長

尾　形　好　雄（Ogata Yoshio）

①1948年7月　　生
②雪と岩の会
③日本ヒマラヤ協会事務局
④〒187 東京都小平市

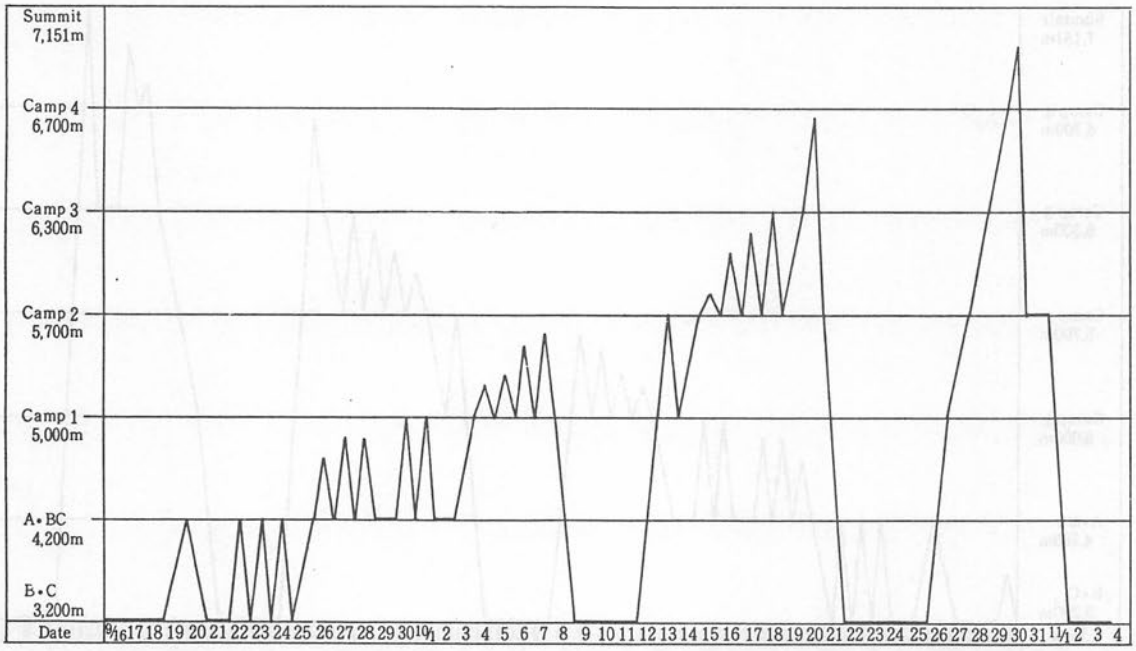
⑤1974年春　ツクチェ・ピーク（6,920m）隊長、登頂者
1978年春　ヒマルチュリ（7,893m）隊長、西峰初登頂者
1980年秋　ケダルナート・ドーム（6,831m）隊長、登頂者
1981年春　ヤルン・カン（8,505m）縦走隊長、登頂者
1981年秋　ナンダ・カート（6,611m）捜索副隊長
1983年秋　ナンダ・カート（6,611m）隊長
1984年秋　マモストン・カンリ（7,526m）隊長、初登頂者
1985年秋　ガンケル・プンスム（7,541m）登攀隊長
1986年秋　ギャラ・ペリ（7,151m）登攀隊長、初登頂者



隊　員

太　田　　健（Ohta Takeshi）

①1954年２月　　生
②風の谷同人
③自営
④〒666　　兵庫県川西市
⑤1982年夏　インド・ＣＢ９（6,108m）
　1986年秋　ギャラ・ペリ（7,151m）

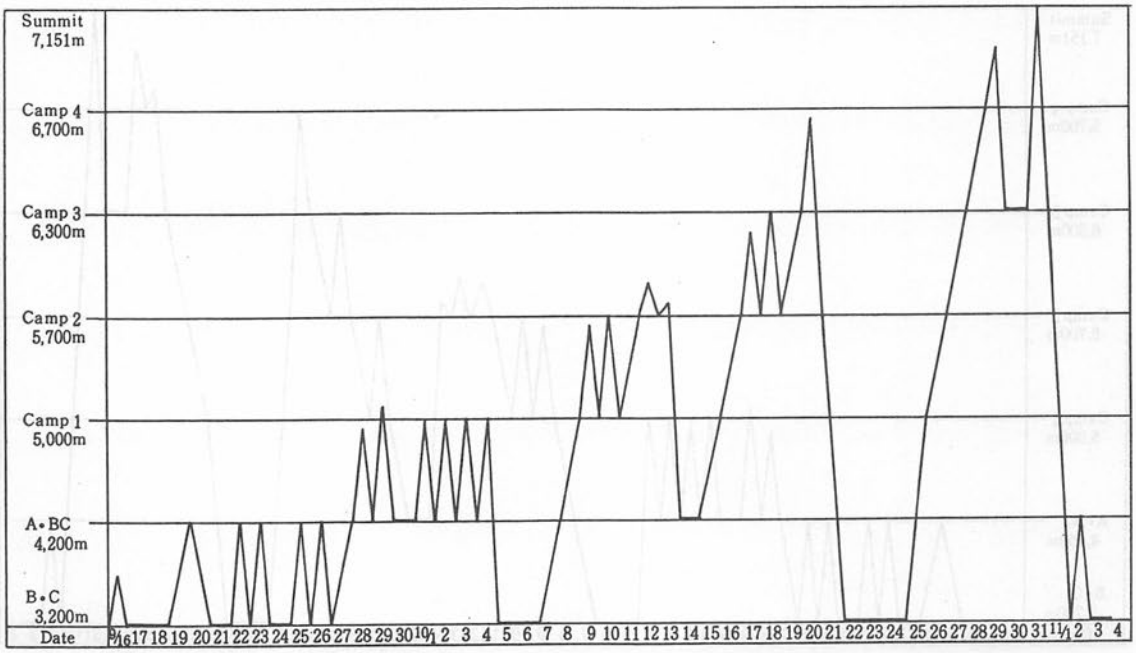


隊　員

橋　本　康　弘（Hashimoto Yasuhiro）

①1954年８月　　生
②東京徒歩山渓会
③自営
④〒222 神奈川県横浜市

⑤1980年夏　ヨーロッパ・アルプス
1985年秋　中国・クラウン（7,295m）
1986年秋　ギャラ・ペリ（7,151m）初登頂者

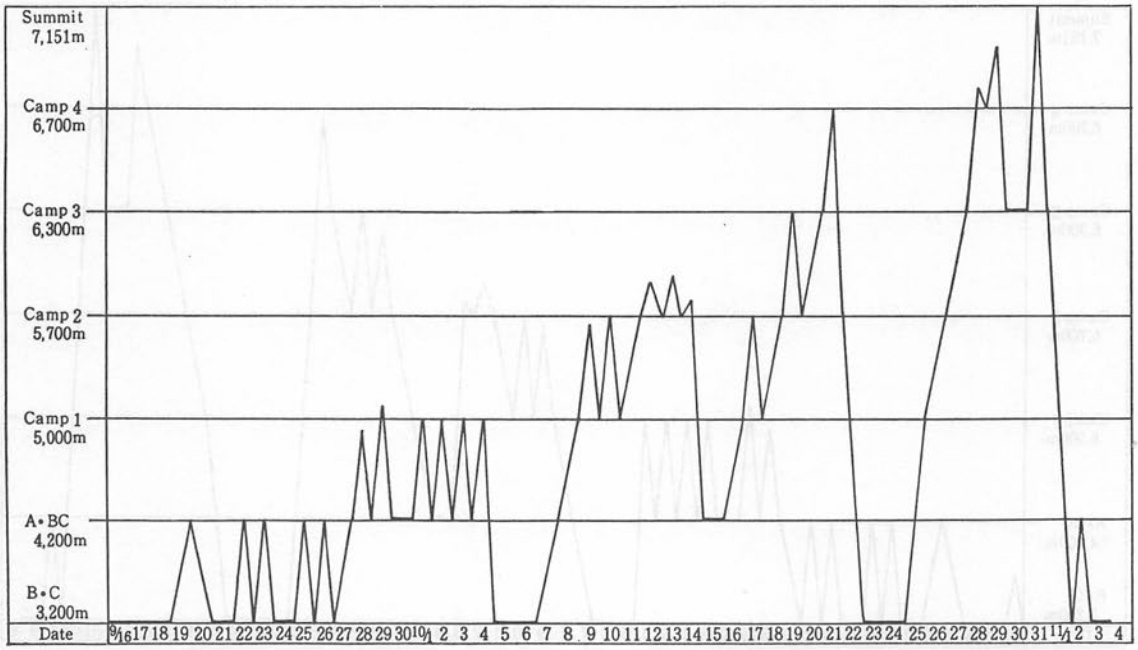


隊　員

今　村　裕　隆（Imamura Hirotaka）

①1959年４月　　生
②ベルニナ山岳会
③薩栄電設株式会社
④〒242 神奈川県大和市

⑤1982年夏　中国・チョゴリ（8,611m）支援隊員
1983年秋　マカルー（8,463m）
1984年夏　マッキンリー（6,194m）隊長、登頂者
1985年　韓国・インスボン他
1986年秋　ギャラ・ペリ（7,151m）初登頂者

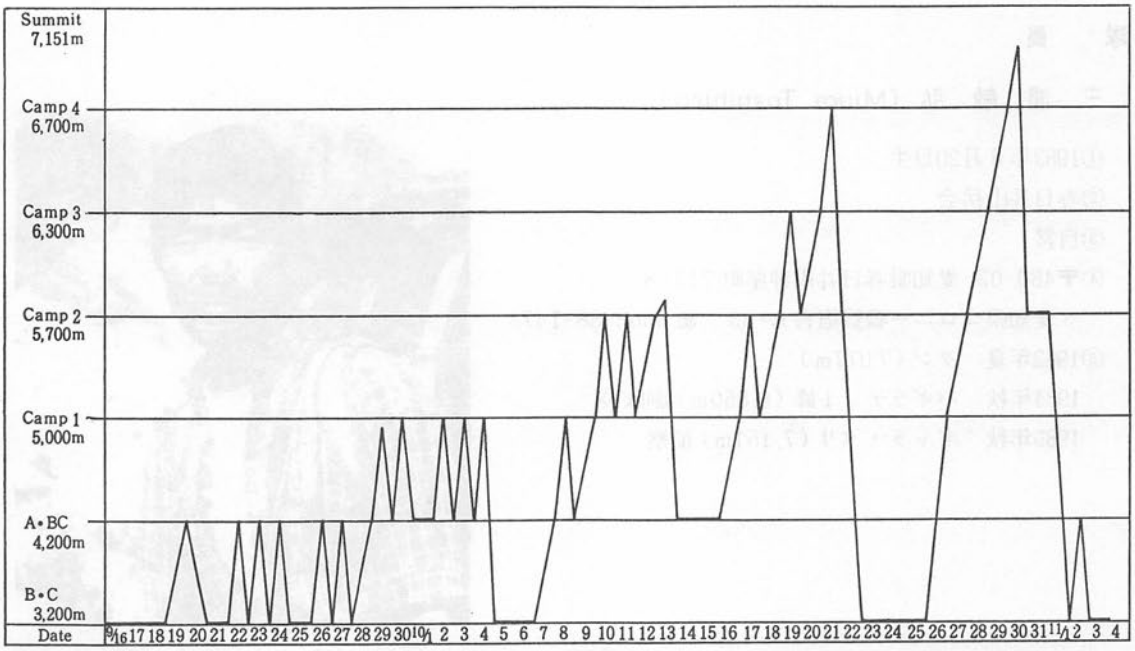


隊　員

藤　原　拓　夫（Fujiwara Takuo）

①1956年３月　　生
②G登攀クラブ
③自営
④〒173 東京都板橋区

⑤1984年夏　ヨーロッパ・アルプス
　1986年秋　ギャラ・ペリ（7,151m）

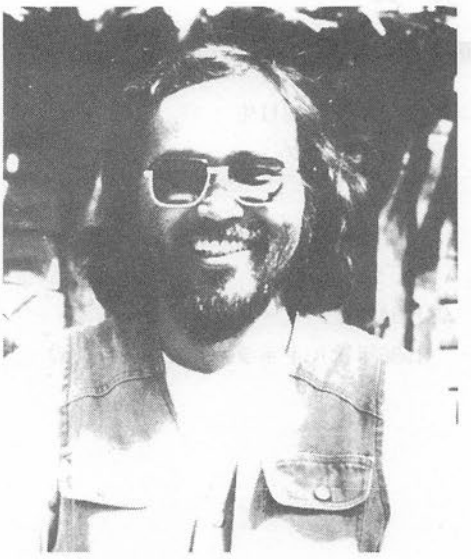


偵　察　隊　員

RECONNOITER MEMBERS LIST

隊　長

山　森　欣　一（Yamamori Kin-ichi）

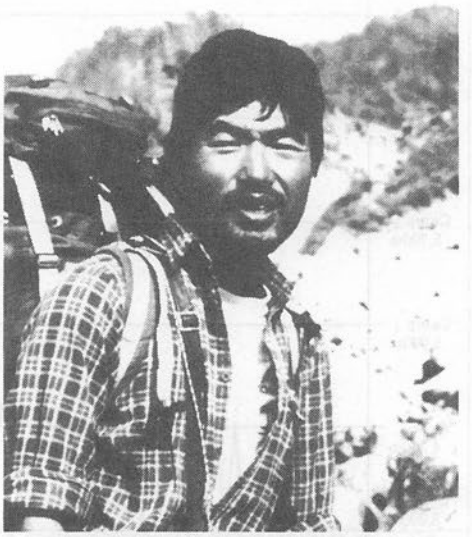


①1944年２月　　生
②山嶺登高会
③日本ヒマラヤ協会事務局
④〒134 東京都江戸川区

⑤1975年夏　ヌン（7,135m）副隊長
　1978年夏　ハチンダール・キッシュ（7,163m）副隊長
　1980年春　カンチェンジュンガ（8,586m）偵察隊長
　1981年春　カンチェンジュンガ（8,586m）隊長
　1982年夏　クン（7,077m）隊長
　1984年夏　ナムナニ（7,694m）偵察隊長
　1985年秋　ギャラ・ペリ（7,151m）偵察隊長

隊　員

三　浦　敏　弘（Miura Toshihiro）



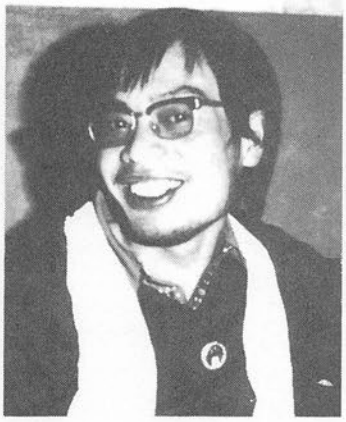
①1953年３月　　生
②春日井山岳会
③自営
④〒480-03 愛知県春日井市

⑤1982年夏　クン（7,077m）
　1984年秋　バギラティ１峰（6,850m）副隊長
　1985年秋　ギャラ・ペリ（7,151m）偵察

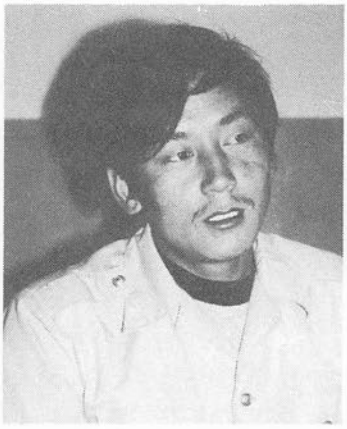
中国側スタッフ

(1985年偵察隊)

連　絡　官
拉　　巴　51歳
西蔵族
西蔵登山協会



通　　訳
梁 永 林　22歳
漢　族
中国登山協会



コ　ッ　ク
巴　　桑　24歳
西蔵族
西蔵登山協会

(1986年本隊)

連　絡　官
王 家 瑞　46歳
漢　族
中国登山協会

通　　訳
崔 昌 燮　26歳
朝鮮族
中国登山協会

連絡官助手
朱　　飛　22歳
漢　族
西蔵登山協会

III 資料

中国登山の手続き
登山規則関係
西蔵登山年譜
西蔵登山の和文参考資料一覧
ギャラ・ペリ周辺のチベット語

中国登山の手続き

尾形好雄

登山申請

中国登山の場合、ネパールやパキスタンのように（社）日本山岳協会の推薦状を添付して外交ルートで提出する必要はない。各都道府県岳連から日山協、さらに外務省と云った国内の煩しい手続きなしに、各登山隊が直接、下記の中国登山協会（ＣＭＡ）宛に登山申請書を提出すればよい。

登山申請書の申請事項は、参考資料の様式にもとづいて次の通り記載する。

①組織（隊名、国名、隊長名、隊員数）
②目的（スポーツ、科学調査、スポーツ及び科学調査）
③目標峰及びルート（山及びルートの第一希望、第二希望、第三希望を併記する）
④遠征期間（第一希望、第二希望、第三希望）
⑤科学調査のテーマ
⑥写真撮影の目的
⑦偵察隊の人数及び実施時期
⑧中国登山協会に要請する援助
⑨中国への入出国期日と登山活動期間
⑩食糧・装備等の品目、数量、重量の詳細なリストを添付する
⑪自国内の後援組織（派遣母体）
⑫北京での代理人
⑬申請書作成場所
⑭申請者氏名
⑮申請期日

従来、中国の登山時期については、春、秋、冬の３シーズンと考えられてきたが、山域によっては夏のシーズンにも許可が貰えるので検討してみるとよい。因に各シーズンの期間は次のようになる。

春（３月～５月）　夏（６月～８月）
秋（９月～10月）　冬（11月～１月）

これらの登山申請書は、日本語でも英語でもどちらで作成してもよい。

（提出先）　中国登山協会
（住　所）　中華人民共和国北京市体育館路九号

議定書の調印

申請承認後、登山隊とＣＭＡは協議に入り、議定書を締結することになる。

議定書の事項は別添参考資料の通りである。尚、議定書の調印は山によっては文書のやりとりでも可能であり、北京まで出向かなくともよい。

経費支払い

中国々内の費用については、別添「費用徴収規定」に細かく規定されている。

登録料は、許可取得後、２ケ月以内に支払わなければならない。もし、期限内に支払われない場合、その許可は自動的に取り消され、他の隊に按排される。

議定書に基づいて算出された予算額の一部を預託金として規定の期限までに支払わなければならない。そして、中国への入国１ケ月前迄には、予算金額の全額を支払わなければならない。さもないとエントリー・ビザが発給されない。

（送金先）　北京中国銀行本店
（口座番号）　7110　0594
（口座名）　中国登山協会
注）送金目的の欄に「登山費用」と明記の事。

登山隊は登山終了後、ＣＭＡで経費実費と納入

金額の差額について清算がなされる。

隊荷の輸送及び通関

中国では山域にもよるが、チベットや新疆地区などは国内輸送距離が長いため登山隊が入国する3ケ月前迄に北京到着が必要である。隊荷の中に酸素ボンベやガス・カートリッジなどの危険品を含む場合は、4ケ月前迄に北京に到着するようにしなければならない。これはこれらの危険品を運ぶ汽車等の便が決っているため、その便に合わせる日数がさらにかかるからである。

隊荷の梱包が済んだら、速かにパッキング・リスト及び送り状（Invoice）を作成してCMAへ3部送付しなければならない。

隊荷をアナカン（Unaccompanied Baggage，旅行者手荷物別送品）輸送する場合、北京の通関は荷送り人が居なくてもCMAが代理で通関してくれる。従ってInvoice及びAir Way billの荷受人名には、CMA気付で隊長名、登山隊名を書いておかなければならない。

成田～北京間の航空路線では航空券のディスカウントがなく飛行距離の割には高いチェケットを買わされている。そのため旅行代理店によっては手荷物のエクセス・バッケージについて便宜を計ってくれるところもあるので相談してみるとよい。

ここで、アナカン輸送について少し触れてみよう。

先ず、隊荷の発送予定日が決ったら、その約1ケ月半前位に航空荷物輸送業者へ連絡をして、目的地迄のキャリア（飛行機）をブッキングして貰う。この時に必要なことは、

1）隊荷の現地到着希望日
2）隊荷の概算重量と個数
3）隊荷の形状・寸法

などを連絡しなければならない。

こうして隊荷輸送のキャリアを予約した後，登山隊は隊荷の集荷・梱包と出発前の一番慌ただしい時期を迎えることになる。

次にアナカン輸送に必要な書類について述べてみよう。

1）パッキング・リスト（Packing List）

持ちだし隊荷の全てについて各カートン毎にパッキング・リストを作成する。リストには、品名、数量、重量、価格（※1）等の項目を記載する。

（※1：価格表示には2通りある。1つは、C.I.F.（Cost, Insurance & Freight）で、保険料運賃込み価格。もう1つは、F.O.B.（Free on Board）で、積み込み渡し価格。どちらの価格表示なのかを明記しなければならない）

パッキング・リストを作成したら、それらの物品を消費・非消費物品に分けてリストを作る。

2）送り状（Invoice）

送り状には、カートン総個数、マーキング名、品名、総価格、荷送り人の住所・氏名、荷受け人の住所・氏名等を記載する。

この場合の注意点としては、荷送り人と荷受け人の氏名は、同じく隊長名とする事。

3）東京税関成田支署長宛ての「航空手荷物別送品の許可願い書」

航空手荷物別送品としての輸出を承認して頂く願い書。帰国時に別送品の持ち帰りがある場合は、輸入時の通関も併せてお願いしておくこと。

4）別送品の外国製品の申告書

別送品の中にある外国製品を申告しなければならない。パッキング・リストの中に※1はフランス製、※2は西ドイツ製、※3はイギリス製、※4はイタリア製……と云ったマーキングでシュラフや登山靴などの外国製品を申告すれば良い。（中国向けパッキング・リストには不要）

5）国外持ち出す米の量の申告書

別送品中のお米の量を申告しなければならない。隊員数と登山期間から国外持ち出しするお米の量が適当かどうかチェックされる。

6）全隊員のパスポートのコピー

パスポートの2頁から5頁のコピーをメンバー・リストの順に重ねてとじる。

7）全隊員の航空券予約証明書

東京から搭乗する飛行機のフライトナンバーの書かれた航空券の予約証明書

8）登山計画書（和文）

以上の書類が揃ったら航空貨物輸送業者へ隊荷を引き渡す。ファクシミリやジェネレーターのよ

うな機械類は、通関時に別送品としては認め難いと云ったクレームをつけられることがある。そのような場合は、それらの品の登山活動における必要性を記した願い書を提出しなければならない。

通関が切れたら、輸送業者からエアーウェイ・ビル（Air Way Bill）を受けとる。

Air Way Bill を受けとったら、送り状を付けたパッキング・リスト及び Air Way Bill を3部、ＣＭＡへ送付する。

次に中国登山に於ける隊荷の関税であるが、撮影機、カメラ、腕時計、通信機器、登山装備、衣類等の特別管理物品については、申告登録後に免税で通関されるが、燃料、食料、医薬品等の消耗物品については、申告総価格の10％が輸入税として徴収される。

入国時に申告した通関用申告書の控えは、出国時に必ず申告物品と現物のチェックがなされるので大切に保管しておく必要がある。

その他、チベットでの登山の場合、カトマンズから隊荷をラサへ持ち込むことも可能である。

メンバー・リストの送付

登山隊が入国する３ケ月前迄に全隊員のメンバー・リストを３部送付しなければならない。記載項目は、①氏名②性別③生年月日④住所⑤職業⑥パスポート番号⑦パスポート発行日⑧登山経験等で、これにパスポート用サイズの写真を添付する。

エントリー・ビザ

ＣＭＡから招請状が届いたら、在日中国大使館にビザの申請をする。

エントリー・ビザ申請に必要な書類

①全隊員のパスポート

②各隊員の必要事項を記載したビザ交付申請書

③全隊員の写真（パスポートサイズ）　各１枚

④ＣＭＡからの招請状

エントリー・ビザは、単数（一次）で６ケ月間有効のものが交付される。

ビザ交付手数料は、 3,000 円

トランシーバー

中国の場合は、ＣＭＡへトランシーバーの周波数、型式、出力、台数を記載したリストを３部、入国の３ケ月前迄に送付した後、中国側の判断によって許可される。現在のところ明確な規定は知らされてないが、市民バンド及び140～150 MHz の超短波（VHF）の周波数のものは許可されている。

中国々内の手配

中国々内に於ける隊荷輸送、交通機関、賓館・接待所、現地雇員、ポーター・ヤク・ラクダ、現地購入品など全ての手配は、基本的にはＣＭＡが請負う。

これによって登山隊は、中国内総支出の５％を総合サービス料としてＣＭＡに徴収される。

中国側協力員への支給装備

中国側の連絡官、通訳、コック、ベースキャンプ要員等には、別添規則に基づいて手当と装備を支給しなければならない。この装備支給については金銭で解決することも出来る。

日本国内でこれらの支給品を全て揃えるとなるとかなりの金額になるため、金銭で支払っている隊が多いようだ。因に中国側協力員の支給装備は次の費用で用意される。

連絡官及び中国人要員	700元
高所協力員	1,000元
ポーター及びヤク、馬、ラクダ方	200元

トレッキング

中国々内の山地旅遊（トレッキング）に関しては、1986年１月に設立された中国国際体育旅遊公司（王富州総経理）の扱いとなる。

西蔵自治区の場合は、登山隊もトレッキング隊も全て西蔵国際体育旅遊公司によってアレンジされる。

中国国際体育旅遊公司

北京市体育館路十号

（電話）752831～264 、755053

中国へ遠征する外国登山隊及びツーリスト隊規則

中国登山協会（1980年11月）

この規則は、人民相互の交流と友好促進を目的とした、国際間登山の振興のために制定される。

(I) 解　禁　峰

チベット自治区：チョモランマ峰（8,848.13ｍ）とその姉妹峰。
シシャパンマ峰（8,012ｍ）とその姉妹峰。

新疆ウイグル自治区：ムズターグ・アタ峰（7,546ｍ）。
クングール峰（7,719ｍ）。
クングール・チュビエ峰（7,595ｍ）。
ボゴダ峰（5,445ｍ）とその姉妹峰。

四　川　省：コンガ峰（7,556ｍ）とその姉妹峰。
スークーニャン峰（6,250ｍ）とその姉妹峰。

青　海　省：アムネマチン峰（6,282ｍ）とその姉妹峰。

注：現在の解禁峰のリストは、別添一覧表を参照されたい。

(II) 申　　請

1. 中国を訪れるすべての登山隊及びツーリスト隊は、中国登山協会（ＣＭＡ）に対し申請書を提出すること。申請承認後、隊とＣＭＡは協議に入り、議定書締結後に、ＣＭＡは許可証を発行する。
2. 登山隊及びツーリスト隊は議定書による期限内に、登山あるいはツアー料、隊員の写真、経歴書、パスポートナンバー、ビザ発行場所名をＣＭＡに送付すること。
3. 目標峰、採用ルート、隊員数、中国入国日、登山開始日を勝手に変更することは禁止する。変更事項が生じた場合は、議定書指定日以前にＣＭＡに通告し、ＣＭＡの認可を受けなければならない。
4. エクスペディション実施以前に、偵察隊の派遣やルート付近の科学調査が必要な場合は、ＣＭＡに計画を提出し承認を得ること。科学調査に対する特別規定の詳細は、付記(1)を参照のこと。
5. ＣＭＡは必要とあれば、登山隊及びツーリスト隊、あるいはその隊員のエクスペディション許可を取消すことが出来る。
6. ＣＭＡは、同時期に、異ったルートから、同一峰に複数の登山隊の登山を許可する権利を有する。二つの登山隊が、同時期、同一峰の同一ルートを計画している場合は、ＣＭＡへの申請以前に、当該登山隊間で協議し調整すること。
7. 登山隊及びツーリスト隊は、＂中国への外国登山隊及びツーリスト隊費用徴収規定＂に従い、すべての費用を支払うこと。

(Ⅲ) 食料・装備等の出入国

1. 中国への登山隊及びツーリスト隊使用の食料・装備等は、議定書による期限内に、中国内指定地に輸送すること。その際、隊は輸送一ケ月前に、ＣＭＡに対し食料・装備等の、品目、数量、重量、個々の価格、総価格のリストを、また別に、許可されたらウォーキートーキーの型、出力、数量を記載したリストを送付すること。
2. 登山隊及びツーリスト隊は登山あるいはツアー終了後、中国から食料・装備等を持ち出す前に、その消費または粉失した品目及び数量リストを、ＣＭＡと中国税関に提出すること。そのリストはＣＭＡ派遣リエゾンオフィサーにより、検閲サインされたものでなければならない。食料・装備等を他隊または個人に、寄贈あるいは販売した場合は、中国税関規定による関税を支払わなければならない。
3. 登山隊及びツーリスト隊が、中国内での装備、食料、燃料の購入に関し、ＣＭＡに委託を希望する場合は、議定書合意期限内に、その品目及び数量の詳細なリストをＣＭＡに送付すること。

(Ⅳ) 中国協力員規定

1. リエゾンオフィサーは、中国への外国登山隊及びツーリスト隊における、ＣＭＡの代理人である。すべての許可取得隊は、山への往復に際し、リエゾンオフィサーを伴わなければならない。
   リエゾンオフィサーの義務は以下の通り。
   (1) エクスペディションに関連する諸問題解決への助力。
   (2) 隊の遵守義務規定履行の監督。
   (3) ＣＭＡへの報告。
   (4) 隊と中国協力員間の争議の仲裁。
2. 高所協力員の負荷最大重量（個人用装備、食料、燃料を含む）。
   5,001 ～ 6,000 m　　20kg
   6,001 ～ 7,000 m　　17kg
   7,001 ～ 7,500 m　　14kg
3. 8,000 m峰以外では、通常高所協力員は利用出来ない。
4. 5,000 m以下での、低所ローカルポーターの負荷最大重量（個人用装備、食料、燃料を含む）は25kgとする。
5. 荷役動物の負荷最大重量は、目標峰の地形や高度により決定される。
6. 高所協力員、低所ローカルポーター、荷役動物の一行程の距離は、十分な休憩がとれるよう適切にアレンジすること。
7. 8,000 m以上へ登る高所協力員には、常時緊急用酸素を用意し、別に 7,500 m 以上では睡眠用酸素の供給を保障すること。
8. 登山隊及びツーリスト隊は、リエゾンオフィサーと中国協力員に対し、ＣＭＡが規定した登山装備及び他の支給品を、無料で貸与または供与すること（付記２参照）。それらの支給品はリエゾンオフィサーにより事前チェックされる。隊が寄贈を希望する場合は、ＣＭＡが取扱い業務をおこなうこととする。
9. 登山隊は、医師あるいは診療経験者をメンバーに含み、中国協力員に対し、登山開始前に健康診断をおこなうこと。また登山中における病気や負傷の際には、適切な医療措置を施すこと。病気または負傷した中国協力員に対して、リエゾンオフィサーの同意なしに、解雇したり賃金支払いを停止してはならない。

(V) そ の 他

1. 登山隊及びツーリスト隊は中国政府公布の法律及び法令を遵守し、また文化遺産、動植物資源保護規則を遵守する
2. 登山隊及びツーリスト隊は、隊活動の責任を負う自国組織を指名し、その代表者は責任をもって、北京でＣＭＡとの交渉に当ること。
3. ＣＭＡとの通信は、すべて中国語か英語を使用すること。
4. 山名及び高度は、中国の公表を公式とする。
5. 隊が中国滞在中に、ニュースの発表や新聞記者会見を行なう場合は、すべて事前にＣＭＡに報知すること。登攀結果に関するニュースはＣＭＡが発表する。またＣＭＡは登攀中のいかなる事故についても、その情況を速かに発表する。
6. 隊が、自国の国旗を登山中または山頂に掲げる場合は、同時に同仕様の中国国旗を掲げること。また、山頂及びルート上には、いかなる記念物も設置しないこと。
7. 無線機及び武器、弾薬は中国への持込みを禁止する。
8. 国境のピークで行動する場合は、中国と近隣諸国との関係を損う行為をしないこと。
9. 地方民の社会道徳、習慣、文化を尊重すること。
10. 山地を清潔に保つこと。ベースキャンプ、上部キャンプ及びアプローチマーチにおけるゴミや不要物は、清掃するか埋没すること。
11. 登山及びツアー活動における、すべての写真、映画、ビデオテープのコピーを、ＣＭＡに無料提供すること。
12. 登山及びツアー活動の出版物は、それぞれ二部をＣＭＡに無料提供すること。
13. 登攀終了後、ＣＭＡに対し口頭あるいは文書で報告を行なうこと。その後一ケ月以内に、文書による正式報告をＣＭＡに提出すること。

(VI) ＣＭＡは登山終了後、隊及びその隊員に対し証明書を発行する。

(VII) 登山隊及びツーリスト隊が前記の規則に違反した場合は、罰金あるいはＣＭＡが適当とした年数の中国での活動を禁止する。

(VIII) 前記規則は1981年より施行される。

(IX) ＣＭＡは本規則改訂の権利を有する。

（付記１）

中国での登山あるいはツァーに於ける外国人の科学調査関連規則

Ⅰ．ＣＭＡの許可を得ずに外国からの隊及び個人が、進路上に存在する生物（動物、植物、昆虫、微生物を含む）、古代生物、岩石、鉱物、氷、雪等の計画的観察あるいは標本の収集を行なう事は禁止する。

Ⅱ．外国からの登山あるいはツーリスト隊、または個人が、ＣＭＡの許可を得て収集した標本及び見本については、以下の規則を遵守すること。

(a)収集者の氏名、位置と高度、数量とその通し番号、ならびに実施鑑定の結果を明記した収集標本及び見本のリストをＣＭＡに提出すること。

(b)標本及び見本を収集中に、新種あるいは特別種を発見した場合は、ＣＭＡに報知すること。これらの研究及び研究結果の出版は、関係の中国科学研究団体と共同で行なうこととする。

(c)収集した新種あるいは特別種のすべての原型標本は、中国へ送り返すこと。ＣＭＡは、その保存のため関係の科学研究団体へ転送する。また、その他の標本については、協議の上、配分することが可能である。

(d)研究室での分析完了後、収集した標本及び見本（動物、植物、岩石、鉱物、氷、雪、古代生物、水の標本等）の分析結果の複写を２部づつＣＭＡに無料で提供すること。

Ⅲ．科学調査に関係する映画、テレビ映画、または写真の複製を、それぞれ１部づつＣＭＡに無料で提供すること。

Ⅳ．ＣＭＡの許可を得ずに、科学調査に関する書籍、雑記、論文を出版することを禁止する。

Ⅴ．ＣＭＡの承認の上、中国の未踏峰で行った科学調査に関するすべての内容は、他と分離して考査すること。

Ⅵ．ＣＭＡより外国隊に派遣されたリエゾン・オフィサーは、これらの規則履行の管理権限を有するものである。

Ⅶ．上記規則に違反した場合、すべての標本、見本、データーを没収する。
重大事件が生じた場合は、違反者の中国内登山またはツアー資格をはく奪する。

中国登山協会　1980年11月

（付記２）

外国登山隊またはツーリスト隊の中国人要員への支給品関連規則

Ⅰ．高所協力員

－　貸与品、１人あたり　－

(1)　羽毛の寝袋　1
(2)　羽毛服（上・下）　１組
(3)　ピッケル　1
(4)　アイゼン　１足
(5)　カラビナ　1
(6)　安全ベルト　1
(7)　防湿マットレス　1
(8)　テント（共同使用）　1

— 無料支給品、1人あたり —

(1)	ナイロン製防風衣（上・下）	1組
(2)	ズボン	1
(3)	毛のセーターとズボン下	1組
(4)	スポーツウェアー（上・下）	1組
(5)	毛の帽子	1
(6)	登山シューズ	1足
(7)	防寒ブーツ	1足
(8)	ストッキング	1組
(9)	毛のくつ下	2足
(10)	木綿のくつ下	2足
(11)	防寒手袋	1組
(12)	毛の手袋	1組
(13)	サングラス	1
(14)	雪めがね	1
(15)	水　筒	1
(16)	懐中電燈	1
(17)	ザックまたは背負子	1
(18)	雑のう	1

(注) 雨期の登山には、レインコート1着（1人あたり）を貸与すること。

Ⅱ. リエゾン・オフィサー及びB・C要員

— 貸与品、1人あたり —

(1)	羽毛の寝袋	1
(2)	羽毛服（上・下）	1組
(3)	防湿マットレス	1
(4)	テント（共同使用）	1

— 無料支給品、1人あたり —

(1)	ナイロン製防風上着	1
(2)	ズボン	1
(3)	毛のセーターとズボン下	1組
(4)	スポーツウェアー（上・下）	1組
(5)	帽　子	1
(6)	登山シューズ	1足
(7)	くつ下	2足
(8)	手　袋	1組
(9)	サングラス	1
(10)	水　筒	1
(11)	ザックまたは雑のう	1
(12)	懐中電燈	1

（注1） ベース・キャンプより上部で行動するリエゾン・オフィサー及びB・C要員の支給品目は、双方の交渉により決定すること。

（注2） 冬期登山においては、支給する登山シューズは防寒ブーツであること。

（注3） 雨期には、レインコート1着（1人あたり）を追加貸与すること。

Ⅲ. ツーリスト隊におけるリエゾン・オフィサー及び中国人協力員

— 貸与品、1人あたり —

(1)	寝　袋	1
(2)	防寒着（上・下）	1組
(3)	防湿マットレス	1
(4)	テント（共同使用）	1

— 無料支給品、1人あたり —

(1)	フード（頭布）	1
(2)	登山シューズ	1足
(3)	くつ下	1足
(4)	手　袋	1組
(5)	サングラス	1
(6)	ザック	1
(7)	つえ	1

（注1） 冬期ツアーでは、支給する登山シューズは防寒のものであること。

（注2） 雨期にはレインコート1着（1人あたり）を追加貸与すること。

（注3） 山地ツアーが3日以内の場合は、貸与品の(1)〜(4)を貸与し、無料支給品の支給は必要としない。

Ⅳ. 低所ポーター及びヤク、馬、ラクダ方

— 貸与品、1人あたり —

(1)	寝　袋	1
(2)	テント（共同使用）	1

— 無料支給品、1人あたり —

(1)	防寒シューズ	1足
(2)	くつ下	1足
(3)	手　袋	1組

(注) ポーターまたはヤク、馬、ラクダ方の雪線以上での行動、あるいは冬期登山またはツアーへの参加に対しては、各人に羽毛服（上・下）1組を貸与し、また羽毛手袋及びサングラス1組を無料で追加支給すること。

中国登山協会　1980年11月

中国登山申請書式

自費で中国を訪れるすべての登山隊は、中国登山協会の要求するこの書式に従い申請すること。

1. 組　織
   隊　名：
   国　名：
   隊長名：
   隊員数：

2. 目　的
   スポーツ：
   科学調査：
   スポーツ及び科学調査：

3. 目標峰及びルート
   第一希望 ———— 山　名：
   ルート：
   第二希望 ———— 山　名：
   ルート：
   第三希望 ———— 山　名：
   ルート：

4. エクスペディション期間
   第一希望
   から　　まで
   第二希望
   から　　まで
   第三希望
   から　　まで

5. 科学調査のテーマ

6. 写真撮影の目的

7. エクスペディション実施前の偵察
   人　数：
   時　期：

8. 中国登山協会に要請する援助

9. 中国への入国及び出国
   入 国 日：
   出 国 日：
   山岳地での行動期間：

10. 食料・装備等（詳細なリストを添付すること）
   品　　：
   数　　量：
   重　　量：

11. 自国内後援組織

12. 北京での代理人

申請書作成場所：
申請者氏名：
申 請 日 時：

（議定書）

关　于
日本加佳伯里遠征隊
议　定　书

根据日本喜玛拉雅协会的申请，中国登山协会本着发展中日之间的登山交流，增进两国人民的友谊和相互了解的愿望，同意日本加佳伯里遠征队登山队自费来华登山。

双方经过友好协商，议定如下事项：

一、登山队组织

1、名称：日本加佳伯里遠征队

2、总人数：15人

3、队长：飞田和夫

4、国内对其事务负责的单位：日本喜玛拉雅协会

5、驻北京代表：

二、登山队活动项目

1、攀登对象：加佳伯里峰

2、攀登路线：西、南、东西

3、进山路线：北京、成都、拉萨、大本营

4、沿登山路线的科学考察：

5、拍摄：

6、侦察活动人数和期限：

7、攀登活动期限：1986年8月21日—11月20日

三、登山队应遵守中国登山协会关于外国登山团体来华登山的规定和对外国登山团体来华登山收取费用的办法。

四、中国登山协会指派一人担任联络官。需要

指派联络官助理时，其人选由中国登山协会另定。

五、登山队需请中国登山协会予以协助的事项，如各种协作人员的配备、提供登山装备、食品、资料和交通运输、通讯联络安排等，将由登山队代表同中国登山协会代表商定并签订备忘录。

六、登山队在本议定书签订之后，两个月内应向中国登山协会办理如下事项：

1、提出登山（和科学考察）活动计划；

2、提出经费预算。

七、以上各项均经双方完全同意，并共同保证实施。本议定书如有未尽事宜，可由双方代表协商解决。

八、本议定书于1985年12月21日由双方代表在北京签字，本议定书用中文和英文写成，各一式两份，两种文本具有同等效力。

本议定书自签字之日起生效。

中国登山协会代表　　日本以汁协会

汪铁铭　　山森欣一

（議定書付録）

议定书附录：

日本加佳伯里远征队

一、 日方向中国登山协会雇用以下人员：

翻 译： 1 人 在 北京 报到。

管理员： 在 报到。

炊事员： 2 人 在 拉萨 报到。

高山协作人员： 在 报到。

低山搬运工：进山 150人出山 在 报到。

当 地 人 员： 在 报到。

马工或牦牛工、骆驼工：进山 出山 在 报到。

说明：联络官在 北京 报到。

二、 方租用以下交通工具：

进山：大轿车：

面包车：

吉普车： 5 部

·1·

卡 车： 1 部

马匹或牦牛、骆驼：

值班车：

出山：大轿车：

面包车：

吉普车：

卡 车：

马匹或牦牛、骆驼：

说明：出山车辆待定

三、物资运输：

日方全部物资和装备于本队入境前 三 个月运抵北京，危险品于入境前四个月直抵北京。

四、伙食：

中方人员的伙食均由中国登山协会按规定标准承包，日方负责其所备的食品、炊具、燃料的运输。

·2·

日方负责配备中方人员炊事用的汽油炉和炊事帐篷。

日方人员的伙食伙理。

五、 日方负责配备给中方人员的装备，按中国登山协会规定办理。

六、付款办法、地点、账号：

签订议定书后 一 个月内 日 方交纳登山或登山旅游注册费， 三 个月内交纳经中国登山协会审定的在华活动预算的1/5，其余4/5在本队抵达北京时交付。登山或登山旅游结束后按实际支出决算。

汇款地点：北京中国银行总行

账号：7110 0594（注明“登山费用”）

七、 日方须在本队入境 三 个月前向中国登山协会提供下列清单：

1、入境物资清单（含品名、数量、重量、单价、总价、包装体积）一式三份。

2、需中国登山协会代购、租用的物品清单（品种、数量）一式三份。

3、队员简历表（并附照片、护照号、签证地点）一

·3·

式三份。

4、报话机型号、数量、功率清单一式三份。

八、中方于 方本队入境前 个月内向其提供中方人员身高、胸围、脚长。

九、其它：

中国登山协会代表

汪铁铭

日本山岳协会

山崎欣一

·4·

（登頂証明書）

DATE: November 18, 1986

証明书

Certificate

尾形好雄先生于一九八六年十月三十一日十六时三十三分，在攀登喜马拉雅山脉的德拉由曼峰时，到达海拔7151米的海峰特此证明。

This is to certify that, on October 31 1986 at 16:55 h., the Mr. Yoshio Ogata has reached the altitude of 7151 m. above sea level on an expedition to peak Jalabaili of Mount the Himalaya Mountains

中华人民共和国登山协会

MOUNTAINEERING ASSOCIATION OF THE PEOPLE'S REPUBLIC OF CHINA

一九八六年十一月十八日

中国への外国登山隊及びトレッキング隊に対する

費用徴収規定

(1987年1月発効)

1. 登録料と預託金の支払い

(1) 中国を訪れる外国登山隊は、許可取得後、2ケ月以内に登録料を支払うこと。中国登山協会（以下CMAとする。）は、登録料を受領後、登山許可証を発行する。登録料が期限内に支払われない場合、その遠征は自動的に取り消され、CMAはその許可を他に按排する。

(2) 預託金の金額と期限

山名 ＼ 預託金金額 ／ 支払い期限	入国1年前迄に	入国6ケ月前迄に	入国1ケ月前迄に
チョモランマ	10,000元	20,000元	予算金額の全残額
8,000m以上	8,000元	10,000元	〃
7,000m以上	—	8,000元	〃
7,000m未満	—	5,000元	〃

(3) 支払われた預託金は、予算金額の一部となる。期限内に支払われない場合、その遠征は自動的に取り消され、それ迄に支払われた預託金は返戻されない。

(4) 登録料を支払った後、登山隊及びトレッキング隊が自己都合によって遠征を取消した場合、CMAの許可を他隊に譲渡する事が出来る。同時に支払った預託金も他隊に充当する事が出来る。然し、登録料は返戻されない。交代した隊は、再度、登録料を支払わなければならない。

(5) 登山隊及びトレッキング隊は、中国への入国1ケ月前迄に、予算金額の全額を支払わなければならない。さもないとCMAは、エントリー・ビザを発給しない。

2. 登録料（1隊あたり）

チョモランマ	8,000元
8,000m以上の峰	5,000元
7,000m以上の峰	3,000元
6,000m以上の峰	2,000元

上記レートは、隊員数20名以内の隊に適用され、隊員数が20名を超える場合は、超過人数1人あたり100元を別に徴収する。

6,000m未満の峰（岩登りも含む）の登録料は、登山者1人あたり100元とする。また、新たに解禁された未踏峰に初めて登攀する場合には、特別登録料を徴収する。

3. 報酬金（1日1人あたり、単元：元）

リエゾン・オフィサー	37
通　訳	37
高所協力員	37－55

キャンプ要員	30
低所ポーター	16
ヤク、馬、ラクダ方	16

4. 食事、宿泊及び市内でのサービス請負い費は、外国隊が実際に活動した時の地方価格で請求される。

(1) 食事、宿泊及び市内でのサービス請負い費を既に支払っている場合には、航空券の予約、旅行査証の手配及び宿舎と空港間の輸送（20kg以内の手荷物の輸送を含む。）サービス料の追加徴収は免除する。

(2) 外国登山隊の中国出入国が、北京あるいは成都である場合、空港と宿舎間は隊として行動が出来ないため、それぞれの隊員は下記レートの運賃を支払うこと。

単独行者	50元
2人～8人の隊	30元
8人以上の隊	10元

(3) 重量を超えた手荷物及び貨物の運送（車の賃借料、運送、3日以内の保管を含む。）については、運賃の10%を別にサービス料として徴収する。

(4) 郊外への観光ツァーにおける車の賃借料は、その土地の基準料金とする。

(5) 登山隊の都合によって人数及び旅程が変更した場合、それによって既に手配された車や航空券などに生じた損失金は、登山隊が負担すること。

(6) CMAで手配するもの以外の車、洗濯、医療、郵便及び通信、飲み物等の費用は、全て自費でまかなうこと。

(7) 物品の保管料は、10kg迄の小さな手荷物で1日1個あたり2角とする。（但し、空港及びホテルでは実費支払いとなる。）

5. 山での食費（1日1人あたり）

リエゾン・オフィサー、通訳、管理官、高所協力員、キャンプ要員： 28元
標高5,000m未満で働くポーター及びヤク、馬、ラクダ方： 5元
標高5,000m以上で働くポーター及びヤク、馬、ラクダ方： 17元

中国人要員の食料（炊事具、燃料なども）は、上記レートに従ってCMAが提供する。登山隊またはトレッキング隊は、B・Cで使用する圧力釜、ガソリン、ストーブ、炊事テントを提供すること。そして、それらの食料、炊事具、燃料等の輸送費は登山隊またはトレッキング隊の負担とする。

6. 輸送費

（車　　種）	（チベット）（元／km）	（新疆・青海・四川）（元／km）	（駐車料）（元）
ファーストクラス・ジープ（5人用）	2.50	2.20	120
セカンドクラス・ジープ（7人用）	—	1.92	110
サードクラス・ジープ（4人用）	2.20	1.76	100
ファーストクラス・ミニバス	5.50	4.40	200
セカンドクラス・ミニバス	4.40	3.20	150
トラック	4.80	3.36	200
ファーストクラス・コーチ	7.00	5.60	250
セカンドクラス・コーチ	5.50	4.40	200

（青海～チベット線を走るトラックの輸送費は、1kmあたり3.36元とする。トラックの積載能力は、青海～チベット線、新疆～チベット線及びチベットでは2.5～3トン、他地域では3～3.5トンであり、容積は11立方メートルである。

空車の帰路費用については、上記レートの半額を徴収する。B・Cで使用する車輌の運賃は、走行距

離に応じて徴収し、駐車料金は徴収しない。然し、その際には、登山隊は運転手に対する手当、食費、保険料を負担し、必要な作業衣を用意すること。

チベットのチョモランマ～シガール間及び新疆のマザー～イリク間の公路を通行する車輌に対して以下の道路補修費を徴収する。バス、トラック、ミニバスが各1台に付き500元、ジープは300元。

7. 荷役動物の雇用料金

ヤク、馬は1日1頭あたり26元、ラクダは40元である。ヤクと馬が標高5,000m以上で稼動する場合は1日1頭あたり30元とし、ラクダについては標高による料金の変更はない。

雇用された動物が到着後、待機する場合は1日1頭あたり上記レートの半額を徴収する。また、動物の往き、帰りの旅費として、それぞれ1日分ずつの料金を徴収する。雇用した動物が死亡した時には、その地方の規則に従って補償すること。

8. 死亡・傷害及び医療保険

登山隊は、リエゾン・オフィサー及び中国人協力員に対して中国人民保険公社の死亡・傷害及び医療保険を付保すること。死亡・傷害保険契約額は、リエゾン・オフィサー及び協力員が1人当り25,000元、低所ポーター及びヤク、馬、ラクダ方が15,000元である。医療保険額は全ての人員につき1人当り5,000元とする。

－保険料－

	保険期間	死亡・傷害保険料率	医療保険料率
標高6,000m以上	3ケ月	2 %	1 %
標高6,000m未満～3,000m以上	3ケ月	0.6 %	1 %
標高3,000m未満	3ケ月	0.4 %	1 %

何らかの理由により、無保険で、中国人リエゾン・オフィサーや協力員が登山中に死亡、負傷、不具あるいは病気になった場合は、それぞれの保険金額に応じた補償金を支払わねばならない。

ＣＭＡは、登山隊のために、これらの保険の手続きを請負う。

また、登山隊は全ての隊員に対し、死亡・傷害保険を付保すること。その保険は、自動車または馬、ラクダ、ヤクなどでの旅行中における全ての事故に適用されるものであること。

9. 中国への登山隊が軽装で旅行出来るよう、ＣＭＡは中国人要員の登山装備及び用具（キャンプ及び専門用具は除く）を下記の費用（1回の遠征で1人当り）で供給する用意がある。

リエゾン・オフィサー及び中国人要員	700元
高所協力員	1,000元
ポーター及びヤク、馬、ラクダ方	200元

登山期間が3日以下の場合、上記費用は半額に減額される。この場合でも登山隊は、中国人高所協力員に対し専門装備を無料で支給すること。

リエゾン・オフィサー及び中国人要員へ支給する登山装備及び用具を隊が自ら中国へ持込む方法を選択した場合、それらの装備及び用具は無料で支給され、その取扱いはＣＭＡ制定の規則に従いＣＭＡが行うものとする。

10. 隊がチョモランマ及びシシャパンマのＢ・Ｃで使用するテントの借用を希望する場合は、チベットのＣＭＡ地方事務所へ規定の料金を支払うこと。

11. 登山隊が中国へ持ち込む物品の装備については、特別管理物品（撮影機、カメラ、腕時計、通信機器、登山装備、衣類等）は、登録後に免税で通関を許可されるが、消耗品（燃料、食料、医薬品等）については、中国税関管理局が総価格の10%を輸入税として徴収する。

12. ＣＭＡが手配する郵便、電信、食料、燃料、登山装備の費用は、双方の協議により決定する。

13. 登山隊と隊に派遣された中国人リエゾン・オフィサー及び他の要員が、中国々内で航空機あるいは列

車を利用する際の費用は、関係部門の規定により徴収する。

14. 登山隊が山地旅遊中及び登山中に映画やビデオを撮影する場合は、ＣＭＡに対して撮影料を支払うこと。また、撮影したフィルムあるいはビデオ・テープを第三国で販売または放映する場合は、ＣＭＡに対して販売価格あるいは放映料総額の10％支払うこと。

－撮影料－

8,500ｍ以上の峰	25,000元
8,500ｍ未満～8,000ｍ以上の峰	20,000元
8,000ｍ未満～7,500ｍ以上の峰	17,000元
7,000ｍ級の峰	15,000元
6,000ｍ級の峰	10,000元
5,000ｍ級の峰	7,000元
5,000ｍ未満の峰	5,000元

15. 外国登山隊の中国での諸活動の手配は、ＣＭＡが請負うものである。よってＣＭＡは、隊の中国々内総支出の５％を総合サービス料として徴収する。

16. この規定で云う「元」とは、中国の貨幣単位である。登山隊はこれらの精算分をＵＳ＄、日本円、香港ドル（毎年固定された交換レートによって）のいずれかで支払うこと。

17. 以上の規定は、1987年より発効する。

18. 本規定の解釈及び改訂権は、ＣＭＡに属する。

中国登山協会
1987年１月
（文責：尾形好雄）

中国国内航空新運賃表

（1987年４月１日より）

（北　京）

北京－成都	411元	北京－昆明	613元
北京－上海	275元	北京－南京	225元
北京－天津	41元	北京－重慶	366元
北京－蘭州	336元	北京－西安	242元
北京－鄭州	141元	北京－ウルムチ	735元

（上　海）

上海－成都	426元	上海－昆明	518元
上海－西安	301元	上海－蘭州	385元
上海－鄭州	182元	上海－ウルムチ	823元

（成　都）

成都－ラサ	548元	成都－蘭州	180元
成都－重慶	69元	成都－武漢	250元

（蘭　州）

蘭州－格爾木	221元	蘭州－敦煌	284元
蘭州－ウルムチ	384元	蘭州－ラサ	611元
蘭州－西寧	39元	蘭州－嘉峪関	167元

（ウルムチ）

ウルムチーアクス	192元
ウルムチーカシュガル	379元
ウルムチーホータン	388元
ウルムチークラマイ	80元
ウルムチークルラ	101元
ウルムチークチャ	175元

（格爾木）

格爾木－ラサ	390元
格爾木－西寧	153元

（アクス）

アクスーホータン	133元
アクスーカシュガル	124元

（その他）

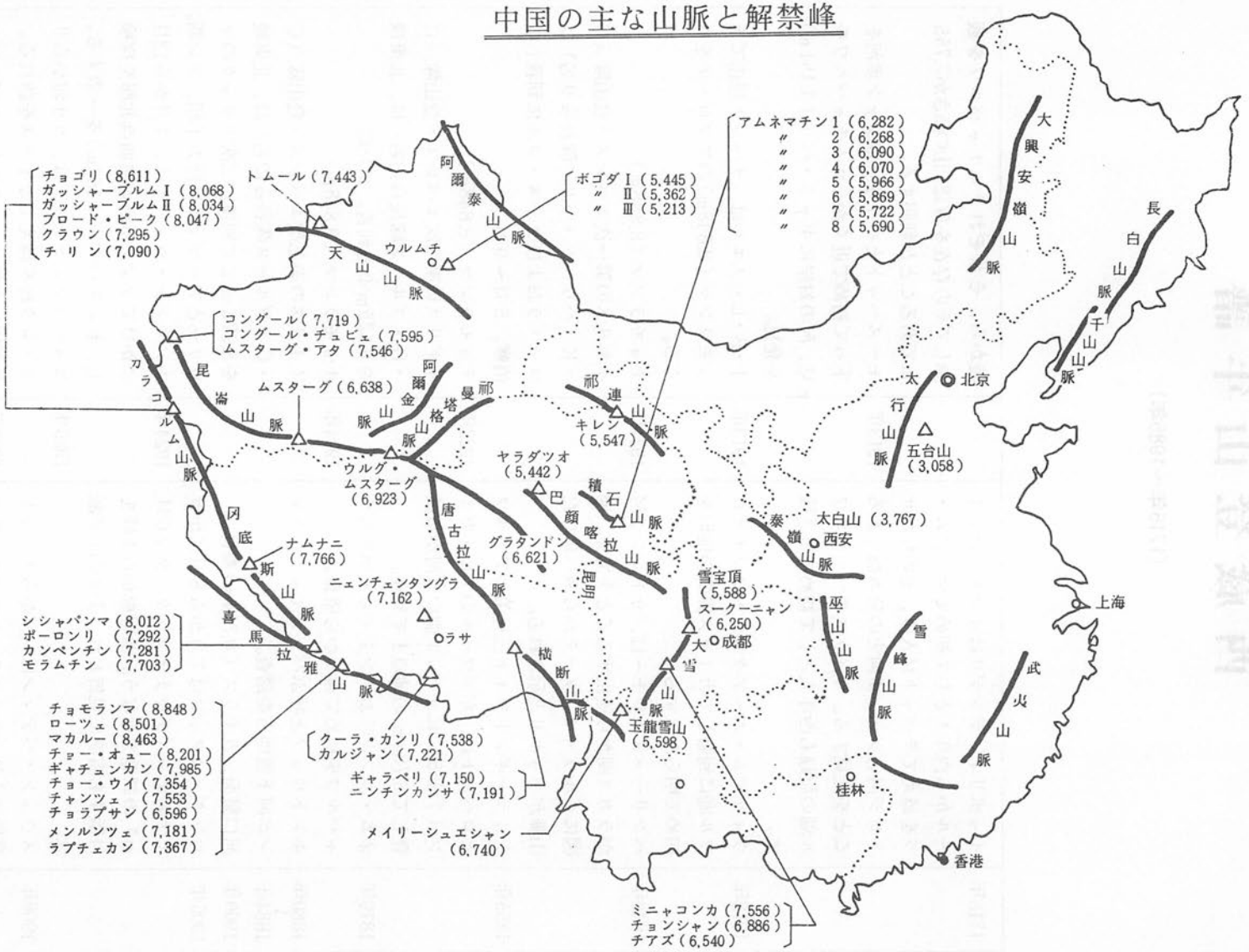
敦煌－嘉峪関	114元
クルラークチャ	77元

中国の開放されている主な高峰

（＊印は未踏峰）

1. チョモランマ（Qomolangma）	8,848 m	チベット	
2. チョゴリ（Qogir）	8,611 m	新　疆	
3. ローツェ（Lhotse）	8,501 m	チベット	1987年オープン
4. マカルー（Makalu）	8,463 m	〃	1986年オープン
5. チョー・オユー（Cyo Oyu）	8,201 m	〃	1986年オープン
6. ガッシャーブルムⅠ（Gasherbrum Ⅰ）	8,068 m	新　疆	
7. ブロード・ピーク（Broad Peak）	8,047 m	〃	
8. ガッシャーブルムⅡ（Gasherbrum Ⅱ）	8,035 m	〃	
9. シシャパンマ（Xixabngm）	8,012 m	チベット	
10. ギャチュンカン（Gyachung Kang）	7,985 m	チベット	1987年オープン
11. コングール（Kongur）	7,719 m	新　疆	
12. ナムナニ（Namunani）	7,694 m	チベット	1985年オープン
13. コングール・チュビェ（Kongur Tiubie）	7,595 m	新　疆	
14. ミニャ・コンカ（Minya Konka）	7,556 m	四　川	
15. クーラ・カンリ（Kula Kangri）	7,554 m	チベット	1986年オープン　＊
16. チャンツェ（Zhangzi）	7,553 m	〃	
17. ムスターグアタ（Muztagata）	7,546 m	新　疆	
18. チョー・ウィ（Cho Aui）	7,354 m	チベット	1986年オープン　＊
19. トムール（Tomor）	7,435 m	新　疆	1985年オープン
20. クラウン（Crown）	7,295 m	〃	＊
21. ポーロン・リ（Porong Ri）	7,292 m	チベット	
22. カン・ペン・チン（Gan Ben Chen）	7,281 m	〃	
23. カルジャン（Karjiang）	7,216 m	〃	1986年オープン　＊
24. ニンチン・カンサ（Ningchin Kangsha）	7,191 m	〃	1985年オープン　＊
25. メンルンツェ（Menlungtse）	7,181 m	〃	1987年オープン　＊
26. ニェチェンタングラ（Nyainqentaglha）	7,162 m	〃	1986年オープン　＊
27. ギャラ・ペリ（Gyala Peri）	7,151 m	〃	1986年オープン　＊
28. チリン（Chiring）	7,090 m	新　疆	1987年オープン　＊
29. ウルグ・ムスターグ（Muztag Shan）	6,978 m	新　疆	1985年オープン
30. シンチン（Xinqing）	6,880 m	青　海	1987年オープン　＊
31. メイリーシュエシャン（Meirigkawagarbo）	6,740 m	雲　南	1987年オープン　＊
32. グラタンドン（Geladaindong）	6,621 m	青　海	1985年オープン
33. ムスターグ（Muztag）	6,638 m	新　疆	1985年オープン　＊
34. チョラプサン（Chonab Fen）	6,596 m	チベット	1986年オープン　＊
35. スークーニャン（Siguniang）	6,250 m	四　川	
36. アムネマチン（Anemaqin）	6,282 m	青　海	
37. ユイロン（Yulong）	5,596 m	雲　南	1984年オープン　＊
38. シェエ・バオ・ディン（Xuebao Ding）	5,588 m	四　川	1987年オープン
39. キレン（Qilian）	5,547 m	甘　粛	1985年オープン
40. ボコダ（Bogda）	5,445 m	新　疆	

中国の主な山脈と解禁峰



西蔵登山年譜

（1715年～1985年）

1715年　イッポリト・デシデリはインド・カシミールから西洋人として初めてマリアム・ラを越えてチベットに入り、その峠がサトレジ河とツァンポ河との分水嶺であることを発見する。カイラスやマナサロワル湖の記録も西洋人として初めて書き残す。

1812年　ウィリアム・ムーアクロフトはマナサロワル湖に到着してカイラス界隈の地形を初めて明らかにする。

1846年　ヘンリー・ストレチーは、サトレンジ河がラカス湖から流出することを発見。地図にグルラ・マンダータから南へ延びた山脈がハッキリと示される。

1855年　シュラーギントワイト三兄弟のアドルフとロベルトは、ガルワールのアビ・ガミン（7,355m）にチベット側の氷河から試登して6,784m の地点まで到達。

1879年　ネム・シンと呼ぶパンデイットがナムチャバルワを初めて遠くから望見。

1880年～1884年　キントウップと呼ぶパンデイットがツァンポ河下流地方を踏査。

1900年　河口慧海、カイラス（6,714m）参拝。

1905年　ロング・スタッフは7月から8月にかけてナムナニ（グルラ・マンダータ 7,694m）の試登を行なう。西尾根から主峰を目指すも雪崩に見舞われ、7,000m で断念。

1906年～1908年　スウェン・ヘディンはレーからチベット高原に入り、トランス・ヒマラヤ、ツァンポ河流域、カイラス一周などを踏査。

1912年　オークス大尉は南のアポール地方から、また、モーズヘッド大尉はミシュミの丘陵から、それぞれナムチャバルワを観測してその存在を確認。山の高さが7,755mであることが判明する。

1913年　モーズヘッドとベイリーはツァンポ河を下って初めて近くからナムチャバルワを見、河の対岸にギャラ・ペリ（7,151m）を発見。

1913年　J・B・L・ノエルは、チベット経由でチョモランマ（8,848m）のアプローチをさぐる。

1921年　チョモランマ（8,848m）
イギリスの第一次エベレスト登山隊（C・K・ハワード・バリー隊長ら9名）は、ロー・ラおよびノース・コルに到着して偵察。5月～9月。

1922年　チョモランマ（8,848m）
イギリスの第二次エベレスト登山隊（C・G・ブルース隊長ら13名）は、北東稜を8,525mまで到着。プレ期。

1924年　チョモランマ（8,848m）
イギリスの第三次エベレスト登山隊（C・G・ブルース隊長ら12名）は、北東稜を8,572mまで到達。二次アタックのマロリーとアーヴィンは行方不明。プレ期。

1924年　キングドン・ウォードは、4月から12月にかけてツアンポ河大屈曲点北部を探検し、ギャラ・ペリ（7,151m）を一周する。

1926年　ヒュー・ラットレッジは、カリ河からリプ・レク峠を越えてカイラスを訪れる。

1927年　長谷川伝次郎は、インドからリプ・レク峠を越えてマナサロワル湖を訪れ、カイラスを一巡した。

1933年　チョモランマ（8,848m）

	イギリスの第四次エベレスト登山隊（ヒュー・ラットレッジ隊長ら16名）は、北東稜を8,572ｍまで到着。プレ期。	1952年	チョモランマ（8,848ｍ） ソ連隊（Ｐ・ダックノリアン隊長ら41名）は、北東稜上、8,200ｍ地点にＣ・８を建設のあと６人が行方不明？
1934年	チョモランマ（8,848ｍ） Ｍ・ウィルソン（イギリス）は、単独で登頂を試みノース・コルの下で死亡。プレ期。	1953年	シシャパンマ（8,013ｍ） オーストリアの地質学徒、ハインツ・クルパルツは、ネパールのボテ・コシから越境してチベットに入り、シシャパンマのＢ・Ｃに向うもケガで断念。
1935年	チョモランマ（8,848ｍ） イギリスの第五次エベレスト登山隊（Ｅ・シプトン隊長ら７名）は、北東稜を7,007ｍまで到着。他にチョモランマ周辺の6,000ｍ以上の山に26も登頂。５月～９月	1958年	チョモランマ（8,848ｍ） 中・ソ合同偵察隊（ペレスキー隊長、中国側は史占春隊長）は、プレ・シーズンに東ロンブク氷河から6,200ｍまで到達。また、中ロンブク氷河からは6,500ｍまで到達して偵察をする。 同隊（許競隊長）はポスト期にも偵察に入り、11月19日に東ロンブク氷河から6,700ｍまで到達し、11月21日には中ロンブク氷河から6,200ｍまで到達する。
1936年	チョモランマ（8,848ｍ） イギリスは第六次エベレスト登山隊（ヒュー・ラットレッジ隊長ら12名）は、ノース・コルで断念。チャンツェの試登を行なう。プレ期。		
1936年	ナムナニ（グルラ・マンダータ、7,694ｍ） ヘルバート・テイッヒー（オーストリア）は、インド人に変装して主稜から試みるも7,160ｍで断念。	1959年	ニェンチェンタンダラ東北峰（6,177ｍ） 中国男女混成登山隊は、チベットで訓練を行ない、２月１日、４日、５日にわたって同峰に登頂。 女性登山隊長の袁揚に率いられた５名のチベット女性も同峰に登頂。
1936年	Ｆ・ルドロウはブータンからチベット南東部に入り、タクポ地方を探査。		
1938年	チョモランマ（8,848ｍ） イギリスの第七次エベレスト登山期（Ｈ・Ｗ・ティルマン隊長ら７名）は、北東稜を8,300ｍまで断念。プレ期。	1960年	チョモランマ（8,848ｍ） 中国登山隊（史占春隊長ら214名）は、北東稜より５月25日に３名が登頂。
1938年	Ｆ・ルドロウはブータンからチベット南東部に入り、コンボ地方を探査。ヤル・ツァンポー河に沿ってギャラ村の下迄下り、ギャラ・ペリやナムチャバルワの貴重な資料を持ちかえる。	1960年	ナムチャバルワ（7,782ｍ） 12月にチベット登山隊が、ヤル・ツァンポー河のギャラまで入り、南稜上約5,000ｍ地点まで試登。
1947年	チョモランマ（8,848ｍ） Ｅ・デンマン（カナダ）は、単独で登頂を目指すもノース・コルの下（7,150ｍ）で断念。プレ期。	1962年	チョモランマ（8,848ｍ） Ｗ・Ｗ・セイヤーを隊長としたアメリカ人３人とスイス人１人の一行が、ネパール側からヌプ・ラを越えて北東稜に挑んだが、7,620ｍで断念。
1951年	チョモランマ（8,848ｍ） Ｒ・Ｂ・ラルセン（デンマーク）は、ネパールから越境して登頂を試みるもノース・コル下までで断念。プレ期。	1963年	シシャパンマ（8,012ｍ） 中国登山偵察隊は第一次から第三次まで派遣され、第三次偵察隊では7,160ｍまで到達する。
		1964年	シシャパンマ（8,012ｍ）初登頂。

	中国登山隊（許競隊長ら195名）は、5月2日に許競隊長以下10名が初登頂。		●ポスト期にアメリカ隊（R・ライカート隊長）は、東壁（カンシュン・フェース）から挑んだが6,750mで断念。
1966年	チョモランマ（8,848m）	1981年	シシャパンマ（8,012m）
	中国登山合同訓練隊（許競隊長）は、北東稜から8,100mまで到達。		●プレ期に女子登攀クラブ隊（田部井淳子隊長ら9名）は、北東稜（初登ルート）に挑み、4月30日、田部井隊長と高所協力員2名が登頂。
1975年	チョモランマ（8,848m）		
	中国登山隊（史占春隊長ら46名）は、北東稜から5月27日に9名が登頂。		●日本の女子隊に引き続き、イタリア・西ドイツ合同隊（R・メスナー隊長ら8名）は、同ルートから5月28日に2名登頂。
1978年	チョモランマ（8,848m）		
	中国・イラン合同訓練隊（デイザチ隊長中国側王富洲隊長）は、北東稜から5月21日に、7,500mまで到達。		●ポスト期には2つのアメリカ隊が入山したがいずれも失敗に終った。 この2つのパーティは、G・ローチ隊長のパーティとチョモランマ東壁を断念したライカートら数名のパーティで、いずれも悪天候に妨げられて断念。
1979年	チョモランマ（8,848m）		
	日本山岳会隊（斉藤惇生隊長ら9名）は9月から10月にかけて翌年春の偵察として北壁と北東稜を調べた。10月12日、ノース・コルへのルート工作中、6,850m付近で雪板雪崩が発生し、高所協力員3名がクレバスに埋没して行方不明となる。	1981年	モラメンチン（7,703m）
1980年	チョモランマ（8,848m）		プレ期にニュージーランド隊（A・ブルックス隊長ら11名）は、北面ルートから初登頂（5月28日に2名）さらに6名も登頂。
	●日本山岳会隊（渡辺兵力隊長ら39名）は北東稜と北壁から挑み、それぞれ5月3日（1名）と10日（2名）に登頂。5月2日に北壁、7,900m地点で雪崩により宇部隊員が遭難。3月～5月。	1982年	チョモランマ（8,848m）
			●プレ期にイギリス隊（C・ボニントン隊長ら6名）は、北東稜の肩から派生する東北東稜ルートに挑んだが、8,200m付近で2名が遭難し断念。
	●6月から8月にかけてR・メスナーは、単独で北東稜から挑み、8月20日に登頂した。		
	●プレ期にフランス隊（マルミエ隊長ら4名）は、偵察に入り北東稜を7,000m迄登る。		●同じプレ期にアメリカ・シアトル隊（R・ウイッテカー隊長ら17名）は、北壁のグラン・クーロワールを目指したが8,400mで断念。1名転落死亡する。
1980年	シシャパンマ（8,012m）		
	●プレ期にドイツ隊（M・アベライン隊長ら9名）は、北東稜から挑み、5月7日、4名が第二登を果す。		●ポスト期にはオランダ隊（A・F・スチュアート隊長ら16名）が北東稜に挑んだが、7,850mで断念。
	●ポスト期には、オーストリア隊（F・モラウエク隊長ら8名）が北東稜から挑み、10月13日に2名登頂する。	1982年	チャンツェ（7,553m） ポスト期にドイツ隊（E・ガイヤー隊長）が東稜から初登頂。10月14日、5名登頂。
1981年	チョモランマ（8,848m）	1982年	シシャパンマ（8,012m）
	●プレ期にフランス陸軍隊（P・アストルグ隊長ら28名）は、北東稜からの通常ルートに挑んだが8,550mで断念。		●プレ期にイギリス隊（D・スコット隊長ら3名）が南西壁を初登攀し5月28日に登頂。

	●ポスト期には、高山研究所隊（原真隊長ら７名）が北東稜から挑み10月10日、12日の両日にわたって全員登頂（報道を除く）
1982年	ポーロン・リ（7,292ｍ） プレ期に大分岳連隊（伊東享隊長ら14名）が北東稜から挑んで初登頂（５月17日、２名登頂）下山中に１名転落し行方不明となる。
1982年	カンペンチン（7,281ｍ） プレ期に京都大学隊（近藤良雄隊長ら13名）が東面から挑み、４月21日に８名が初登頂。22日にも２名登頂。
1982年	ナムチャバルワ（7,782ｍ） ●３月下旬～５月中旬にかけて曽曙生を隊長とする中国登山隊は、ナムチャバルワの南稜、東稜、西稜、西壁にルートを探り、南稜上の那木拉（ナムラ）に達する。 ●中国登山隊と中国科学院は、ナムチャバルワ峰登山学術調査隊（第一次）を組織し、７月から10月にかけてナムチャバルワ峰とその周辺の調査を行う。
1982年	チャンツェ（7,553ｍ） ●ポスト期に西ドイツ隊（ハンスユルゲン・タウシャー隊長ら10名）は、東稜から挑み10/14,16の２度（６名）にわたって初登頂に成功。
1983年	チョモランマ（8,848ｍ） ●プレ期にチリ隊（ガストン・オヤルスン隊長ら12名）は、北東稜に挑んだが8,300ｍのＣ７で断念。 隊員のジーノ・カザッサは、5/14にチャンツェに単独登頂（第２登） ●同じプレ期にアメリカ隊（ロバート・クレイグ隊長ら17名）は、中央ロンブック氷河から直接西稜の肩に続く側稜にルートを取って西稜に挑んだが、8,000ｍで断念。 ●ポスト期にスペイン隊（コンラード・ブランチ・フォルス隊長ら12名）は、北東稜から挑んだが8,400ｍで断念。
	●ポスト期にフランス隊（ヤニック・セニュール隊長ら12名、アメリカ人１名含む）は、春のアメリカ隊と同じルートから北壁のホーンバイン・クロワールを経て北東稜へのトラバースを試みたが、8,200ｍの上で断念。 ●ポスト期にアメリカ隊（ジェームズ・モリシー隊長ら15名）は、カンシュン氷河から東壁に挑み、10/8,9のアタックで６名が登頂した。 ●秋から冬にかけてカモシカ同人隊は（高橋通子隊長ら18名）は、北壁からの冬期登頂を目指したが8,100ｍで断念。
1983年	シシャパンマ（8,012ｍ） ●プレ期に西ドイツ隊（ジークフリート・フップファウアー隊長ら13名）は、北面のノーマル・ルートに挑み、4/29に３名が主峰に、１名が中央峰にそれぞれ登頂した。フリッツ・ルフジンガー隊員（62）が肺水腫で6,900ｍ付近で死亡。
1983年	●ポスト期にアメリカ隊（グレン・ポーザック隊長ら11名）は、北面のノーマル・ルートから挑み、9/30に隊長ら３名が登頂。
1983年	ナムチャバルワ（7,782ｍ） ●２月から４月にかけて中国の第二次ナムチャバルワ峰登山学術調査隊が派遣される。
1983年	ナムチャバルワ（7,782ｍ） ●中国登山協会（ＣＭＡ）は、84年春の本隊に備えて偵察隊（王振華隊長）を派遣し、南稜を試登した。同隊は、4/21にナイプン峰（7,043ｍ）に７名が登頂。 ●６月から９月にかけて中国の第三次ナムチャバルワ峰登山学術調査隊が派遣される。
1984年	ナムチャバルワ（7,782ｍ） 王振華隊長の率いる中国登山隊（26名）が、３月から５月にかけてナイプン峰経由のルートに挑んだが、４月13日にナイプン峰に再度登頂したのみに終わる。当初予定した南稜、東南稜は落石・雪崩の

	危険が多くルートにならず、北西稜を5,300ｍ迄試登する。
1984年	チョモランマ（8,848ｍ） ●プレ期にイギリス陸軍隊（ブロンコ・レーン隊長ら14名）は、北壁を目指したが雪崩に襲われて断念。 ●同時期に北東稜に向かったアメリカ隊（トム・フィッツサイモンズとグレッグ・トンプスンの率いる16名）は、8,600ｍで断念。 ●ポスト期にオーストラリア隊（ジョフ・バートラム隊長ら５名）は、北壁のグレート・クロワールに挑み、10/3に登頂。 ●同時期にアメリカ隊（ルー・ウィッテカー隊長ら12名）は、チャン・ラから北東稜に取り付き7,300ｍ地点からグレート・クロワールへトラバースする80年のメスナーと同様のルートをたどって10/20に登頂。
1984年	シシャパンマ（8,012ｍ） ●プン期にアメリカ隊（ジョセフ・マーフィ隊長ら９名）が、ノーマル・ルートから登頂。
1984年	ナムナニ（7,694ｍ） ●日中合同隊（劉大義隊長ら20名）が、北西面を偵察。 ●ＨＡＪ西蔵遠征隊（山森欣一隊長ら８名）は、チャンタン高原を横断して同峰の北東稜、東稜及び古納峰（6,902ｍ）の西稜を偵察した。 ※両隊ともカイラス一周を行った。
1985年	ナムナニ（7,694ｍ） 日中合同隊（史占春総隊長ら日本側24名、中国側28名）は、北西面から5/25, 28に初登頂に成功した。
1985年	チョー・オユー（8,021ｍ） 中国隊が、5/1に北面ルートから登頂。
1985年	チョモランマ（8,848ｍ） プレ期にスコットランド隊（マルコム・ダフ隊長ら12名）が、東北東稜を試みたが、8,170ｍで断念。 ●スペイン隊（アンヘル・マリア・アブレホ隊長ら14名）は、北東稜から8/28に登頂。同隊は、ネパールからシェルパを同行した。 ●ピエールとアニーのベガン夫妻（フランス）が、北壁に挑んだが8,200ｍで断念。その後、北東稜に転進して登頂を試みたが、8,000ｍで断念。 ●ポスト期にＵタン・クラブ隊（長谷川恒男隊長ら11名）が、北壁と北東稜に挑んだが、雪崩事故のため北東稜の8,200ｍで断念した。 ●秋から冬にかけて冬期登頂を目指したカモシカ同人隊（高橋通子隊長ら12名）は、今回も北壁の8,450ｍで断念。
1985年	ララガ・リ（6,671ｍ） シシャパンマの北西、カンペンチェンとの間にある未踏峰に岩手医科大学隊（安井豊隊長ら９名）が、北東稜から登頂を目指したが、6,400ｍで断念。
1985年	クーラ・カンリ（7,554ｍ） 86年春の本隊派遣を前に神戸大学は、４月に偵察隊（緒方俊治隊長ら３名）を派遣して北東面、西面、南面を偵察した。
1985年	ギャラ・ペリ（7,151ｍ） 86年秋の本隊派遣を前にＨＡＪ隊（山森欣一隊長ら２名）が、９月から10月にかけて西面を偵察した。
1985年	ニンチンカンサ（7,191ｍ） 秋に大分県山岳連盟隊（伊東亨総指揮ら13名）が、南西稜から初登頂を狙ったが、6,600ｍで断念した。
1985年	シシャパンマ（8,012ｍ） スイス・オーストリア隊（マルクス・イッテン隊長ら９名）は、北東稜から9/14に登頂。

（文責　尾形好雄）

西蔵登山の和文参考資料一覧

(解放後に発表されたもの)

1) チョモランマ (Qomolangma) 8,848m

1.チョモランマに立つ (日本山岳会隊・エベレスト中国ルート激闘全記録) 読売新聞社 昭和55年6月25日 1,000円

2.チョモランマ・チベット (日本山岳会珠穆朗瑪登山隊公式報告) 講談社 昭和56年11月10日 5,400円

3.珠穆朗瑪登山1980 (北壁及び北東稜の登攀) 「山岳75年」日本山岳会 1980年12月1日 3,500円

4.みんなが頂上にいた (岡島成行) 山と渓谷社 1983年2月1日 1,900円

5.雪煙をめざして (加藤保男) 中央公論社 昭和57年11月15日 1,200円

6.果てしなき山行 (尾崎隆) 中央公論社 昭和58年7月20日 1,200円

7.チョモランマ峰・美しい女神 (王富州) 「月刊 人民中国」1982年6月号 200円

8.珠穆朗瑪峰 (1979年チョモランマ偵察隊) 横山宏太郎「岳人393号」1980年3月号

9.珠穆朗瑪峰登頂成功 (江本嘉伸) 「山と渓谷513号」1980年8月号

10.レポート「チョモランマ」編集部「岩と雪77号」昭和55年10月

11.絶頂への道・チョモランマ単独無酸素登頂 (ラインホルト・メスナー) 「山と渓谷520号」1981年1月号

12.エベレストに秘められた (ラルフ・バーカー) 「山と渓谷522号&523号」1981年3&4月号

13.チベット北壁隊・苦闘の90日 (カモシカ同人) 「山と渓谷571号」1984年4月号

14.チョモランマ北壁への戦い 上・下 (長谷川昌美) 「山と渓谷597&600号」1985年11月号&1986年1月号

15.冬季・チョモランマ北壁 (Topics) 「山と渓谷598号」1985年12月号

16.チョモランマ単独行 (ラインホルト・メスナー) 山と渓谷社 1985年4月10日 2,200円

17.エベレスト物語「岩と雪97号」昭和58年8月号

18.カモシカ同人隊、チョモランマ北壁撤退「山と渓谷602号」1986年3月号

19.魔頂チョモランマ (今井通子) 朝日新聞社 1986年8月 1,300円

2) シシャパンマ (Xixabngm) 8,012m

1.シシャパンマ1981年・春 (日本女子登山隊の記録) 女子登攀クラブ 1981年9月 2,200円

2.女たちの山 (シシャパンマに挑んだ9人の決算) 落合誓子 山と渓谷社 昭和57年12月10日 980円

3.シシャパンマ峰・氷美の世界 (張俊岩) 「月刊 人民中国」1983年1月号

4.女だけのシシャパンマ (北村節子) 「山と渓谷521号」1981年2月号

5.手記・私ひとりのシシャパンマ (田部井淳子) 「山と渓谷531号」1981年8月号

6.麗峰シシャパンマに立つ (北村節子) 「山と渓谷531号」1981年8月号

7.改造人間シシャパンマと戦う (悪天に阻まれた速攻登山」原 真 「岳人427号」1983年1月号

8.ドキュメント「速攻登山」(加藤幹敏・原真) 「東京新聞出版局」1984年3月 2,200円

9.現代ヒマラヤ登攀史 (編集部) 「岩と雪111号」昭和60年8月号

3) ナムチャバルワ（Namchabarwa）7,782 m &ギャラ・ペリ（Gyala Peri）7,151 m

1.ナムチャバルワ（水野勉）「ヒマラヤ128号」1982年7月号
2.ナムチャバルワ峰登頂を目指して（李舒平）「岳人451号」1985年1月号
3.ナムチャバルワ（伊東亨）「山と渓谷597号」1985年11月号
4.7,000ｍの未踏峰をめざして（ギャラ・ペリ偵察）「岳人463号」1986年1月号
5.最高峰ナムチャバルワとヤル・ツァンポー大屈曲点周辺の山々（山森欣一）「岳人464号」1986年2月号
6.秘峰ギャラ・ペリ偵察1985「ヒマラヤ170号」1986年1月号
7.東チベットの大湾曲部と幻の高峰（山森欣一）「山と渓谷601号」1986年2月号
8.ギャラ・ペリとナムチャバルワ（伊東亨）「岳人464号」1986年2月号
9.謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ」（日本ヒマラヤ協会隊）「山と渓谷618号」1987年2月号
10.加拉白里登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号
11.謎の河の白い頂（ＨＡＪギャラ・ペリ登山隊）「ヒマラヤ183号」1987年2月号
12.チベットの秘峰・南迦巴瓦峰（王振華）「ヒマラヤ184号」1987年3月号
13.ヤルツァンポ河大湾曲部探査（楊逸疇、丘睦美訳）「ヒマラヤ94号」1979年9月号

4) ナムナニ（Namunani）7,694m&カン・リンポチェ（Kang Rimpoche）6,656m

1.未踏の山・辺境の山第5回「カイラス」（加藤洋）「岳人409号」1981年7月号
2.納木那尼峰（日中友好納木那尼合同登山隊）「岳人447号」1984年9月号
3.西チベットの未踏峰ナムナニに照準「岳人447号」1984年9月号
4.聖地巡礼カイラスの旅「ヒマラヤ155号」1984年10月号
5.チャンタン高原から聖地巡礼の旅（山森欣一）「ヒマラヤ156号」1984年11月号
6.チャンタン高原と聖地巡礼（山森欣一）「岳人450号」1984年12月号
7.神の山　カイラス（五百沢智也）「山と渓谷583号」1985年1月号
8.風雪は人を磨く（李舒平）「岳人464号」1986年2月号
9.日中合同納木那尼峰先遣隊1984報告書　日中友好納木那尼峰合同登山隊
10.ナムナニ（日中友好納木那尼峰合同登山隊）毎日新聞社　1986年6月　6,900円
11.聖山巡礼（玉村和彦）　山と渓谷社　1987年5月　1,800円
12.聖地巡礼とナムナニ峰偵察・1984年　「年報・HIMALAYA　3号」　日本ヒマラヤ協会　1986年9月15日

5) クーラ・カンリ（Kula kangri）7,554m、カルジャン（Karjiang）7,216m

1.天帝の峰クーラ・カンリを目指して（長谷川浩）「岳人464号」1986年2月号
2.微笑んだ「天帝の峰」クーラ・カンリ「山と渓谷610号」1986年8月号
3.クーラ・カンリ初登頂－そして東チベットから成都へ初横断－（神戸大学西蔵学術登山隊）「岳人472号」1986年10月号
4.神領の峰へ（ＨＡＪカルジャン登山隊）「ヒマラヤ179号」1986年10月号
5.烈風の頂へ－卡熱疆峰初登頂の記録－　「ヒマラヤ182号」1987年1月号

6) カン・ペン・チン（Can Ben Chen）7,281m&ポーロン・リ（Porong Ri）7,292m

1.カンペンチン（京都大学学士山岳会）毎日新聞社　昭和58年7月5日　6,700円
2.チベット旅情（カンペンチン初登頂）斉藤清明　芙蓉書房　昭和58年7月15日　1,500円
3.チベットをゆく京都大学学士山岳会（カンペンチン登頂と学術調査82，3～5）レポーター永田秀樹「岳人421号」1982年7月号
4.Der Bergmorgen 3号（故　和田実君追悼号　Porong Ri報告）大分R.C.C.　昭和58年5月17日
5.カンペンチン（森本陸世）「山岳第78年」日本山岳会　1983年12月　3,000円

6.ポーロン・リ登頂（梅木秀徳）「山岳第78年」日本山岳会　1983年12月　3,000円

7.チベット高原学術登山隊1982概要報告書　京都大学学士山岳会

7）チョー・オュー（Cho Oyu）8,201m、チョー・ウィ（Cho Aui）7,354m、ラプチェ・カン（Labuche Kang）7,367m

1.卓奥友峰登頂（張俊岩・成天亮）「ヒマラヤ177号」1986年8月号

2.乔烏衣登山計画「ヒマラヤ179号」1986年10月号

3.拉普契干峰偵察報告「ヒマラヤ181号」1986年12月号

4.乔烏衣登山報告「ヒマラヤ182号」1987年1月号

5.端正な未踏峰チョー・ウィ登頂（日本ヒマラヤ協会隊）「岳人476号」1987年2月号

6.乔烏衣登山報告書（日本ヒマラヤ協会チョー・アウィ登山隊1986年実行委員会）1986年11月15日

8）ニェンチェンタングラ（Nyainqentanglha）7,162m

1.東北大学日中友好西蔵学術登山隊報告書（東北大学日中友好西蔵学術登山隊実行委員会）1986年9月

9）ニンチンカンサ（Ningchin Kangsha）7,191m

1.第2次チベット・ヒマラヤ登山隊報告書　ニンチンカンサ登山隊・東チベット踏査隊　1985大分県山岳連盟（松元徹編）大分県山岳連盟　1986年12月　1,800円

10）チャンツェ（Zhangzi）7,553m

1.チベット友誼の華長存－1986年チャンツェ峰合同登山研修隊報告書－（第6次日中合同登山技術研修会）1986年8月24日

（そ　の　他）

1.中国の高峰　中国登山協会監修　東京新聞出版局　昭和56年1月29日　2,000円

2.中国登山ハンドブック（未知、秘境、未踏の山総ガイド）上越山岳協会　ベースボールマガジン社　1981年　1,800円

3.中国の山へのアプローチ（阿部淳）「ヒマラヤ104号」1980年6月号

4.世界のアルピニストがねらう中国の山々（王鳳桐）「月刊　人民中国」1982年5月号

5.開かれた中国の高峰「岳人400号」1980年10月号

6.中国登山レギュレーション全文対訳「岩と雪75号」

7.中国にくる外国の登山団体・登山旅行団の費用徴収についての規則「岳人409号」1981年7月号

8.進む中国奥地の山岳研究（渡辺義一郎）「岳人415号」1982年1月号

9.チベット南東部の氷河（鄭本興）「岩と雪80号」

10.東チベット紀行（ドウオグ村の人とその暮し）江本嘉伸「山と渓谷560号」1983年7月号

11.中国登山協会一行来日「岩と雪98号」

12.これからの中国登山「ヒマラヤ142号」1983年9月号

13.中国登山研究「ヒマラヤ142号」

14.チベットおよびその付近の山々（フランク・ブースマン／水野勉・訳）「山岳第78年」日本山岳会　1983年12月1日　3,500円

15.ルンタの秘境（江本嘉伸）光文社　1984年4月30日　980円

16.西蔵・聖地カイラス巡礼（ＮＨＫ取材班）日本放送出版協会　昭和60年6月1日　1,700円

17.中国大陸・下巻　天壌無限（白川義員）小学館　28,000円

18.氷山雪嶺二千年（周正）譚佐強／田川常雄・訳　ベースボールマガジン社　1985年3月10日　2,200円

19.天上の道－憧憬のラサへ（トーマス・レイヤード）「山と渓谷597号」1985年11月号

20.中国西域紀行（風見武秀）「岳人460号」1985年10月号

21.初のヒマラヤ横断1,000㎞（山里寿男）「岳人461号」1985年11月号

22.チベット研究文献目録「日本文・中国文篇」1887年～1977年（貞兼綾子編）亜細亜大学アジア研究所　昭和57年4月10日　6,500円

23.ヒマラヤ文献目録（薬師義美編）白水社
1984年1月25日　19,000円
24.ラサへのあこがれ（D.レイフィールド著、水野勉訳）日本山書の会　1985年11月 4,500円
25.憧憬の中国、西遊の7,000㎞「山と渓谷611号」1986年9月号
26.チベットおよびその付近の山々補遺（水野勉）「山岳第80年」日本山岳会　1985年12月20日　3,500円
27.ヒマラヤ文献逍遥（水野勉）鹿鳴荘　1986年3月　18,000円
28.世界無銭旅行者・矢島保治郎（浅田晃彦）筑摩書房　1986年6月　1,600円
29.中国登山研究会（日本ヒマラヤ協会）「ヒマラヤ174号」1986年5月号
30.中国登山の和文参考資料一覧（日本ヒマラヤ協会）「ヒマラヤ175号」1986年6月号
31.躍進するチベット登山協会（山森欣一）「ヒマラヤ176号」1986年7月号
32.中国登山研究会「ヒマラヤ184号」1987年3月号　500円
33.チベットの秘峰・チョモラーリ（張俊岩）「ヒマラヤ184号」1987年3月号
34.中国の費用徴収規定（1987年1月発効）「ヒマラヤ186号」1987年5月号
35.東チベット紀行（E・タイクマン、水野勉訳）白水社　1986年7月5日　2,200円
36.チベットわが祖国－ダライ・ラマ自叙伝－（木村肥佐生訳）亜細亜大学アジア研究所　1986年1月15日　1,800円
37.チベット入門（ペマ・ギャルポ）日中出版　1987年1月25日　1,800円
38.中国とたたかったチベット人（J・ノルブ編著、ペマ・ギャルポ／三浦順子共訳）日中出版　1987年1月25日　1,800円
39.入蔵日誌（矢島保治郎）チベット文化研究所　1983年1月22日　1,800円
40.チベットの都・ラサ案内（金子英一）平河出版社　1982年6月20日　2,700円
41.チベットの七年（ハインリヒ・ハラー、福田宏年訳）白水社　1981年9月25日　3,500円
42.チベットの旅（中国人民美術出版社編）美乃美　1981年5月20日　1,500円
43.チベット（多田等観）岩波書店　1982年　800円
44.チベット紀行（ＮＨＫ取材班）日本放送出版協会　1982年　1,500円
45.チベット放浪（藤原新也）朝日新聞社　1982年　900円
46.写真集　チベット（ユーゴスラヴィア・レビュー社／中国上海美術出版社）ベースボール・マガジン社　1982年　9,800円
47.チベット（篠山紀信）朝日新聞社　1982年　6,000円
48.チベット潜行十年　中公文書（木村肥佐生）中央公論社　1982年　400円
49.チベット滞在記（多田等観・牧野文子編）白水社　1984年　1,800円
50.女性大使チベットを行く（劉曼卿著／岡崎俊夫・松枝茂夫共訳）白水社　1986年8月30日　2,200円

※以上の文献は、比較的入手し易いものをまとめてみました。

ギャラ・ペリ周辺のチベット語

（1985年9月、主にヤル・ツァンポー左岸で聞き取ったもの：山森）

犬	チ	鳥打ち帽子	オシャ
帽子	ボート	靴下	ワッツ
眼鏡	ミシ	時計	チュツェ
トランプ	タクシ	手	ラッパ
指	ズゴ	足	コンバ（カンバ）
頭	ゴ	刀	ツゥゴ
ナイフ	テッレッ（テップチ）	マッチ	ラクタ
ローソク	ラ	手拭	ラリ
乳	ババ	肩	パタ
口笛	スイジュンビ	股引き	カマママ
熊	ドン	豚	（ラ）パ
挟み	ジャンツェ	バンド	ケラ
髪の毛	シタ	カセット	ツディ
歯	ソ	唇	チュボン
上着	テドン	鼻	ナクン（ナゴン）
目	メイ	耳	ナァ
ピューマ	チェ（チ）	カップ	ポロ
お盆	デゼ	ペフマット	ディン（デン）
夏天	ヤッ	首	ジンバ
薬	シダム	顎ひげ	オゾン
舌	チェッ	爪	セモン
喉	ミッパ（オンビ）	靴	ハンム
鶏	ジャボ	猿	ピュー
金玉	ジェ	ラジカセ	ツデッ
さいころ振りゲーム	ショ	水鉄砲状の遊び具	ロ（ル）

＊何処にもなまっているのがいますので、そのへんを考慮してください。

ご協力者名簿

此の度の本登山隊の派遣につきましては、多くの方々より物心両面にわたる御援助・御協力を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

たいへんありがとうございました。

（ア　行）
㈱ＩＣＩ石井スポーツ
㈱栄太楼総本舗
大　塚　岩　生
大　西　　保
（カ　行）
神　長　幹　雄
キッコーマン㈱
㈱木村コーヒー
近　喰　　司
（サ　行）
在日中国大使館
在中日本大使館
山陽スコット㈱
塩　田　純　一
昭和マツタカ㈱
白　西　紳一郎
菅　沼　　勲
杉　本　忠　男
鈴　木　雄　一
セメダイン㈱
（タ　行）
太陽工業㈱
㈲ダックス
西蔵国際体育旅遊公司
西蔵登山協会
中国登山協会
出　口　　當
東海漬物製造㈱
㈱トーモク
東　　レ　㈱
（ナ　行）
ニッカウヰスキー㈱
㈳日中協会
日本アラジンインターナショナル㈱
日本エフ・ディ㈱
日本紅茶㈱
日本タッパウェア㈱
日本ポラロイド㈱
（ハ　行）
ハウス食品工業㈱
日立マクセル㈱
富士写真フィルム㈱
藤森工業㈱
ほてい缶詰㈱
（マ　行）
松　田　研　一
ミヤコ・スポーツ㈱
宮　崎　久　夫
明星食品㈱
村　松　　昭
明治大学炉辺会
名放ツーリスト㈱
（ヤ　行）
八重洲無線㈱
矢崎化工㈱
山と渓谷社
（ラ　行）
リーベルマン・ウェルシュリー

編　集　後　記

1986年の秋は、当初、ブータンのガンケル・プンスムへ出かける予定であった。少数精鋭のチームで前年の雪辱を果すべく準備を進めていたが、ブータン政府の７名以上のグループでないと許可出来ないと云う規則に阻まれ、86年秋のガンケルは見送らざるを得なくなった。６月にガンケル隊の派遣断念が正式に決定した後、急遽、ギャラ・ペリへ向うことになった。すっかりレールの引かれたところへ途中から参加することは、非常に心苦しく申し訳ない気持で一杯であった。然し、ヒマラヤの未踏峰に憧れる者にとってヤル・ツァンポーの大湾曲部に聳えるナムチャバルワとギャラ・ペリは、まさに垂涎の未踏峰であり、この２つの玉峰を前にしては逡巡する気持も吹き飛んでしまい、不遜ながらこの千載一遇の機会に参加させて頂いた。

約３ケ月間に及んだ東チベットの山旅は、振り返えると苦しくも楽しい想い出で一杯である。特に道なき道を切り開きながら進んだアプローチなどは久しく忘れていた喜びを思い出させてくれた。ギャラ・ペリは、洋菓子の甘さとは一味違う、あのドテッとした餡子のような甘さの山だった。

一日も早くお世話になった方々に登山隊の模様をお伝いすべく報告書の発行準備に取りかかったが、毎度の事ながら夢に喰われる時間が多く、すっかり遅くなってしまった。

当初の構想とは大きくかけ離れ、拙い報告書となってしまったが、我々の行動の軌跡とナムチャバルワにかける飽くなき熱望を汲みとって貰えれば有難い。

最後に中文サマリーを心良くお引き受け下さった中国人留学生の楊玉明氏と「山と渓谷」のカラーグラビアをご提供下さった山と渓谷社に深甚の謝意を申し上げます。唯、巻末のページは版形の違うものを製本したため、文章の断ち切りなど読みにくい点がでました。カラー写真だけでも見て貰えれば幸甚に存じます。

（尾形）

— 謎の河の秘峰 —

ギャラ・ペリ

昭和62年９月１日発行

発行人　ＨＡＪギャラ・ペリ登山隊
１９８６年

編集人　尾形好雄

発行所　日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場３-23-1
淀橋食糧ビル506号

☎ 03-367-8521

頸城の山々を背後に、雪倉岳西面の大斜面を登りつめる。

AI GYALA PERI EXPEDITION 1986

初登頂を終え、ＣＩからＣＩのやせた雪稜を下る緊張の瞬間

東チベットの山々が現われる

ゼブラ岩のナイフリッジで

11時間の苦闘の末、ついに登頂

登攀隊長＝尾形好雄
隊員＝太田健、橋本康弘、今村裕隆、藤原拓夫

HAJ GYALA PERI EXPEDITION 198

ャラ・ペリに隣接したセンダムンプーの黎明。ようやく好天が訪れてきた

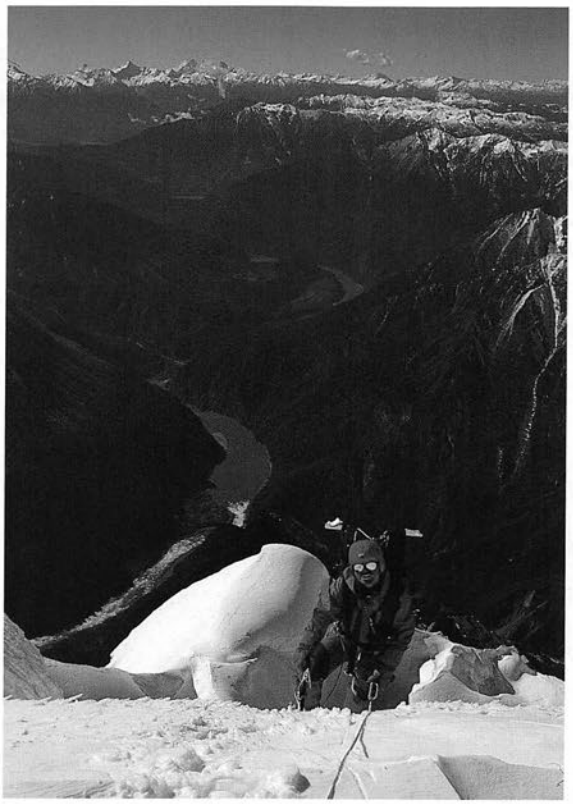
ナイフリッジ上にC1(五〇〇〇㍍)を設けたのは十月三日であった。

C1の上部は、雪と岩のミックスしたナイフリッジからやせた雪稜へと続き、さらに〝ゼブラ岩〟と名づけた急峻な雪壁を登ってスノードームへと上がる。十一日、スノードームを越えたコル状の所にC2(五六五〇㍍)を設営。

翌十二日、高度約六〇〇〇㍍地点で待望の南稜に飛び出す。一気に三〇〇〇㍍以上も切れ落ちた眼下には、ヤルツァンポーの流れが俯瞰できる。

南稜上に出ると、ルートはそれまでのやせた稜線とは対照的に幅広い雪壁となって、頂上まで急峻にせり上がるようになる。巨大な氷崖やクレバス帯が新たな障害として立ちはだかり、ルート・ファインディングに苦労させられる。

入山以来、ほとんど太陽を見ることのない悪天候の連続であったが、十月も下旬になってようやく好天が訪れた。風が日増しに冷たく感じられるなかで、十九日にC3(六二〇〇㍍)、二十一日にC4



ツァンポーの流れを眼下に見ながら、登高が続く。苦しい登りだ

BCでの休養ののち、二十九日、第一次隊の尾形、橋本、今村がアタックしたが、悪天に阻まれて約七〇〇〇㍍で断念。翌日、第二次隊の飛田、太田、藤原が頂上に向かったが、やはり天候悪く、一次隊とほぼ同じ地点で引き返した。

二度にわたる失敗ののち、三十一日、尾形、橋本、今村が再度アタックする。三次隊はC3からのアタックとなり、頂上までの高度差は約九〇〇㍍となった。二日間の悪天で、頂上への雪壁は新雪でおおわれてしまい、膝上の深いラッセルを強いられる。このため、予想以上に時間がかかり、頂上岩壁の基部に到達したのは一五時であった。頂上稜線直下ではアクロバティックな登攀を強いられるなど、最後の最後まで苦しめられたが、一一時間の苦闘の末、一六時五五分にギャラ・ペリの白い頂は、われわれの足もとなった。まさに今回の登山の苦闘を象徴するようなギリギリの登頂であった。

こうしてギャラ・ペリの初登頂を得たわれわれは、対岸にそびえるナムチャバ

ラ・ペリ西壁の全容。ルートは右手岩稜から南稜へ上がる

試登はおろか全容写真すらほとんどないまま、深いベールにおおわれてきた秘峰である。

日本ヒマラヤ協会(HAJ)では、中国登山協会および西蔵登山協会との継続折衝を経て、この秘峰の登山許可を取得した。この許可を得て一九八五年九月から十月にかけて偵察隊を派遣し、同峰の南西面をつぶさに観察して貴重な写真を持ち帰ってきた(本誌八六年二月号掲載)。

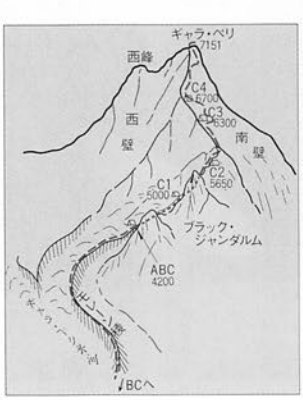
*

一九八六年九月四日、われわれはほかの三つのHAJ隊とともにチベットのラサへ入った。ラサで出発準備ののち、八日、中国側協力員三人とともにジープ、トラックでキャラバンのスタート地である米林県のペへ向かった。

ラサから車で二日間、東へ五〇〇キロも行くと、ここも同じチベットかと思うほど緑濃い景観となる。

十一日、キャラバン開始。ペ村の下流でヤルツァンポーを渡河し、左岸の道をたどる。左岸の道は、チュベという最奥の部落(一軒家)を過ぎるとかすかな踏み跡程度になってしまう。連日うんざりするほどの雨にたたかれながら、けもの道のような踏み跡を伐り開きのナタを振りながら進むアプローチは、これまで、どこのヒマラヤでも経験したことのないひどいものであった。

十五日、ヤルツァンポー河から離れてギャラ・ペリ氷河へと入る。氷河舌端にあるインゼルの対岸まで達したが、手前の激流を渡ることができず、この河原に隊荷を集結するハメになる。翌日、この激流に橋をかけて渡れるようになったものの、ポーターに帰られてしまったあとではこの地をBC(三一〇〇メートル)にせざるを得なかった。これでBCは予定より三

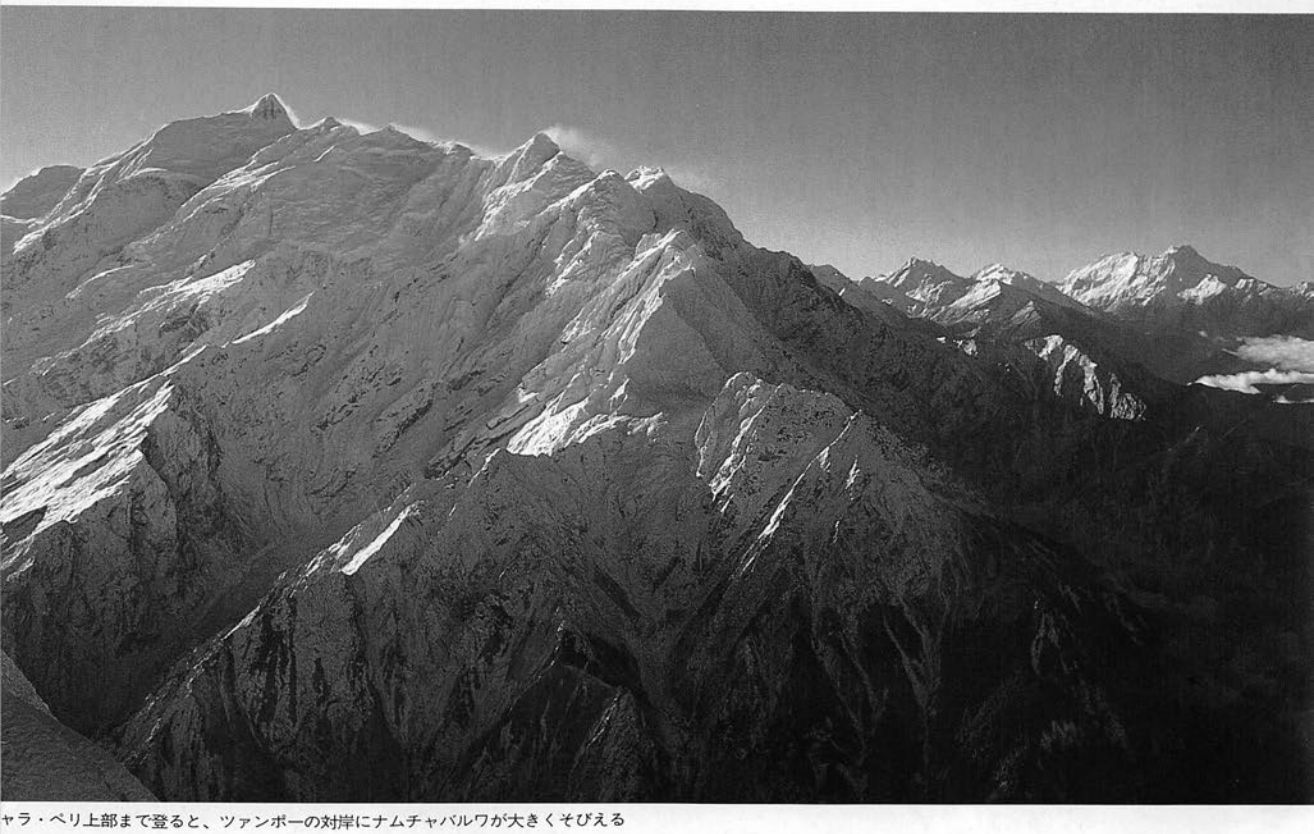


予定どおりギャラ・ペリ氷河左岸の長大なモレーン稜の最上部(四二〇〇メートル)に設営した。

ABCへの荷上げがほぼ完了したのち、二十六日から高所への登山活動に入った。

当初の計画では、西壁の頂上寄りに突き上げる岩稜をルートに予定していたが、ルート工作に向かった初日に雪崩の洗礼を受け、早々にあきらめる。西壁内は、ひとたび雪が降れば雪崩のオンパレードとなり、とても恐ろしくて近づけなかった。ちなみに十月十二日の深夜に発生した大雪崩は、その爆風でABCのテントを一〇〇メートルも下方へ吹き飛ばした。テントには、幸いだれもいなかったので、重大事故には至らなかった。

結局、ルートは西壁の右端を縁どる長



ャラ・ペリ上部まで登ると、ツァンポーの対岸にナムチャバルワが大きくそびえる

HAJ GYALA PERI EXPEDITION 1986

謎の大河にそびえる幻の高峰「ギャラ・ペリ」

日本ヒマラヤ協会ギャラ・ペリ登山隊の記録から

写真と文＝尾形好雄

チベットの西部、聖地マナサロワール湖の近くに源を発したヤルツァンポー河は、チベット高原を約一五〇〇㌔東流したのち、突然流れを南西に転じて大ヒマラヤ主脈を貫き、その名をブラマプトラ河と変えてインドのアッサム平原へと流れ落ち、やがてベンガル湾へと注ぐ。

この「グレート・ベント」と称される大湾曲部で、ヤルツァンポー河は、世界

（メートル）と幻の高峰ギャラ・ペリ（七一五一メートル）の間を断ち切る、深さ五〇〇〇メートル近い大峡谷を成している。この天険の関門によって、ヤルツァンポーとブラマプトラのつながり部分は長い間解明されず、この両大河が同じ河なのかどうか、前世紀までは〝謎〟とされていた。

ギャラ・ペリはこの大湾曲部の北側に位置する高峰であるが、対岸にそびえる

ツァンポーを渡河し、左岸沿いの道をティンペ村へと向かう

ＢＣに集まった大勢のポーターたちとともに